41260
教科書文庫
4
920
42-1936
20000
71209

磯畑せい
村瀬初代 共著

新裁縫教科書

巻二

広島大学図書
2000071209

中等學校教科書株式會社

4b
930
昭11

資料室

文部省檢定濟

昭和十一年十二月七日　高等女學校裁縫科・實業學校家事及裁縫科用

教科書文庫
4
920
42-1936
2000071209

磯畑せい
村瀬初代　共著

新裁縫教科書

卷二

広島大学図書
2000071209

広島大学
教
71209
図書

中等學校教科書株式會社

凡　例

1. 本書は文部省所定の教授要目に準據して,高等女學校·女子師範學校及びこれ等と同程度の各種女學校の裁縫科教科書として編纂したものである。

2. 裁縫教授の効果は基礎教授の徹底に俟つものが多い。本書は,裁縫の基礎知識を充分理解し得るやう組織的に整理し,それによつて技術の上達と應用·創作の能力養成とを期した。

3. 洋裁の教材はその範圍廣く,種類が多種多樣であり,且つスタイルの流行變遷に伴ひ,裁方·縫方にも變化がある。本書は,それ等の基調たるべき型の殆んど全部について,その型紙のつくり方,布の裁方·縫方を説明し,以て流行の變化に際し,自由に應用し得るやう注意を拂つた。

4. 從來,和服裁縫上の名稱が不完全なため,教授上少なからざる不便があつた。本書は,その不便を除くため充分の創意を加へた。

5. 學習者の理解を助け且つ自學自習に便ならしめるため,記述を懇切にし,著者の新工夫

に成る挿圖を多くした。なほ洋裁の色刷圖は單なる參考圖ではなく,本文の記述と完全に有機的な連絡を保つたものであるから,教授上にも自學自習上にも多大の便宜あるべきことと信ずる。

6. 製圖と型紙のつくり方とは,著者多年にわたる實際の經驗により,最も簡易な方法でなし得るやう工夫したものであり,且つ總べて實物の正しい縮尺を以てした。

7. 教材は,地方の狀況,教授時數等に應じて取捨選擇を自由にし得るやう,その配列に注意した。

昭和十年十一月

著者識

目次

第一章 袷羽織……1

第一節 女物袷羽織……1

1. 着物と異る點……1

2. 女物羽織仕立上寸法割出表……3

3. 裁方……4

4. 仕立方……6

第二節 男物袷羽織……21

1. 男物羽織仕立上寸法割出表……22

2. 裁方……22

3. 仕立方……22

4. 仕立方別法(袖開き附・衿鐵砲附)……24

第三節 襠無羽織……27

第四節 中裁・小裁羽織……28

1. 中裁・小裁羽織仕立上寸法割出表……29

2. 中裁……30

3. 小裁……31

4. 仕立方……33

第二章 綿入羽織……34

第一節 袖無羽織……34
1. 仕立上寸法……34
2. 裁 方……35
3. 仕立方(綿入……36
第二節 女物綿入羽織……40
第三章 絹布·毛織物·麻布類……43
第一節 絹布の縫方……43
第二節 絹布·毛織物の繕ひ方……45
1. 接 方……45
2. 繼 方……46
第三節 絹布單衣……48
第四節 毛織物の仕立方……54
第五節 麻 布……56
第四章 紋 章……57
第五章 單羽織……59
第一節 男物單羽織……59
第二節 女物單羽織……66
第六章 軟質絹布袷……67
第一節 軟質絹布の布合練習……67
第二節 小 袖……68

第七章 厚地帶……70
第一節 全 帶……70
第二節 男 帶……72
第八章 被 布……75
1. 小衿竪衿の仕立上寸法及び割出方……76
2. 裁 方……76
3. 仕立方……79
紐結……84
第九章 コート……87
1. 種類及び地質……87
2. コートの形……88
3. 仕立上寸法割出方……89
第一節 單長コート(道行衿)……90
1. 裁 方……90
2. 標 附……91
3. 縫 方……93
第二節 袷長コート……99
第三節 へちま衿コート……101
第四節 オーバ衿……104
1. 型紙の裁方……104

2. 衿布の裁方……105
3. 縫　方……105
第五節　袷半コート……106
第十章　袴……107
第一節　女　袴……107
1. 名　稱……107
2. 用布の地質……107
3. 女袴寸法表……108
4. 裁　方……109
5. 仕立方……112
第二節　男　袴……120
1. 男袴の形と名稱……121
2. 男袴寸法表……122
3. 用布の地質……123
4. 裁　方……123
5. 仕立方……126
第三節　中裁·小裁裁方……142
1. 中裁(15,16歳)……142
2. 中裁(12,13歳)……143
3. 小裁(6,7歳)……143
第一節　小袖重……145

第一節　小袖重……145
1. 小袖重……145
2. 重をつくる時の注意……145
3. 裁　方……148
4. 下着寸法詰方表……150
5. 仕立方……151
6. 儀式服……152
7. 模　様……153
第二節　比　翼……156
第一種　附比翼……156
第二種　本比翼……158
第三節　單衣重……166
第一種　本　重……167
第二種　半　重……171
第十二章　夜具類……172
1. 用　布……172
2. 用　綿……172
第一節　夜　着……172
1. 種　類……172
2. 夜着の形……173
3. 夜着仕上寸法……175

4. 裁　方……176
5. 仕立方……176
6. 同　上……178
第二節　蒲團……184
1. 種　類……184
2. 敷蒲團……184
3. 掛蒲團……185
4. 座蒲團……186

新裁縫教科書

卷　二

第一章

袷　羽　織

第一節　女物袷羽織

1. 着物と異る點

(1) 袖　袖口布は表と共布を用ひ,袖口は毛抜合になつてゐる。

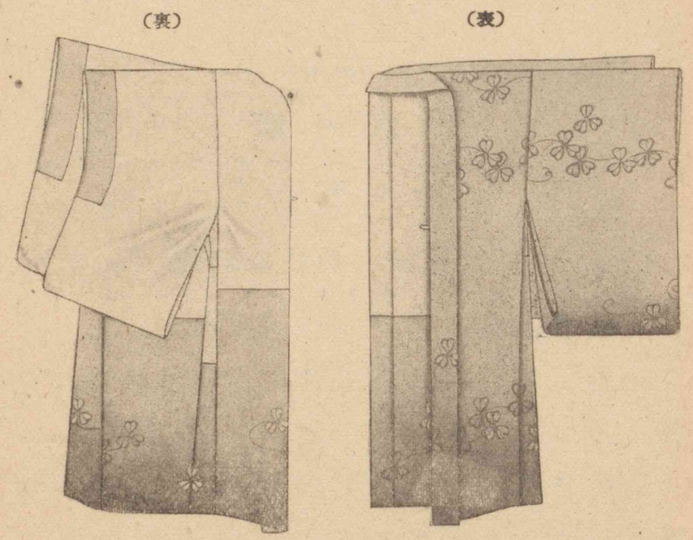
(2) 後身頃　丈は着丈の凡そ $\frac{3}{4}$ で,裾は,表布が折返しになつてゐる。

(3) 前身頃　肩で前身頃を後の方に繰越し,裾は表布が折返しになつて,前下りをつけてある。前幅は後幅より凡そ衿肩明だけ狹い。

(4) 襠　前後兩身頃の間に襠が入れてある。その幅は,裾で前幅の凡そ $\frac{1}{3}$ で,上の方は狹く。丈は裾から身八つ口までである。

(5) 衿　布を5枚ぐらゐの厚さに折り疊んで,前身頃の裏の方からつけ,表で絎けてある。

(6)乳　衽下りより10cm乃至12cm下つた衿附の所につけてある。



女物袷羽織

2. 女物羽織仕立上寸法割出表（着物の寸法を標準とする）

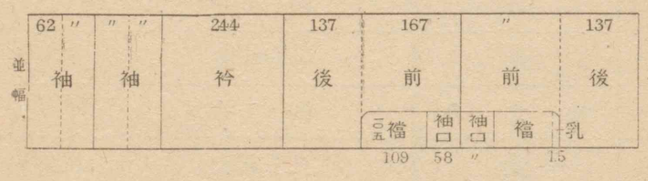
袖	丈	0.5 cm 乃至 1 cm 詰
	幅	0.4 cm 増
	口	同　寸
	附	0.5 cm 増
	袂丸み	同　寸
身頃	丈	凡そ着丈×$\frac{3}{4}$(100cm内外)
	衿肩明	0.5 cm 乃至 0.8 cm 増
	繰越	1 cm 増
	前下り	4 cm
	後幅	同　寸
	肩幅	同　寸
	身八つ口	10 cm
	前幅	裁目より 19 cm 内外 (後幅－衿肩明)
	乳附	肩より 34 cm 内外 (衽下り＋凡そ 12 cm)
襠幅	下	凡そ羽織の前幅×$\frac{1}{3}$(6.5 cm)
	上	凡そ 1.5 cm
衿幅		襠幅と同寸
裄		0.4 cm 増

3. 裁方

用布　表1反　裏凡そ半反

仕立上寸法　袖丈60 cm　身丈100 cm

身布丈　前後の差30 cm



積り方

總丈(1100cm) = (**袖布丈**(62cm) + **後布丈**(137cm)) × 4 + **衿布丈**(244cm) + **前後の差**(30cm) × 2

衿布丈(244cm) = (**身丈**(100cm) + 22 cm) × 2

22cm = **衿肩明**(約10cm) + **肩の繰越**(1cm) × 2 + **前下り**(4cm) + **衿先縫代**(6cm)

及び弛

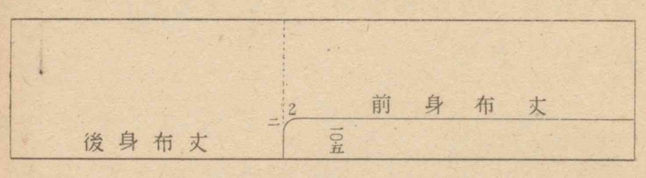
$$\text{後布丈} = \frac{\text{總丈} - (\text{袖布丈} \times 4 + \text{衿布丈} + \text{前後の差} \times 2)}{4}$$

前布丈(167cm) = **後布丈**(137cm) + **前後の差**(30cm)

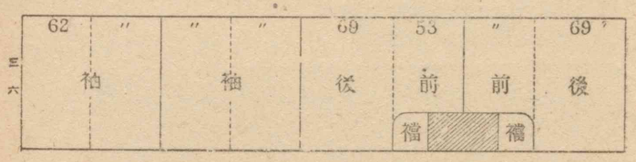
袖口布(58cm) = (**袖口明**(2 cm) + 6 cm) × 2

乳布 = 幅1.5 cm, 丈5 cm

身頃裁方



裏の裁方　用布　並幅492 cm



積り方

裏總丈(492cm) = **袖丈**(60cm) × 8 + **身丈**(100cm) × 10 + 112 cm − **表總丈**(1100cm)

112cm = 袖下縫代　2 cm × 8 = 16 cm

胴接代　2 cm × 8 = 16 cm

前下りとその縫代　5 cm × 4 = 20cm

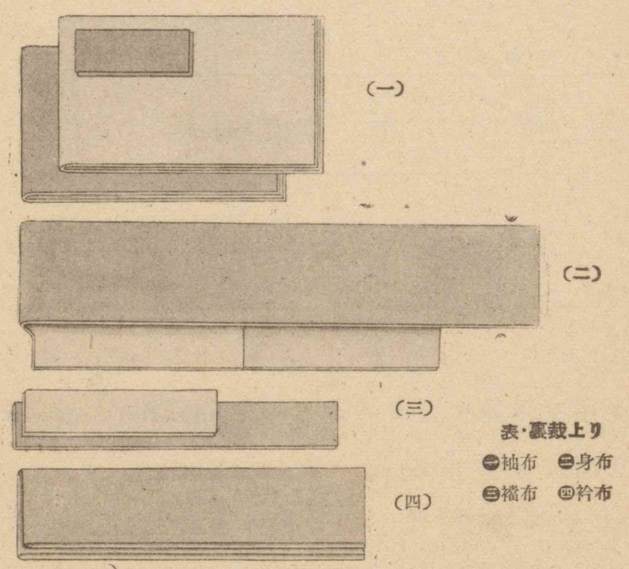
三つ衿縫代　1 cm × 8 = 8 cm

繰越　1 cm × 8 = 8 cm

衿の身丈より長く必要な分22 cm × 2 = 44 cm(22 cmの説明前頁參照).

注意 (1)裏總用布の長いときは,後胴接に縫込んでおけば,縫直しまたは別の裏に利用するときに便利である。

(2)前の裁落し方は,標附のときに表裏を合せてからする方が過ちがない。



4. 仕立方

(1)袖　着物の袖によく合ふやうに,寸法の**増減**に注意して縫ふ。

袖口布廻しかけの仕方

縫道　裏袖の方は標附通り。

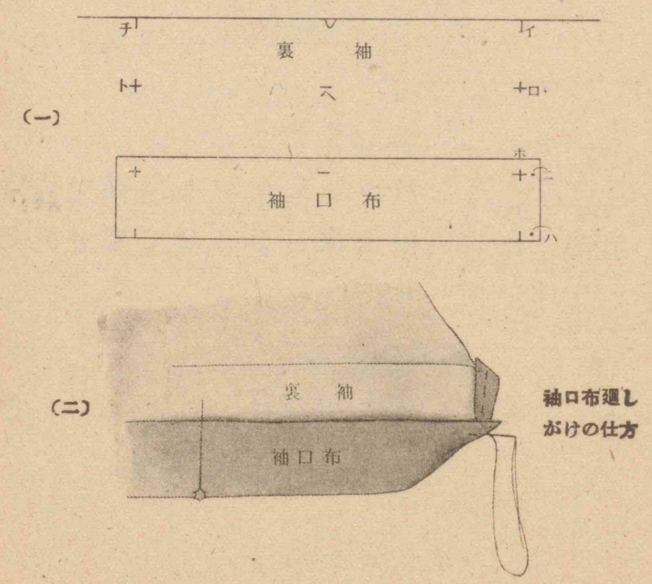
袖口布は,丈も幅も0.1cmの被がかかるやうに,標の外を縫道にする。

縫方　ハをイに,ニをロ交叉點に合せて縫ひ,絲をこき,1針返す。

ホの縫道をロ交叉點に合せて,への方に直角に縫ひ,トチも同様にする。

角は縫代を直角に折り,表に返す。

イチ間は,袖口布を張つて假綴をする。



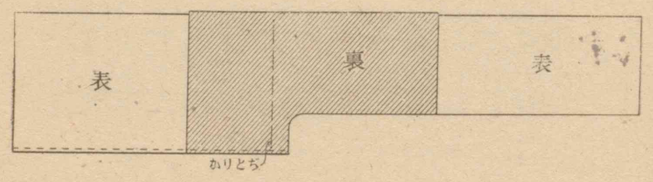
袖口布廻しかけの仕方

(2)身頃標附(縫直し物は,衿布丈を調べてから標す方が誤りがない)。

脊縫　表·裏を別々に縫ふ。

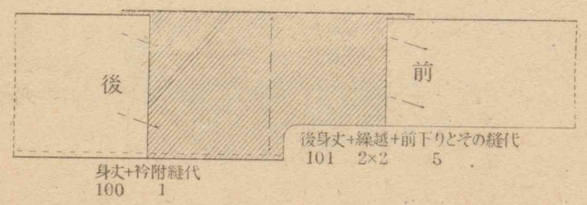
注意　脊を四つ縫にするときは,前下りと胴接をしてからするが,この仕方は,縫目が固くなつて形がよくない。

表裏の合せ方　机上で下圖のやうに表·裏を正しく合せ,脊と肩に假綴をする。



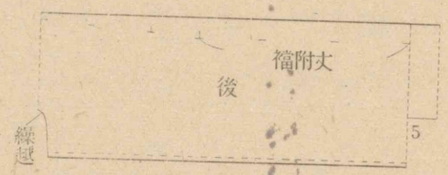
表·裏の合せ方

身丈の定め方　後·前各丈を計り,後裾の折返しは脊縫を合せ,前裾は裁目を合せて裾を直角に折り,待針で押へる。



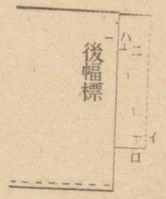
身丈の定め方

後身頃の標附　後は着物の通りにして,裾山·肩山·前下りの山に絲標をする。



後身頃標附

前下り標附



イ＝衿附の縫代　1.5cm乃至2cm

ロ＝前下り標　後裾より4.4cm

0.4cm＝被·見返とも0.2cmづつ。

ハ＝後裾より0.5cm

0.4cm＝被·見返とも0.2cmづつ。

0.1cm＝後襠附の縫道より長く必要な分。

ニ＝前幅標·後幅標より凡そ1cm。肥つた人は,後幅標の所をそのまま前幅標にする。

ハニ交叉點よりイロ交叉點に斜線を標して前下りの縫道とする。

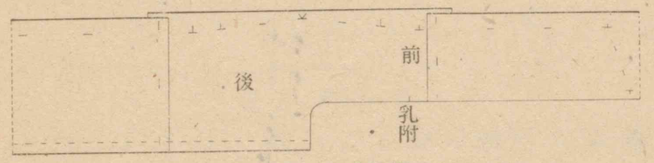
後身頃の身八つ口標から裾まで襠附丈を計つておく。

前身頃標附

前幅標はニに倣つて,身八つ口まで標す。

袖附の斜を標す(斜は後身頃より強くなる)。

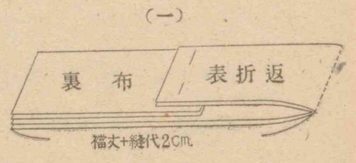
次に乳附と胴接の標をする。



前身頃標附

(3)襠標附

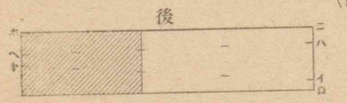
(一)表·裏兩襠布を各中表に合せて重ね,標附の襠丈を定め,接の標をする。



(二)圖のやうに合せて接ぎ,折は裏の方に返す。

(三)後身頃の襠附丈より0.2cmつめて襠丈を標して圖のやうに折り,假綴をなし兩襠の表を中に重ね,襠附の標をする。

(四)



(四)イロ＝前の縫代1cm

イハ＝下の襠幅+0.4cm

$$ホヘ = \frac{下の襠幅 - 上の襠幅}{3} + ハニ$$

ヘト＝上の襠幅＋0.4cm

ハニ·ホヘ＝後縫代

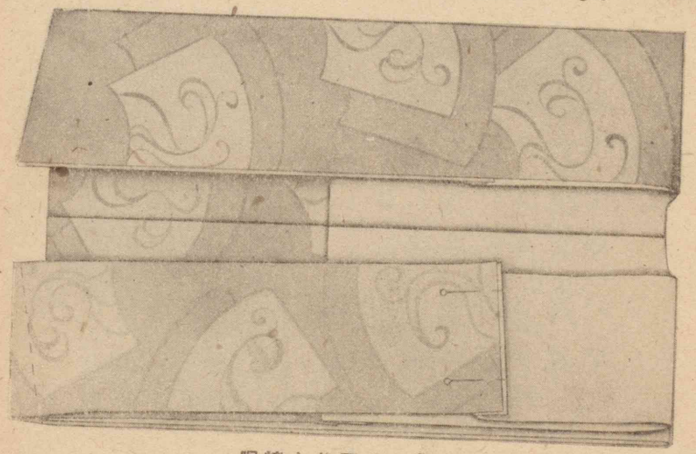
イト·ハへの間に襠附の標をして,裾山に絲標をする。

(4)身頃及び襠附

(一)後身頃の胴接をして縫代を裏の方に折る。

(二)前下り　布の裏を外に標通りに合せ,衿附に近い方は,裏を弛め加減に縫ひ,被と裏控を各0.2cmにして躾をする。

(三)前身頃の胴接　前下りの裏控で丈が0.4cm



胴接と前下りの縫方

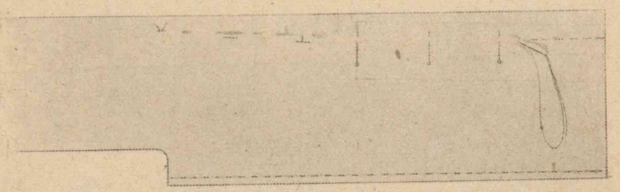
長くなつてゐるから,それだけ胴接で縫ひつめて折を裏の方に返す。

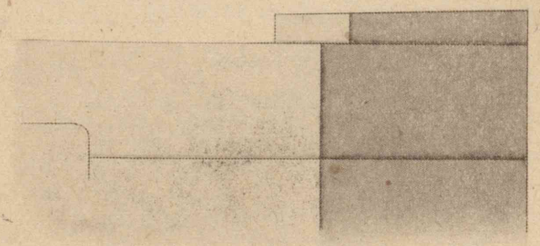
(四)身頃の表·裏の關係,後身丈と前身丈の關係などを調べ,未熟の間は,襠附の表·裏に合標をする方がよい。

(五)脊綴

(六)後襠附　襠は假綴のままで,後の表身頃を弛め加減に布合をする。次に表·裏兩身頃の合標を合せて四つ縫にし,襠の上は 3,4 度針を返して留め,身八つ口を縫ふ。

(一)



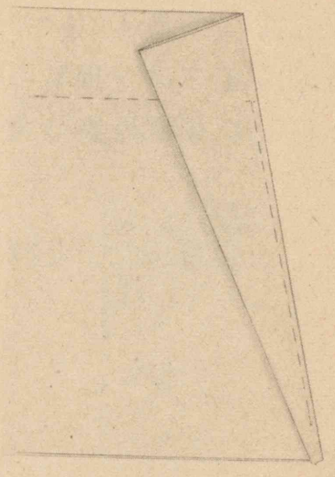


(二)

後襠附

㋐ 後身頃で襠を挾み四つ縫にする。
㋑ 縫上り。

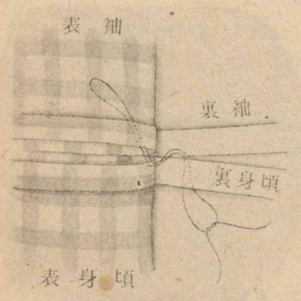
(七)前襠附　後と同じであるが,前下りの縫目の所は被を正し,1 針返して押へ,縫込は離して縫ふ。



前襠のつけ方

(5)袖附　着物と同じにする。

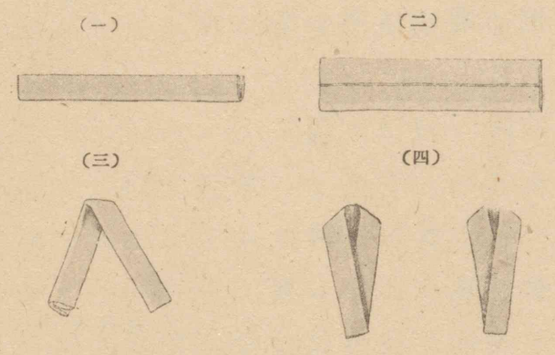
變り四つ留　袖附留は,着物·羽織の別なく,裏身頃と表袖が被布になるから,この仕方による方が自然である。針道は,布の重り順に,裏身頃の裏より裏袖·表身頃を貫き,表袖を抄ひ,表身頃·裏袖·裏身頃に戻つて結ぶ。



變り四つ留

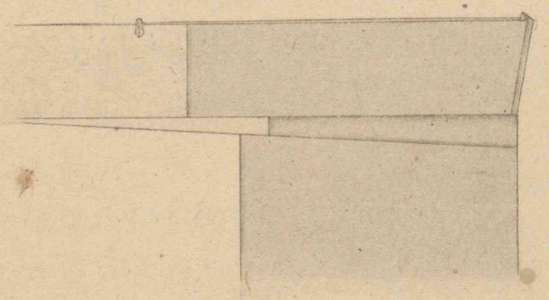
(6)前身頃の假綴　衿附際は表の方に折れるから,裏の幅を弛め加減に布合して,衿附の縫代に假綴をする。

(7)乳　乳布は幅1.5cm,丈凡そ5cmのもの2枚を裁ち,各幅を四つ折にしてから左右の別をつけて折り,前身頃の裏の方から縫代につけておく。



乳の折方

㊃出來上り(左方は女物の左,男物の右に,右方は女物の右,男物の左にする)。

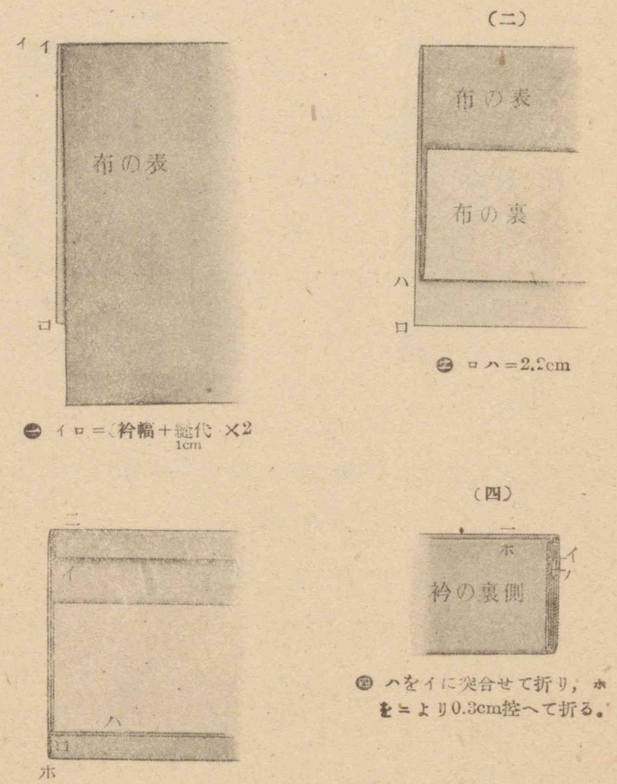


女物左乳のつけ方

(8)衿

衿布の折方

並幅衿



㊀ イロ＝(衿幅＋縫代1cm)×2

㊁ ロハ＝2.2cm

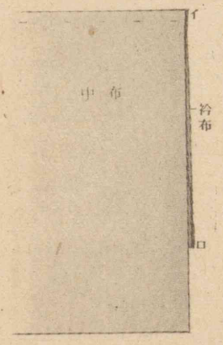
㊂ イニ＝1.3cm衿附縫代
1cm…縫代
0.1cm…被
0.2cm…身頃を衿より控へる分
ホロ＝1cm紮代

㊃ ハをイに突合せて折り,ホをニより0.3cm控へて折る。

半幅衿

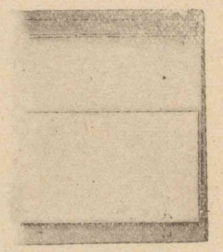
中布の上に衿布を重ね,衿布丈を張り加減にして綴ぢる。

(一)



イロ＝衿幅×2＋1cmの幅に折る。

(二)



イニ＝衿附縫代(1.3cm)
ロハ＝1.2cm
ハをイに突き合せ，ロをニより0.3cm控へて折る。

衿の標附　衿芯を衿幅より0.4cm狹く裁ち,中布の間に入れて,あらく假綴をする。

衿布丈の眞中,衿丈乳附に絲標をする。

衿附縫道　衿は1.3cmに折つた方を1cmの縫代にする。身頃は縫代を1cmにし前下りの方は標通り1.5cm乃至2cmにして,20cmほどの間で斜にする(次頁圖參照)。

注意　(1)衿附の縫道は,地質の硬軟,着用者の體格·姿勢·繰越,帶の結び方などの關係で多少加減しなければならぬことがある

(2)三つ衿の縫代は,好みにより深くして格好をつけることもある。

衿附布合　着物と反對に,裏の方から衿布の丈の眞中を脊縫に合せ,次のやうにする。

イロ＝衿布を0.1cm弛くする。

ロハ＝肩山の前後各2cmの間で身頃の縫代を伸し,縫道で衿布を平らに合せる(好によつては衿布を0.1cm弛くする)。

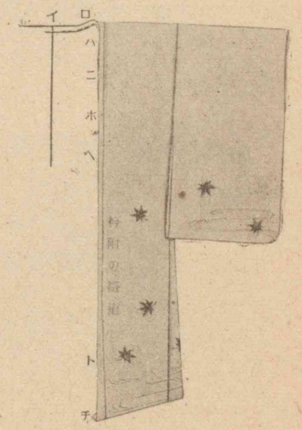
ハニ＝凡そ10cm,その間は衿布を0.1cm弛める

ニホ＝平らにする(ホは乳より6cm)。

ホヘ＝乳附の左右各6cmの間で衿布を凡そ0.2cm張る(地質によつて加減する)。

ヘト＝平らにする。

トチ＝衿布を弛め加減にする。

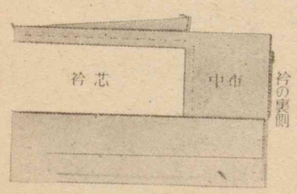


身頃の衿附縫道と布合の說明

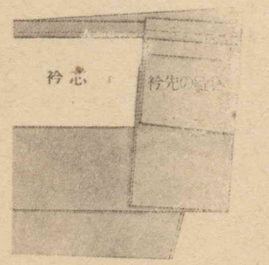
注意　乳附より上の布合は,衿の弛め加減で衿の折れ具合が異つて來るから,各自の好みによつて加減するがよい。

縫方　なるべく一針抜か抄縫にする。乳附の所は被をかけぬやうに縫代を少し深く返針にしてよく留めながら縫ふ。

衿先

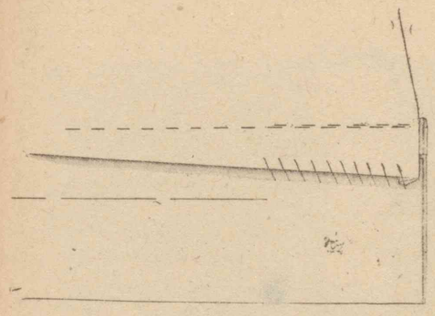


㊀芯は丈いつぱいに切る。
衿先は表・中・裏の各布を平らに合せて芯布より0.5cm先を縫ふ。



㊁衿先を直角に折り，縫込は幅を控へて衿附の縫目に返針で綴ぢつける。

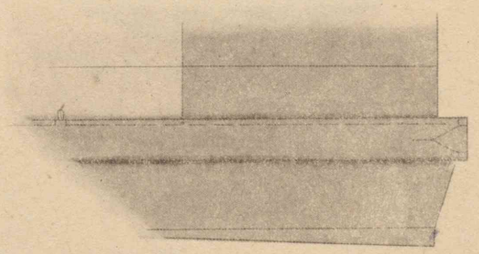
(三)



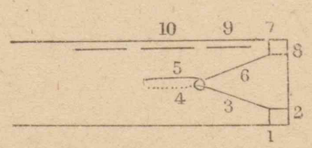
㊂中布と衿附の縫代を平らに合せてかがる。

衿絎　衿先の縫込の所は返絎にすることもある。また衿肩廻の間は衿附の縫目を1針ごとに抄つて絎ける(第一巻25頁本絎參照)

衿の躾



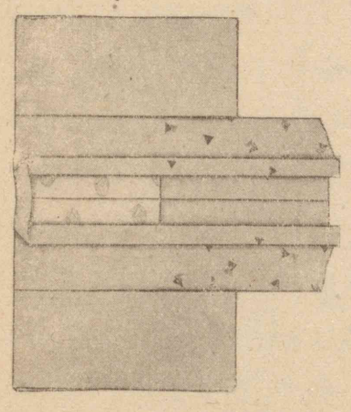
衿先の躾



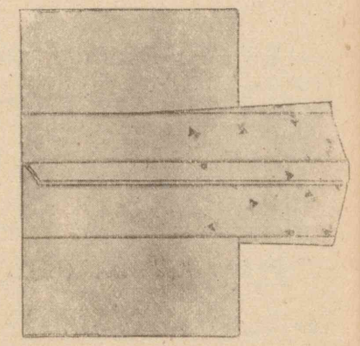
絲のかけ方順序

畳み方

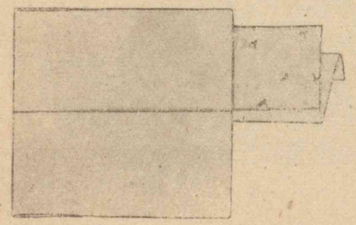
(一)



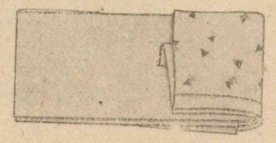
(二)



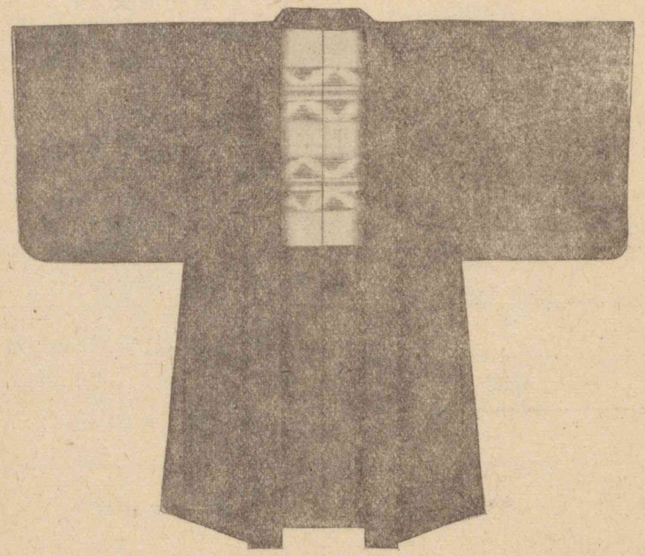
(三)



(四)



第二節 男物袷羽織



1. 男物羽織仕立上寸法割出表(着物の寸法を標準とする)

袖	丈	0.5cm增	身頃	丈	凡そ着丈×$\frac{3}{4}$ (105cm内外)
	幅	0.4cm增		衿肩明	0.5cm乃至0.8cm增
	口	同　寸		繰越	1cm内外
	附	袖丈全部		前下り	4cm
	袂丸み	同　寸		後幅	同　寸
襠幅	下	凡そ羽織の前幅×$\frac{1}{3}$(7cm)		肩幅	同　寸
	上	なし		前幅	裁目より21cm内外
衿幅		襠幅と同寸		乳附	肩より34cm
裄		0.4cm增			

2. 裁方　女物と同じである。

3. 仕立方

(イ)袖

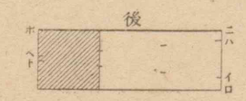
(1)標附　袖丈全部を袖附とする。

(2)縫方　袖下は袖附の方10cmほど表·裏を別縫にする。

(ロ)身頃及び襠

(1)標附　肩の繰越は,普通0.5cmにする。

襠丈＝後身頃襠附丈－0.3cm(女物より斜の度が多いため)



イロ＝1cm

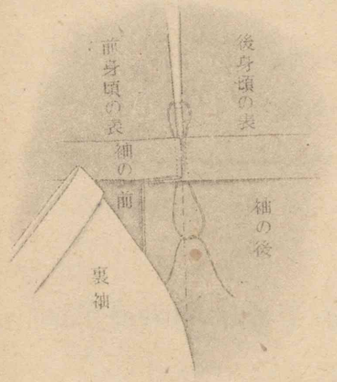
後襠附ホヘ＝$\frac{イハ}{3}$＋ニハ＋0.3cm

ヘト＝0. cm(被の分)

(2)縫方　女物と同じである。

(ハ)袖附

(1)表袖附　留の左右を返針に縫ひ,縫代を袖下の縫目に綴ぢつけること,男兒用の筒袖と同じである。

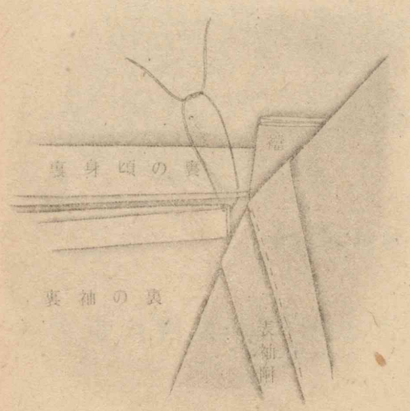


表袖附の留

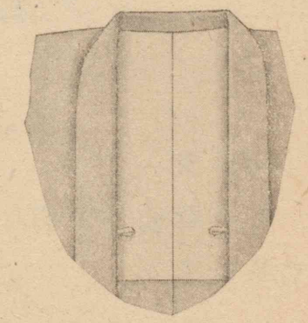
(2)裏袖附の留は,表の留とかち合ぬやうに,裏袖附を0.4cm詰め,袖附の縫代は身頃の方に返す。

(3)乳　合せ目を下に向けてつける。

(4)その他は女物と同じである。



裏袖附の留



男物の乳の附方

4. **仕立方別法**(袖開き附,衿鐵砲附) この仕方は,技術が熟練してからする方がよい。

(イ)袖口布をかけて袖口合をする。

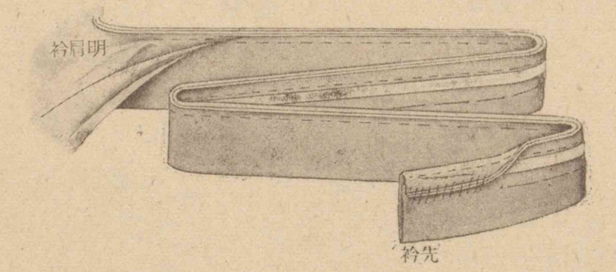
(ロ)身頃及び襠の標附(脊縫も四つ縫にするときは,脊縫をせずに布を重ねて標す)。

(ハ)前下り·胴接·脊の四つ縫をする。

(ニ)前身頃の表裏を合せ,衿附の部分に假綴をして乳をつける。

(ホ)衿鐵砲附。

(1)衿布を普通に折り,表と裏の縫代に25cmおきぐらゐに合標をして芯を綴ぢつける。



衿鐵砲附の仕方

(2)衿附

衿の縫道 表側は折より0.3cm裏側は折のすぐ際にする。

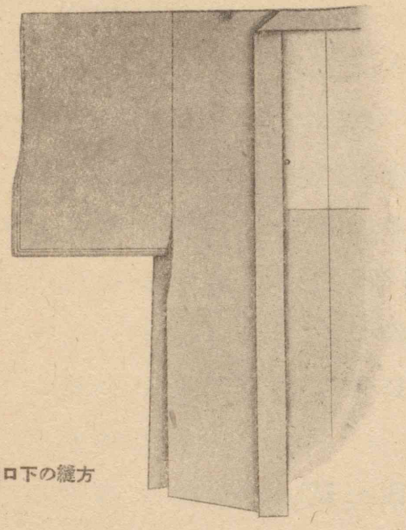
(3)布合 左半身だけ布合をして待針を打ち,前幅を衿幅の中に入る程度に輕く折り,衿幅でくるみ,合標を合せて,待針を打ち直し,一針拔にして衿肩明の10cm手前まで縫ひ,1針返し,衿肩廻は表衿だけつける。衿先は衿幅山の方から布合をして縫ひ,縫代を整へて綴ぢ,前身頃を靜かに引出しながら表に返す。

(4)右の方も同じにして衿肩を紮け,躾をかける。

(ヘ)後襠をつける(四つ縫)。

(ト)袖

(1)袖附 袖口を合せたままの袖を,表は全部つけ,裏は表裏兩袖で身頃をくるむやうにして布を合せ,前の方を下から10cmほど縫つて山の5cm手前まで明ける。絲留は表·裏とも標の1針手前で返留にする。



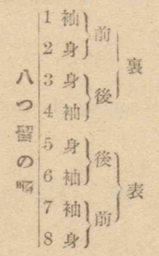
袖口下の縫方

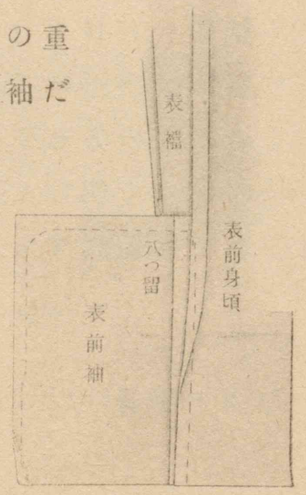
(2)袖　左圖のやうに身頃と袖を整へ,袖口留をして,袖口下を10cmほど四つ縫にする。

(3)袖の前を後に返して,下圖のやうに袖附と袖布を正しく合せる。

(4)袖附の八つ留及び袖の縫方　袖附の縫目を揃へ,布の重り順に針を貫き,かへりは袖だけ通して絲を結ぶ。

八つ留をした絲で袖下。袖口下を四つ縫にして表に返す。





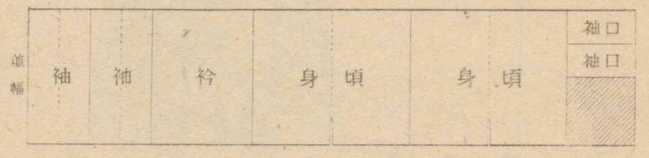
袖附の八つ留及び袖の縫方

(チ)前襠附　身頃の方に合標をなし,裏袖附の縫殘より裏にかへしてつける。

(リ)裏袖附のあけてある所を縫へるだけ縫つて,殘りを絎ける。

第三節　襠無羽織

1. 裁方　用布　並幅1反



2. 縫方　襠をつけないから,後幅は脇縫留まで肩幅と同寸にし,脇縫は裾の方を2cm乃至3cmほど擴げて斜に縫ふ。

3. 長所　縫方が簡單で脊返しも出來,着物にも直せるから,平常着としては經濟的である。

第四節　中裁小裁羽織

男兒用

女兒用

1. 中裁·小裁羽織仕立上寸法割出表(着物の寸法を標準とする)

名稱	種類		並幅四つ身裁(5〜7歳より10歳前後)	並幅三つ身裁(4,5歳)
袖	丈	袂袖	0.5 cm 詰	同
		筒袖	口の方1 cm 附の方1.5cm 增	同
		元祿袖	1 cm 增	同
	幅		0.4 cm 增	同
	口		同寸	同
	附		0.5cm 增	同
身頃	丈		着丈−20cm 內外(60cm 乃至90cm)	着丈−13cm(60cm 內外)
	衿肩明		0.5 cm 增	同
	繰越		0.5 cm	同
	前下り		2 cm 乃至 4 cm	2cm
	後幅		同寸	同
	肩幅		同寸	同
	身八つ口		8 cm	同
	前幅		後幅の標通り	同
	乳附		衽下り＋10cm 乃至12cm	同
襠幅	下		5cm 乃至5.5cm	5cm 內外
	上		下の幅の$\frac{1}{2}$乃至$\frac{1}{3}$	同
衿幅			0.5 cm 增	同
仕上裄			0.4 cm 增	同

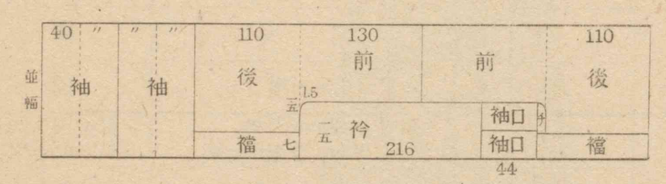
2. 中裁　四つ身羽織裁方

四つ身裁羽織は,着物の衽の部分を衿に,衿の部分を袖口と襠にする。

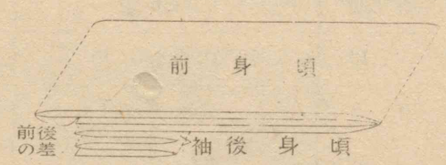
表　用布　並幅640cm

仕立上寸法　袖丈38cm　身丈90cm

身布丈前後の差20cm



積り方



総丈＝(袖布丈＋後布丈×4＋前後の差×2
640cm　40cm　110cm　20cm

後布丈＝総丈－(袖布丈×4＋前後の差×2)
4

前布丈＝後布丈＋前後の差
130cm　110cm　20cm

衿布丈＝(身丈＋16cm以上)×2

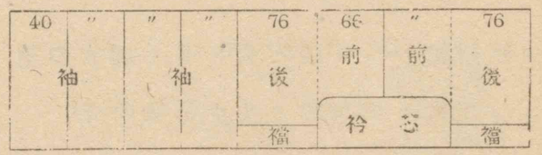
16cm＝衿肩明＋繰越×2＋前下り＋衿先縫代
7cm　0.5cm　3cm　5cm

袖口布丈＝(袖口明＋凡そ5cm)×2
44cm　17cm

襠布丈＝身丈＋三つ衿縫代と繰越－袖附と身八つ口
1cm　0.5cm　17cm　8cm

＋裾の折返(適宜)と襠上の縫代
1cm

裏の裁方　用布並幅444cm



積り方

裏総丈＝(袖丈＋身丈×8＋総縫代－表総丈
444cm　38cm　90cm　60cm　640cm

60cm＝袖下の縫代　2cm×8＝16cm

胴接縫代　2cm×8＝16cm

三つ衿縫代　1cm×8＝8cm

繰越　0.5cm×8＝4cm

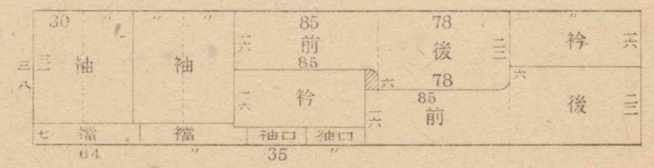
前下りと縫代　4cm×4＝16cm

2. 小裁　三つ身羽織裁方(片面物で4,5歳用)

表　用布　並幅361cm

仕立上寸法　袖丈28cm　身丈63cm

身布丈の前後の差 7cm



積り方

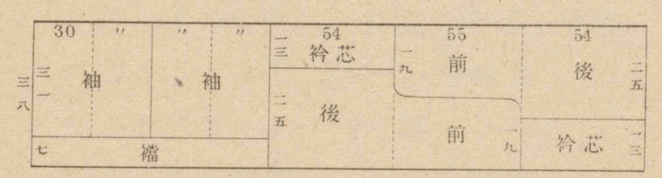
總丈＝袖布丈×4＋後布丈×3＋前後の差
(361cm　28cm　78cm　7cm)

後布丈＝(總丈－(袖布丈×4＋前後の差))／3
(78cm)

前布丈＝後布丈＋前後の差
(85cm　78cm　7cm)

裏の裁方

用布　並幅兩面物283cm



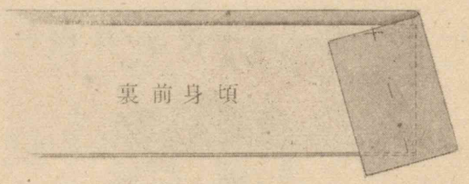
積り方

裏總丈＝袖丈×8＋身丈×6＋42cm－表總丈
(283cm　28cm　63cm　361cm)

42cm＝袖下の縫代	2cm×8	＝16cm
胴接縫代	2cm×6	＝12cm
三つ衿縫代	1cm×6	＝6cm
繰越	0.5cm×4	＝2cm
前下りと縫代	3cm×2	＝6cm

2.仕立方　大體大人物と同じである。

裾の折返しが少い時に,前下りをつけるには,胴接で圖のやうにする。

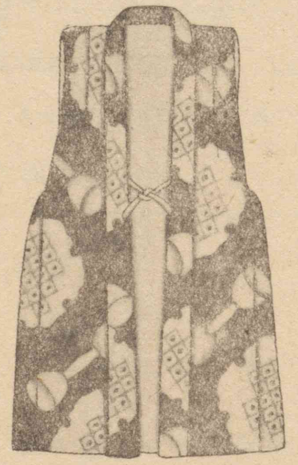


前下りを胴接でする仕方

第二章

綿入羽織

第一節 袖無羽織

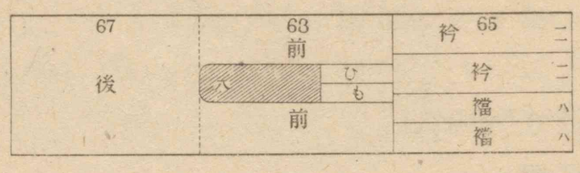


出來上り圖

1.仕立上寸法

身丈	55cm乃至60cm	紐附		肩より20cm
衿肩明(裁切)	4cm乃至4.5cm	襠幅	下	4.5cm乃至6cm
			上	3cm乃至4cm
繰越	0.5cm	紐丈		凡そ20cm
身幅	並幅(いつぱい)	衿幅		3.5cm乃至4cm
脇明	23cm乃至25cm			

2.裁方 表 用布並幅200cm 身丈55cm



積り方

後布丈 = 身丈 + 三つ衿縫代 + 裾の折返し
67cm　55cm　cm　11cm

前布丈 = 後布丈 + 繰越 × 2
68cm　67cm　0.5cm

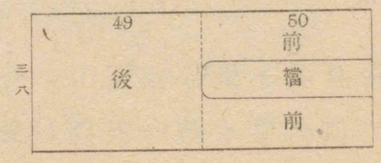
衿布丈 = 身丈 + 10 cm
65cm　55cm

10 cm = 衿肩明 + 繰越 + 衿の接代 + 衿先縫代
4cm　0.5cm×2　cm　4cm

總丈 = 後布丈 × 2 + 前後の差 + 衿布丈
200cm　67cm　1cm　65cm

後布丈 = (總丈 − (衿丈 + 前後の差)) / 2

裏裁方



積り方

裏總丈 = 身丈 × 4 + 衿丈 + 14 cm − 表總丈
99cm　55cm　65cm　200cm

14 cm = 胴接縫代　2 cm × 4 = 8 cm

三つ衿縫代　1 cm × 4 = 4 cm

繰越　0.5cm × 4 = 2 cm

嬰兒用袖無の衿には芯の代りに綿を入れ,或は衿と襠を省き,脇明と胸の部分とを刳り,前の裾を丸みにして格好を整へたものもある。

3. 仕立方(綿入)

(イ)標附

(1)身頃　袷羽織のやうに表·裏を重ね身丈を定め,身幅·脇明·胴接の標をする(8頁參照)。

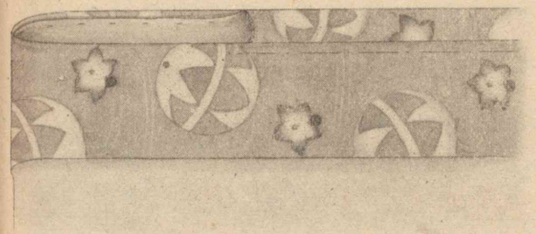
(2)襠　表裏の襠を必要の丈に接ぎ,兩襠の表を合せて標をする(10頁參照)。襠附の斜は前·後とも同じでよい。

(ロ)縫方

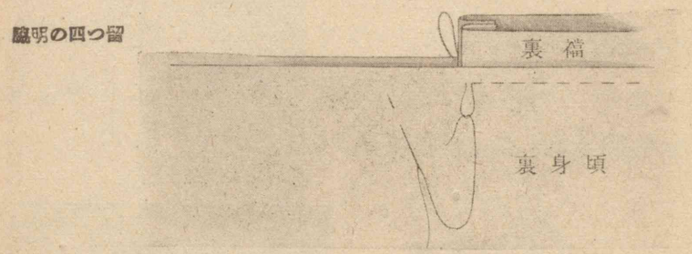
(1)胴接　前も後も脇から8cmの間で0.4cm縫込んで,脇明の裏をつめ,縫代を裏に返して隱躾をする。

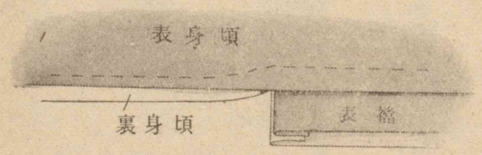
(2)襠附　後身頃と後襠の裾山を合せ,裾山は身頃を山弛に,他は襠を釣合張にし,身頃を見て縫ひ,縫代は身頃の方に折る。次に前身頃と襠を後と同じやうに縫ひ合せる。

(3)脇明



脇明の縫方
布合は裏控にして山は表山弛,他は裏釣合張にし襠の上で四つ留をしてから脇明を縫ふ。





裏控の縫方
幅標より表は0.5cm廣く,裏は0.5cm狹く縫ひ,裏に返して隱躾をする。

(4)襠の上の縫方　折山が0.4cmの被になるやうに縫ひ,表の方に綿を入れて,縫目に綴ぢつける(綿は凡そ幅3cm.丈上の襠幅ほどのもの)。

(5)紐幅を二つ折にして縫ひ,眞綿を入れ,羽織の乳附のやうに裏の方につける(14頁參照)。

(6)衿　衿布を割接する。次に(衿幅＋縫代)×

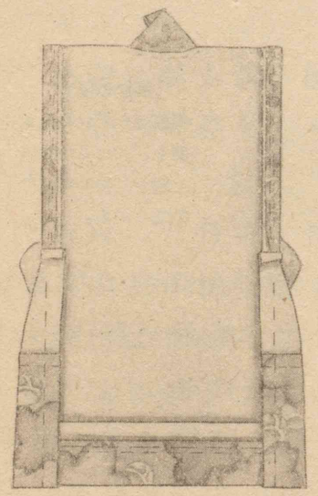
2の幅に折り,輪の方を裏身頃1枚につける。

注意 衿芯を入れる仕方は,半幅衿と同じに折り,身頃に綿を入れてからつける。

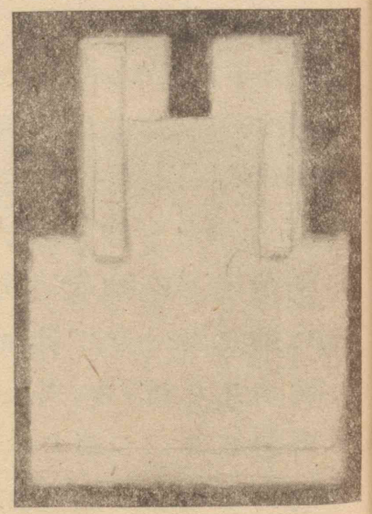
(7)綿入　表·裏兩前身頃を中に,後身頃の裏を上にして置き,眞綿を引く(一圖)。

二圖のやうに肩·裾·兩脇に綿を出して擴げ,裾には10cm幅,脇明には6cm幅ぐらゐの綿を1,2枚重ね,脇明の幅にならつて綿を折り,縫目に綴ぢつける。次に裾の綿は丈に合せて折り,肩と前幅の綿を表裏の間に入れて眞綿を引く。

(一)



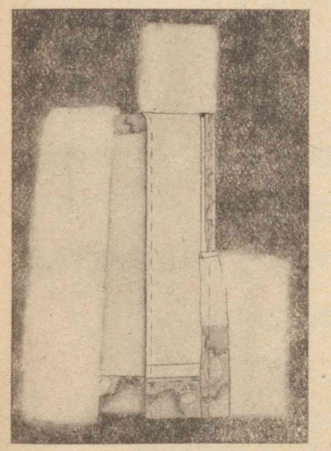
(二)



綿の入方

肩の表裏の間から兩手を入れ,裾の兩端を綿と一緒に持ち,卷きながら引きかへし,裏を上にしておく(三圖)。

(三)



綿の入方

左右の前身頃に眞綿をひき,綿を載せ,脇明の縫代に綿を綴ぢつけて表布を返す。

(8)綴　裾と脇明に表からよく綿を含めて假綴をする。次に前襠附を綴ぢ,衿附の部分の綿を薄くして表裏を綴ぢ合せる。

(9)衿紵　衿に綿を平らに入れ,衿先は袷羽織のやうに縫ひ,縫込を衿附の縫目に綴ぢて衿紵をする。三つ衿は幅を二つに折つて紵け,衿先の方は20cmほど身頃に綴ぢつける。

(10)仕上

(11)肩揚　揚代は3cm內外。長さは凡そ15cmぐらゐにして格好よくする。前は衿と重ならぬやうに曲げる。

第二節　女物綿入羽織

1. 仕立上寸法

袖口袵0.3cm　前下り見返し0.3cm

2. 仕立方(八つ口縫仕立)

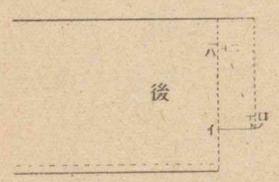
(イ)袖

標附　表·裏とも着物の綿入と同じにする。

縫方　表·裏を別々に縫ひ,躾をかける。次に八つ口を合せ,振綿を折らずに裏の縫目に綴ぢつけ,表に返し,綿を整へて躾をかける。

(ロ)身頃

標附　脊縫をして,袷と同じにするのであるが,前下りの見返しは0.3cmであるから,寸法を次のやうにする。



イロ＝4.5cm(下り4cm,被0.2cm,見返し0.3cm)

ハニ＝0.6cm(被0.2cm,見返し0.3cm,後襠附よりも前の方が長く必要な分0.1cm)

(ハ)襠標附　表裏を接ぎ合せてから標す。

(ニ)前下り　袷のやうに縫ひ,裏の方に折を返して隱躾をする。

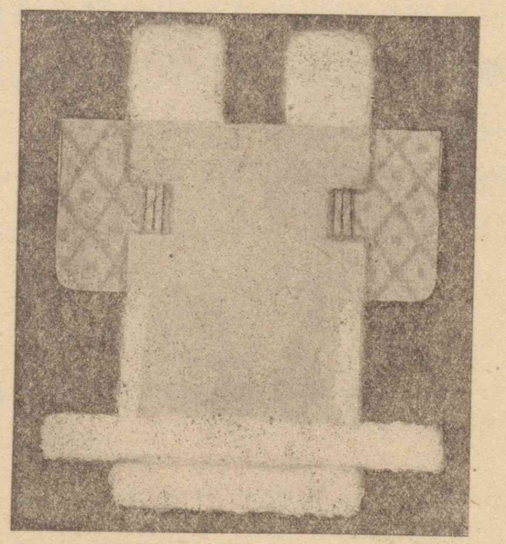
(ホ)胴接

(ヘ)襠附　袖無と同じにする(36頁參照)。

(ト)身八つ口　四つ留をして襠の上と身八つ口を縫ひ,口綿を綴ぢつけ,表から躾をかける。

(チ)表·裏の袖附と袖口の綿含をする。

(リ)綿入　袖無羽織と同じに表·裏兩後身頃の裏側を外に整へて表の方を上にしておく。



綿入女物羽織八つ口縫仕立の綿入方

表後身頃の上に綿を擴げ,裾に8cm幅の芯綿を1枚入れて折り,身八つ口の部分は,綿が重らぬやうに切る(前頁の圖參照)。

返し方　兩脇の綿の端を前身頃の方に折り込み,肩より引き返し,前の裏の方を上にしておくこと綿入袖無羽織と同じである。

次に表袖の上に綿を擴げ,裏袖を載せ,前全體に綿を入れ,表身頃を返し,表と裏を引き合せる。

(ヌ)綴

裾の假綴,脊の縱綴,前襠附綴,衿附綴(裏の前幅を弛め加減にする)。

(ル)袖口紵,袖口下·袖下綴。

(ヲ)乳附·衿附·衿紵など袷と同じにする。

但し衿附の縫目はあらくして,絲が締り過ぎぬやうにする。

(ワ)仕上。

第三章

絹布·毛織物·麻布類

第一節　絹布の縫方

1. 用針·用絲　針　絹針·紬針

絲　絹縫絲·絹躾絲

布地と縫絲及び針の關係　絹織物には厚薄·硬軟など種々あるから,縫絲は,その布地に合つた太さのものを選び,針も縫絲に適した絹針または紬針を用ひる。

2. 運針　絹織の中でも,銘仙などは綿布の運針法と異ることはないが,もみ·縮緬類のやうな軟質のものになると,指の力を拔いて,兩手の間を近くして細縫にする。軟質の縫目は少し曲つても表に現はれて見苦しくなるから,充分に練習する必要がある。

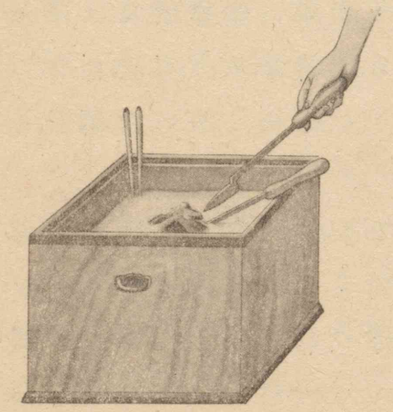
3. 絲こき　地質や絲を傷めぬやうに絲を緩めて丁寧にする。

4. 絲繼　重繼にして,縫目を1針縫つておく。機結は解れ易いから用ひぬがよい。薄地の軟いものは,絲の繼目も上手にせぬと表縫目が見

苦しくなるから,なるべく繼がぬやうに注意する。

5. **平烙鏝** 絲こきだけでは縫目を充分に整へることが出來ないから,烙鏝を當てる。

6. **被** 0.1cmぐらゐにする。折鏝を當てる時は,表から被山をつぶさぬやうに輕くする。



笹鏝の烙方
柄を斜にし,なるべく火から遠ざけ,鏝の背を上にして熱い灰の中に入れる火の中に直接に入れると鏝の面が滑でなくなる。

鏝の使ひ方 烙鏝は,使用する前に必ず反故紙で一度こすり,灰を拭ひ,烙け加減を試して,布地を汚したり傷めたりしないやうに注意する。

烙鏝や火慰斗をかける時は,布の下に綿毛布·鏝板などを置き,布の上には紙または新モスなどを置いてかける。何れも色のうつる虞のない白色を用ひる。

第二節 絹布·毛織物の繕ひ方

用針 絹つぎ針·絹縫針。

用絲 同色の羽二重絲または絹の縫絲。
絲は布地に合せて適當な太さに割り,濕してこき整へたもの。
繕ふ布を解した織絲。

仕上 すべて裏から濕布を當て,烙鏝をかける。

1. 接方

(イ)片返接 綿布と同じであるが,針目を細かく厚地のものは一針拔にする。

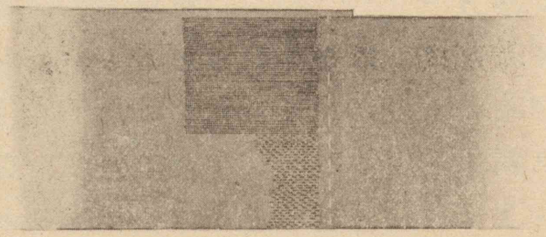
(ロ)割接 極く小針に接いで割る。隱躾を嫌ふときは,縫代に極く僅かの淡糊をつけて貼り仕上をする。

(ハ)掛接 接道を折つて輕く烙鏝を當て,縞目を合せ,假綴をして,目立たぬ絲で綿布と同じやうに細かく接ぐ。

縮緬のやうな伸び易いものは,幅1cmぐらゐの紙を折つて接道に入れ,接ぎ終つてから取つ

て仕上をする。

(ハ)織接　絹布の接目が見えぬやうにする仕方である。甲布の横絲を4cmほどほぐし,乙布と布目・縞目を合せて1cmほど布の端を重ね,躾で押へておき,ほぐした絲を片端から1本づつ針に通し,乙布の横絲を1本づつ抄つて2cmぐらゐ刺し,終りを一直線に揃へぬやうにする。刺し終つたら,全體をよく整へて,布の端と絲とを切り去り,仕上をする。

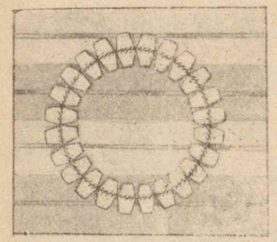


織　接

2. 繼方

(イ)刺繼　ほぐした絲で大きい縞物などは縞に合せて絲をかへ,目立たぬやうにする。

(ロ)色紙繼　綿布と同じ仕方で,表に針目を3針出す。目立たぬやうにするには,ほぐした絲を用ひればよい。



穴繼
繼目を割る仕方

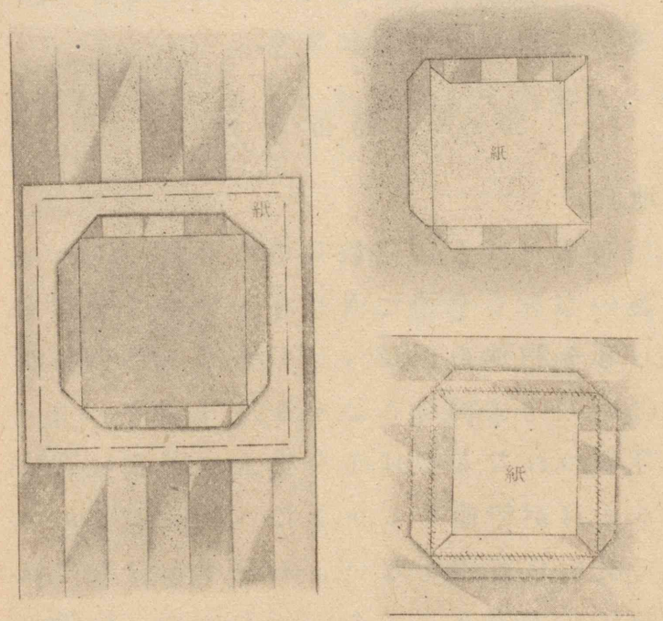
(ハ)穴繼　木綿と同じであるが,繼目を目立たぬやうにするため左圖のやうに割る。

また丁寧にする時は,はめ込法による。

(一)

(二)

(三)



穴繼　(はめ込法)

㊀張のある厚くない紙に損所より稍大きな穴を刳りぬき,損所の裏に當て,周りを綴ぢ,紙の穴に倣つて布を折込み,淡綢で貼りつける。㊁刳り取つた紙には穴と縞目を合せて當布をかぶせ,淡綢で裏の方に貼る。㊂當布を穴にはめ,一邊づつ假綴をして裏から掛接にし,紙を取り,仕上をする。

縮緬などは,損所より大きく厚紙を切り,これに當布をかぶせ,シボを合せて損所に當て,假綴してつけ,損所の縫代だけ殘して切り取り,縫代を割り,當布の弛みは濕りをかけて整へる。

ラシャのやうな厚地のものは,損所を適當な形に切りぬき,當布は縞目·毛並を合せて同形に切つてはめ込み,絲が見えぬやうに布の厚みの中を横縦に刺して繼ぎ合せる。

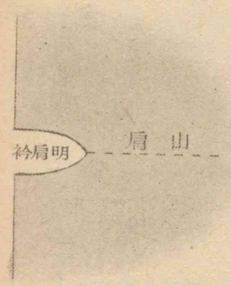
第三節　絹布·單衣

1. 地直

(イ)絹布または人造絹絲入の布を裁つときは,布の裏の方から全體に火慰斗をかけて折皺を伸ばし,耳を稍弛め加減にして卷棒に卷く(糊の特に強いものは糊ぬきをする)。

(ロ)耳のつれたものは,布を机上に平らに置いて見ると,耳が彎曲するか,または耳際の布が凸凹して机面に落附かない。そのやうなものは,耳を伸ばして平らにする。仕方は,耳を掛張して,烙鏝でほどよく伸す。なほ伸びにくいものは耳に斜の切目を入れて烙鏝を當てる。

(ハ)耳が伸びすぎてゐるものは,その部分に濕りを與へ,火慰斗をかけて適當にする。



肩の繰越を多くつけるときの衿肩明の裁方

2. 裁方注意

大柄物を裁つときは,模様や縞の配置を考へて裁たぬと,着物としての價値を損ずることがある。

女物の肩の繰越を多くするときは,衿肩明を圖のやうに裁てば格好がよく出來る。衿肩明は,すぐにかがつておく。

3. 標附注意

(イ)標附は,机上に片毛の白綿ネルを敷いて,烙鏝または絲標でする方が地質を傷めない。

(ロ)軟質絹布の置方は,物差か絲を張つて位置を正し,布を重ね合せるときは,指の力を拔いて布を輕く扱ふ。

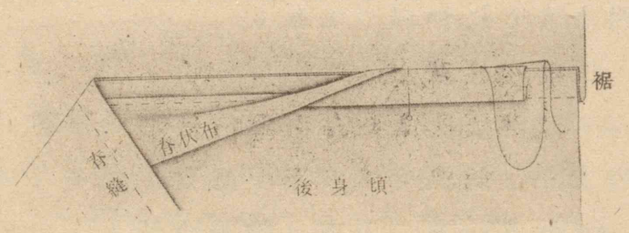
4. 縫方

(イ)袖　袖口は0.6cmを三つ折紵にするから,耳が變色で幅の廣いものは,袖口の部分だけ適當に裁ち切つて見苦しくないやうにする。また薄物のときは,撚紵にすると釣合がよい。

(ロ)脊縫　縫代は,二重縫の代りに細かく耳絎のやうにして綴ぢ合せる。

耳に鋏を入れて見苦しくなつたものは,肩當·居敷當の下をのぞいて袋縫にするか,共色の薄絹でくるんでおく。

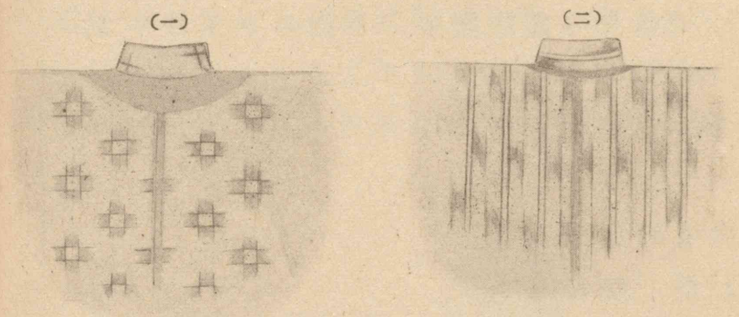
(ハ)肩當·居敷當　普通は,木綿物と同じにつけるが,薄物は2cm幅の共布などを脊伏布として,裾から凡そ100cmぐらゐの間縫代をくるみ,身頃に綴ぢつけ,衿肩廻には力布を當てる。



脊伏布のつけ方

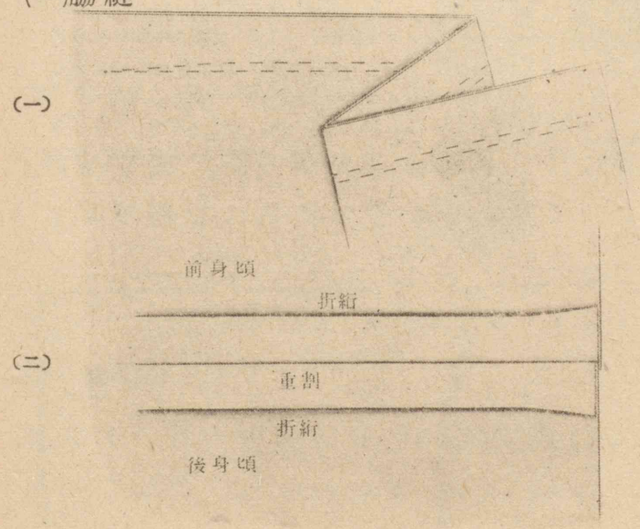
力布は身頃を傷めぬために附けるので,共布を幅1.5cmほどの斜に切り,二つ折にして,衿肩廻の縫道に當てて衿附をするのである。

薄物の肩當は普通小さく好みの形にする。



㊀ 薄物の肩當つけ方　㊁ 薄物の衿肩明に力布をつけたもの

(ニ)脇縫



脇　縫

㊀脇縫より0.5cmの所を二重縫にする。

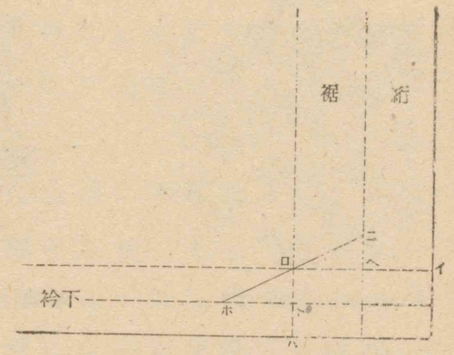
㊁脇の縫込の整へ方(前身頃の方に縫込を折り,二重縫の所より重割をして縫込を平らに整へ,折絎で綴ぢつける)

(ホ)衽附

(1)褄先の額縁標附　下圖のやうにする。

(2)縫方　ニ・ホを合せてロまで羽二重絲で半返縫または極小針に縫ひ,縫目を割り,縫込を整へ,裾紵と衿下の方を三つ折紵にする。

(3)衽附



額縁の標附

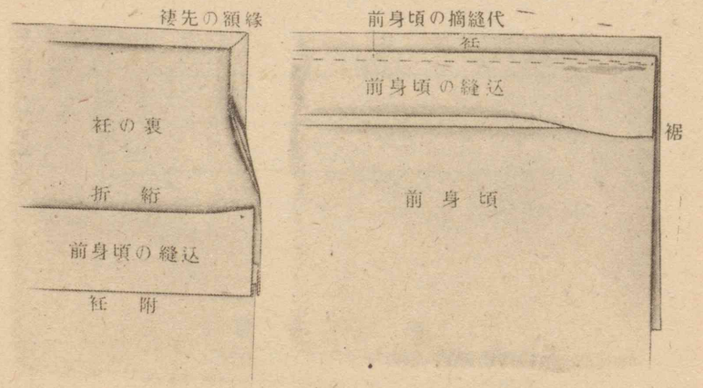
イロ＝裾の紵代　ロハ＝衿下の紵代

ニ＝イロ×$\frac{1}{2}$の所(ヘ)より直角にハロ×$\frac{1}{2}$

ホ＝ハロ×$\frac{1}{2}$の所(ト)より直角にイロ×$\frac{1}{2}$

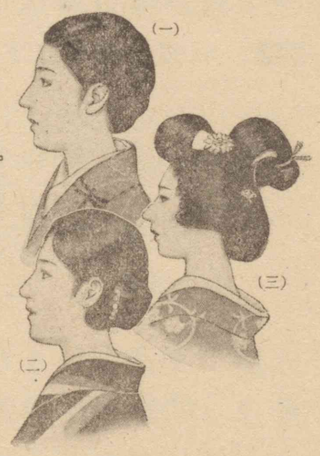
ニロ・ホロに標をして縫道とする。

丁寧にするときは,前身頃の方に淺く摘縫代をつくつて縫目をかくし,縫込は折紵で綴ぢる。



衽附

(ヘ)衿附　衿肩明の格好は,着た時の姿に大きな關係があるから,女物は肩山を後に繰り越し,衿肩明を普通よりも大きくし,また衿布を特に弛めるなどして,好みの形に仕立てることがある。



衿のつけ方各種

㊀男物・子供物と同じ布合で普通のつけ方。

㊁肩山を2cmぐらゐ繰越して三つ衿の縫代を2cmぐらゐにし,布合を普通にしたもの。

㊂衿肩明を刳り,肩山の繰越を3cmぐらゐにして,衿附の布合は脊縫より衽先の間で衿布を多く弛めたもの。

注意　三つ衿の縫代を普通以上に深くするときは,脊縫の端を縫ひ殘す。

衽先から衿下までの布合は,軟質物ならば,先づ衽附の縫目に絲を張つて正しくし,次に衽先の布目を整へ,動かぬやうに待針で細かく押へておき,衿布を合せる。衿の縫道も曲り易いか

ら絲を張り,これに倣ひ,待針を細かく打つて縫ふ。

(ト)衿紵　絹布は,前身頃の縫込を木綿物のやうに伸すことが出來ないから,三つ衿布と縫ひつけずにおく。なほ落ちつきが悪い時は,衽先の邊で前身頃の縫込に縦の襞をとつて整へる。

注意　軟質地・薄地などの衿には芯を入れることもある。

(チ)八つ口は折紵にする。

(リ)仕上　全體に輕く火慰斗をかけて疊む。

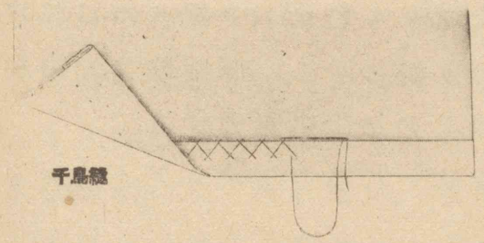
第四節　毛織物の仕立方

用絲　カタン絲または絹絲。

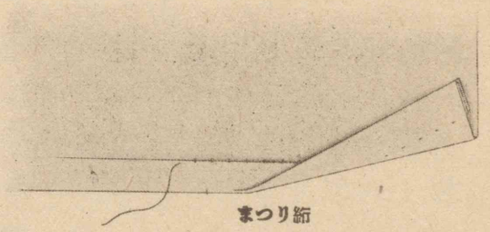
縫方　厚地物は半返縫,メリンスは並縫,セル・サージ類は半返縫または0.1cmぐらゐの細縫にして,5cmおきぐらゐに絲こきをする。細縫は,兩手の間を2cmぐらゐ離し,手を細かく動かして縫ふ。

1. 布の端の整へ方

(イ)千鳥縫　厚地毛織物の端を折つて,右方に掛張をして,布の左端から押へる仕方である。



(ロ)まつり紵　毛織物の端を折紵にする仕方である。



2. 湯通　毛織物は濕氣にあへば多少縮むから,裁つ前に一度微溫湯に入れ,生乾のとき裏からアイロンを當てる。また簡單にするには,布の上に白布を擴げ,その上に霧を吹きアイロンをかける。

3. 仕立方

(イ)標附注意　チョークまたは絲標にする。

脇縫・袖附は縫目を割るから,後幅・肩幅標には被の分を加へない。

(ロ)縫方　厚地物はミシンで縫ふか半返縫に

するが,セルぐらゐのものは,細縫にすれば,割る所でも差支ない。

袖口·袖下(縫代をずらして)·衿下·裾·八つ口·脇綴·衽綴などは,まつり絎にする。厚地物は,袖の縫代·脊縫·脇綴·衽綴などを千鳥縫にする。

(ハ)仕上　霧を吹いた布の上からアイロンをかける。

第五節　麻　布

(イ)地直　霧を吹いて布目を直しながら,卷棒に卷く(火慰斗をかけても効がない)。

(ロ)縫方　麻布は,地質が硬く,縫道の通りに縫ひにくいから,注意して縫ふ。

(ハ)仕上　霧を吹き,手のしをして疊む。

第四章

紋　章

1. **紋章**　我が國では,古へから　皇室を始め奉り,山間僻地にささやかな生活を營む家でも,家紋(定紋)のない家はない。家紋は家の目標で多くはその家の由緒をあらはしてゐる。私たちの祖先は,皆家名と共にこれを尊重し愛護して,これを汚さぬやうに自重もし修養もしたものである。紋を式服につけるのは,單に趣味や裝飾の上からのみのものではない。

紋章は日·月·星·雲·雪·草·木·鳥·獸·蟲·魚介類をはじめ,器具·金錢·建築物·文字その他宇宙にあるすべてのものをかたどつてあり,その數も凡そ4000乃至5000ほどもある。

2. **紋附の種類**

一つ紋　脊紋(略式用)

三つ紋　脊紋と袖紋(正式用)

五つ紋　脊紋·袖紋·抱紋(正式用)

紋下り寸法

	大人物	中裁	小裁	
			大	小
脊　紋	裁切衿肩明より 6·5cm	6 cm	5 cm	4.5cm
袖　紋	袖山より 7.5cm	6.5cm	6 cm	4.5cm
抱　紋	肩山より 15cm	13cm	11cm	9 cm

3. 紋のつけ方　(イ)染抜紋　紋の形に染抜いてから描いたもの。

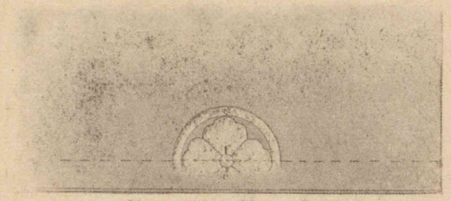
(ロ)こくもじ　どんな紋にもなるやうに丸く染抜いてあるもの(既成賣品).

(ハ)切附紋．着物と同質または類似の布に紋を描いて貼り,周圍をかがりつけたもの。

(ニ)縫紋　刺繍で紋を縫取つたもの。

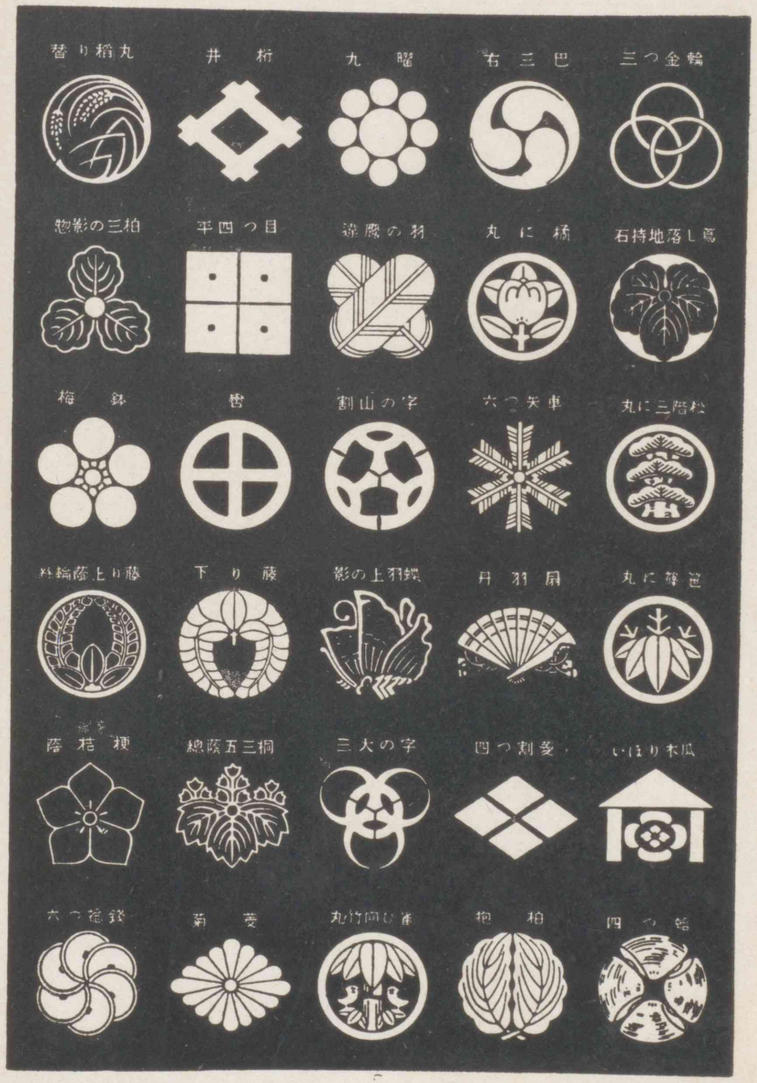
(ホ)絞紋

4. 縫方　紋をよく合せ(薄糊でつけておくもよい),同色の羽二重絲または割絲で被をかけぬやうに,要所は返針で縫ふ。脊縫は,紋の縫代より被だけ淺くして縫ふ。紋の繪は描いたものであるから,濕をかけぬやうに注意せねばならぬ。



紋の縫方

主な紋



第五章

單　羽　織

單羽織は,男·女物とも普通は大人のみ用ひる.

第一節　男物單羽織

袖口には袖口布をつけ,裾は前下りまで三つ折縫にしてある.

男物單羽織

用布の地質　紹·紗·透綾·銘仙·紬·御召·セル·薄地ラシヤなど。

仕立上寸法　袷羽織と同じで,裾の三つ折紬は10cmほどにする。

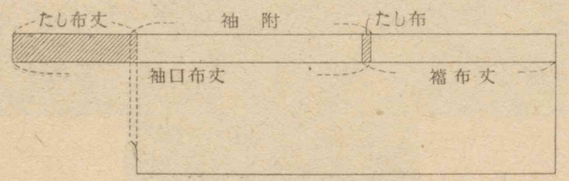
1. 裁方

裁切寸法の積り方(袖丈53cm·身丈105cmにするもの)

後布丈 = **身丈** + **三つ衿縫代** + **裾の折代**
126cm　105cm　1cm　10cm×2

前布丈 = **後布丈** + **繰越** + **前下り**
131cm　126cm　0.5cm×2　4cm

たし布 = (**袖口布丈** − **袖附** + **繰越** + **襠上の縫代**) × **2**
30cm　66cm　53cm　0.5cm　1.5cm

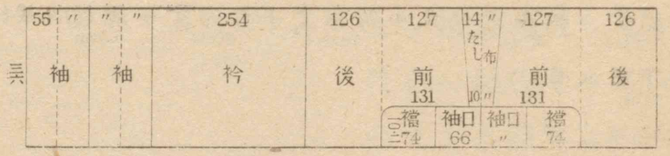


たし布計算説明圖

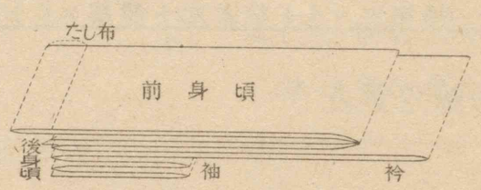
衿布の積り方は大體袷羽織と同じでよい。

(4頁參照)

用布　並幅1008cm



積り方



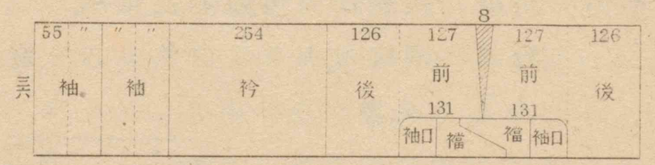
總丈 = (**袖布丈** + **後布丈** × 4 + **たし布** + **衿布丈**
1008cm　55cm　126cm　0cm　254cm

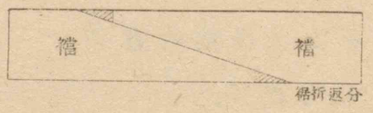
後布丈 = $\frac{\text{總丈} - \text{袖丈} \times 4 + \text{たし布} + \text{衿布丈})}{4}$

注意　前下りは標附のときに裁つ。

衿肩の力布乳布は殘布から取る。

裁違襠(鈎襠)　用布並幅988cm





裁違檔積り方

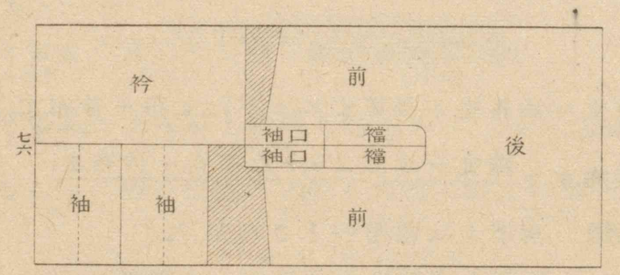
總丈＝袖布丈×4＋衿布丈＋(後布丈＋繰越)×4＋前下り×2

(總丈 988cm, 袖布丈 55cm, 衿布丈 254cm, 後布丈 126cm, 繰越 0.5cm, 前下り 4cm)

後布丈＝

$$\frac{\text{總丈}-(\text{袖布丈}\times4+\text{衿布丈}+\text{繰越}\times4+\text{前下り}\times2)}{4}$$

76cm幅の裁方



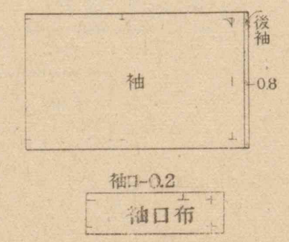
2. 仕立方

準備　用絲　綴絲は同色の羽二重絲。

衿芯　透織のときは,白色の芯を避ける。

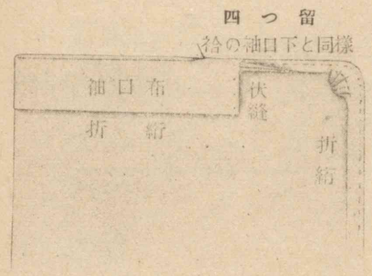
(イ)袖

標附　表を中に後袖の方を0.8cm長くして標す。



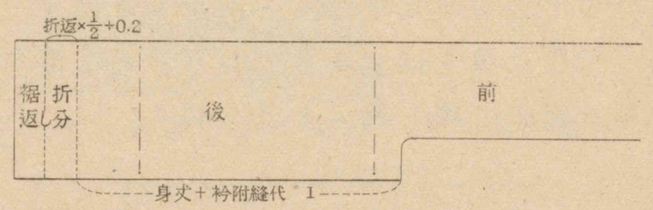
縫方　袖口布の兩端を伏縫して袖口を毛拔合せにし,四つ留の絲で袖口

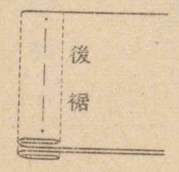
布の口下を縫ひ,縫目を割る。袖の縫代は,後の方を摘縫代にして,袖口布の縫代と3枚を合せ,半返縫にする。次に袖下を伏せて絎け,袖口布の奥を絎ける。



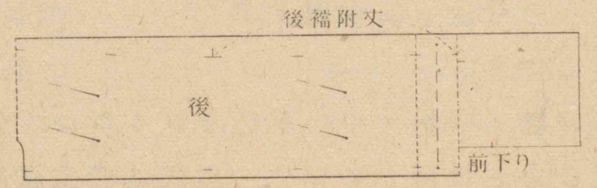
(ロ)身頃・襠標附

後身頃　兩身頃を中表に合せ,綴をして,後身丈と裾の折代を標す。

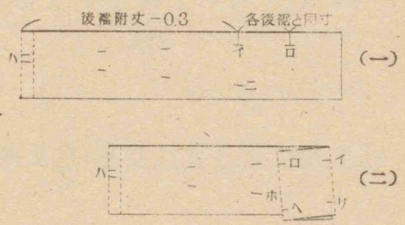




裾を各裏の方に三つ折にし,躾で押へ輕く烙鏝を當て,0.5cmの繰越をつけて前身頃に重ね,後身頃の標をする。



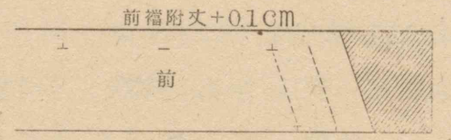
襠　裾の三つ折と襠丈の標をして,上を三つ折にする。



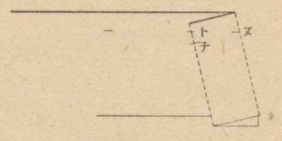
イロ＝縫代各 1cm にして,襠幅の標を合羽織と同じにする。

イロを後襠附標に合せ,イニを自然に折り,裾を三つ折にし輕く烙鏝をかける。へは布幅いつぱいの所。

前身頃　幅と乳附を標し,前襠丈ハリの寸法を計つて,前身頃に襠附丈と前下りを標す。前裾の折代は後と同寸にして,前下り標と直角に物差を當てて標し,殘りを裁ち切る。



前裾を標通りに折り,假綴して輕く烙鏝を當てる。襠のホへの寸法を前幅標トよりチに標す。



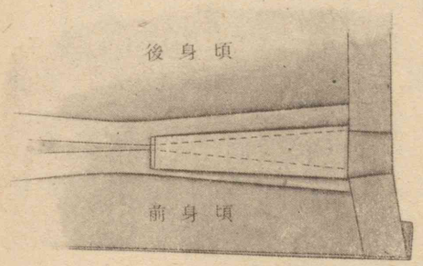
(ニ)脊縫　裾絎の中に折込まれる所は1針だけ縫ひ,あとは殘しておく。縫代は二重縫絎綴

袋縫など適當にする。

(ホ)襠附　襠の上を三つ折絎にしてから後襠をつけ,前襠はリへ,ヌチを合せて縫ふ(前頁參照)。

(ヘ)裾絎　折込を整へ,凡そ 1cm のあらさに絎ける。

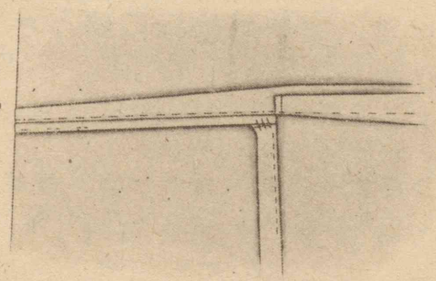
(ト)脇綴



脇綴
脇の縫込は身頃に,襠の縫込は脇の縫込に綴もつける。

(チ)衿附　普通の附方·鐵砲附とも袷羽織と同じにする。

注意　透物は,衿芯を綴ぢるときに,白絲を用ひぬやうにする。

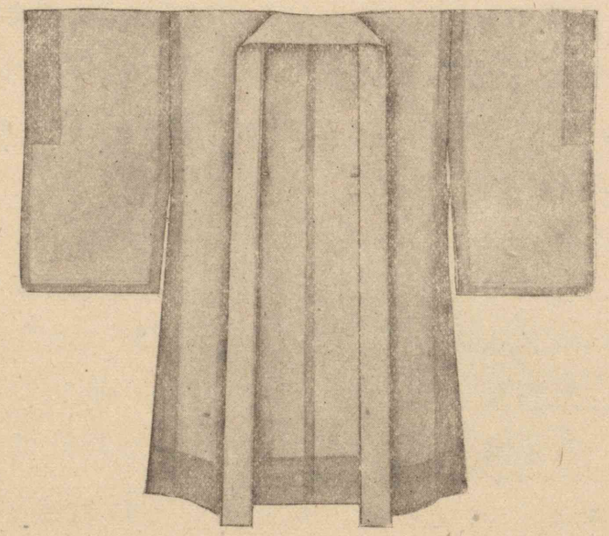


(リ)袖附

(ヌ)仕上

袖の縫代の整へ方
上の方は山とその左右に2針づつ綴ぢ,下は袖下の縫代に綴ぢつける。

第二節　女物單羽織



女物單羽織出來上り

用布　絽·紗·絽縮緬·縮緬·セルなど。

1. **裁方**　男物に同じ。

たし布の積り方

(袖口布丈－袖附－身八つ口＋繰越＋襠上の縫代)×2

2. **仕立方**　大體は男物と同じで,八つ口は**綿**布單衣のやうに折紬にする。

第六章

軟質絹布袷

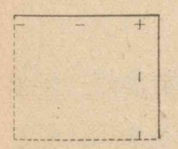
第一節　軟質絹布の布合練習

紙紗の仕立方

用布　表　縮緬。裏　紅絹。並幅で凡そ正方形。

布合　手先の力を拔いて表裏を平らに合せ,周りに假綴をする。

絲の撚の弱い縮緬類は,質が軟かで幅も丈も垂れるから,下げて布合をする。



標附　幅も丈も二つに折つて輪の方から計り,圖のやうに標す。

縫方　一邊の中程から縫ひはじめ,角は角縫にして,四方を殘らず縫ひ廻し,終は絲を30cmほど殘しておく。次に角の縫代を整へ,終の絲を緩め,その間から表に返し,絲を引き,返紬で留め,躾をかけて仕上をする。

第二節 小 袖

着物の裏表とも絹布でつくつたものを,普通小袖といふ(袿(うちぎ)の大袖に對して小袖といつたものである)。

1. 仕立方注意

(イ)標附 垂れる縮緬は,置いて計つてから,下げて計り,その差を見て,表裏の標附寸法を加減する。

(ロ)表裏とも耳は少し伸び加減にしておく方がよい。但し布幅が狹く,いつぱいに縫ふ時は,始め平らにしておいて,縫つてから必要だけに伸す方が便利である。

(ハ)袖 女物の裏地は,多くは白絹·紅絹などであるから,四つ縫にすると,裏地が絲で汚れることがあるので,別縫にする方がよい。

丸みは袂型を用ひ,襞を烙鏝で落ちつける。口綿のときは袷のやうに袖口合をして,眞綿を袍綿の形に引き伸し,輕く撚つて丈を緩め,袍に入れて裏縫代に綴ぢつける。

(ニ)裾合 錦紗のやうに軟い絹布は,布目1,2本

の長短でも袋が出來るから,表裏兩身頃の裏を外にして合せ,衿肩明の兩脇と脊縫,脇の肩山に待針を打ち,衣紋竿にかけ,丈幅を調べることを忘れてはならぬ。裾合が出來たら,表に返して今一度かけて調べる。

裾には幅4cmぐらゐのメリンスまたは眞綿などを入れることがある。

(ホ)縱綴 脊·脇·衽附などの綴も,垂れ下るものは,衣紋竿にかけて,待針を打つて綴ぢる。

(ヘ)衿附 衽の裾の方から表裏の布合を正しくして衽先を整へないと袋が出來易い。

衿附も,表裏の地色が違ふときは別縫にする。

(ト)裾綴 表と裾廻との色が反對などで,綴絲が特別見苦しく目立つ時は,表の方は共色の絲で隱躾をしておき,裏は裾廻と共色の絲で縫代に綴ぢつける。

(チ)仕上 表裏を引き合せ,裏の方から先に白紙または白布(落附の惡い時は白布に霧を吹く)を當てて輕く火伸をする。

第七章

厚地帶

第一節 全帶

全帶とは,大幅の帶地を二つ折にして仕立てたもので,儀式用には綴錦·絲錦·唐織·緞子·繻珍·紹·繻珍などの織物を用ひるのを普通とするが,鹽瀨·羽二重·繻子·紹·紗·麻などを用ひることもある。

1. 地直 厚地物の耳は,鋏を入れても伸びないものがあるから,その時は耳を裁ち切る。

金絲·銀絲などの織つてある所は,濕氣や高熱を當てぬやうに注意する。

2. 仕立方

(イ)幅を二つ折にする時,模樣に差支なければ端を少しずらして折り,假綴をする。

(ロ)縫方 極く厚地物は,幅を仕立上寸法に,角の方は被だけ廣く標し,全部半返にし,角は角縫にする。次に縫代を烙鏝で割り,角は普通に折つてかがる。

普通の厚地物ならば,抄縫にして0.1cmほどの

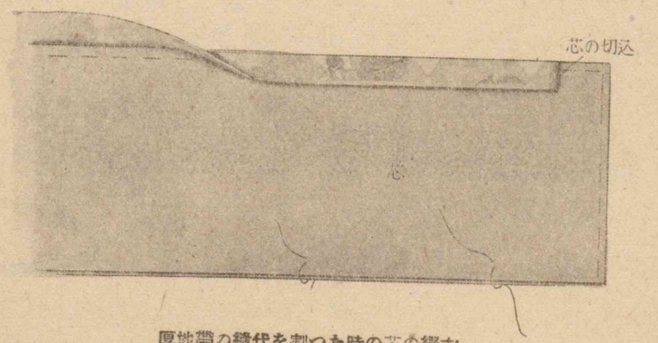
被にすることもある。)

厚地物の角は,2枚の板に挾み,槌で打つて折をつけねばならぬこともある。

また角が厚くなつて落附が悪いものは,縫代か芯を裁ち落して平らにする。

(ハ)芯 縫代を片返にするものは幅は,帶幅より被の分だけ狹く,極く厚地ものは縫代を割るが,帶の厚みの分だけ狹くする。縫代を割つた時には,圖のやうに芯丈の兩端に縫代の深さだけの切目を入れ,端の方は芯を普通に綴ぢ,他は縫代の間に芯を當てて,一方の縫代に綴ぢつける。

輪の方は圖のやうに假綴をなし表に返してから取る。



厚地帶の縫代を割つた時の芯の綴方

(ニ)仕上

第二節 男帶

地質 繻珍·博多·琥珀·綴織·節絲織·小倉など。

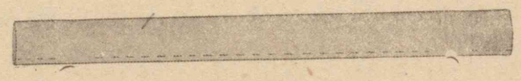
1. 仕立上寸法

幅10cm内外 丈400cm内外

2. 地直及び芯地の用意 女帶と同じである。

3. 仕立方

(イ)縫仕立 全帶のやうに地直して幅を中表に折り,假綴をなし,幅標をする。

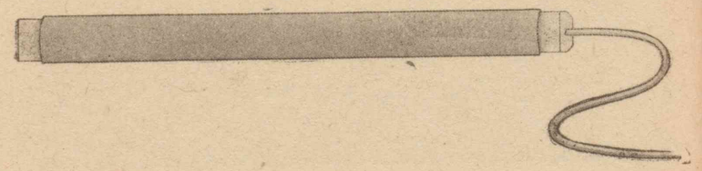


縫方

全部を半返縫にする。兩端は10cmほど縫つて15cm明けておく。

縫目を整へ,縫代に割烙鏝を當て,表に返す。

(ロ)芯に厚紙と紐をつけ,帶の中に通し,2人で帶を張り,甲は一端に出た紐を靜かに引き,乙は芯がねぢれぬやうに注意して通す。次に一方



芯の入方

の端は芯と帶地と一緒に持ち,他の一端は帶側だけを持つて引き,芯の釣合を定め,縫殘しの際

に假綴をして芯を押へる。

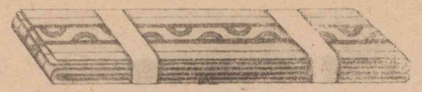
縫殘し口から端を裏に返して,角を厚地全帶のやうにして(71頁參照)表に返し,縫殘しを小針に絎ける。

(ハ)絎仕立(丁寧な仕方) 地直をして兩端を縫ふ。仕方は表を中に,幅の眞中から折り,兩端20cmの間を假綴する。次に幅(いつぱい)丈の標を輕く通し篦にして,角は角縫に,被は幅に0.2cm,丈に0.4cmかけ,角を整へてかがる。

帶地全體に芯の丈幅を合せて假綴をし,次に左右兩端に芯を綴ぢつける。

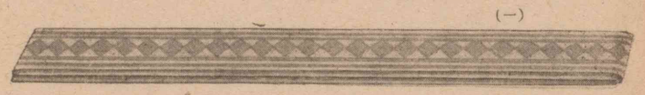
兩端を表に返し,絎代を折り,一方の絎代で芯をくるみ,帶側を合せ,鞆で押へ,芯のある方を向側にして,縫針で極く細かく絎ける。

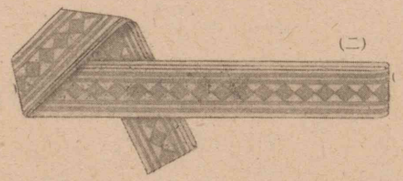
仕上 兩側から火熨斗をかけ壓をして,適當に疊み,紙で封をする。

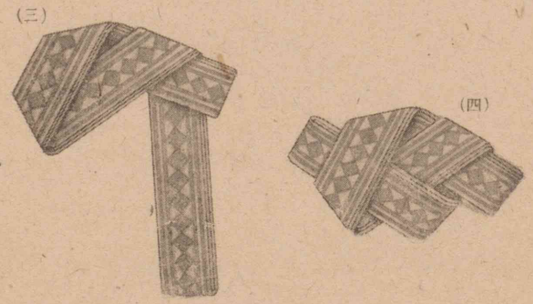


男帶の東封

畳み方







畳み方順序

第八章

被布

被布は女子用のもので,主に老人と子供に用ひられる。

形は,衿を除く外は羽織と同じで,綿入·袷·單衣などある。

1. 小衿竪衿の仕立上寸法及び割出方

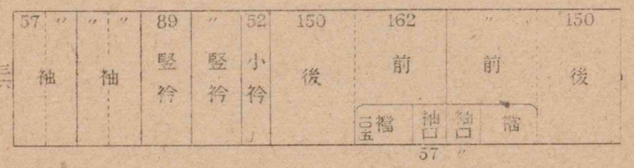
種類／名稱		大人物	中裁	小裁	割出方
竪衿下り		23 cm乃至 25 cm	17cm	10cm乃至 15cm	衽下りと同寸または 2cm增
竪衿幅	下	15cm	13cm	11.5cm	衽幅と同寸
	上	13cm	12cm	10.5cm	下の幅－{大人物 2 cm / 子供物 1 cm}
小衿	丈	48cm內外	38cm內外	21cm乃至 23cm	竪衿下り×2＋4 cm內外 (好みと流行で加減する)
	幅	11cm	10cm	8cm內外	(好みによつて加減する)

2. 裁方

(イ)大人物被布(本裁)　用布 1 反

羽織の裁方と同じで,衿の部分から小衿と竪衿をとる。

仕立上寸法　袖丈55 cm　身丈100cm



積り方

竪衿丈(89cm) ＝ 身丈(100cm) ＋ 三つ衿の縫代(1cm) ＋ 繰越(1cm) ＋ 前下り(4cm) ＋ 竪衿の上下の縫代(6cm) － 竪衿下り(23cm)

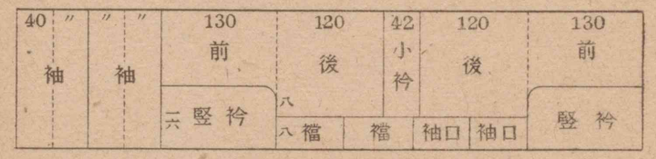
前後の差(12cm) ＝ (繰越(1cm) ＋ 前下りとその縫代(4cm))×2

後布丈(150cm) ＝ {総丈(1082cm) － (袖布丈(57cm)×4 ＋ 竪衿布丈(89cm)×2 ＋ 小衿布丈(52cm) ＋ 前後の差(12cm)×2)} ÷ 4

前布丈(162cm) ＝ 後布丈(150cm) ＋ 前後の差(12cm)

(ロ)中裁　四つ身被布　用布並幅702 cm

仕立上寸法　袖丈38cm　身丈80cm



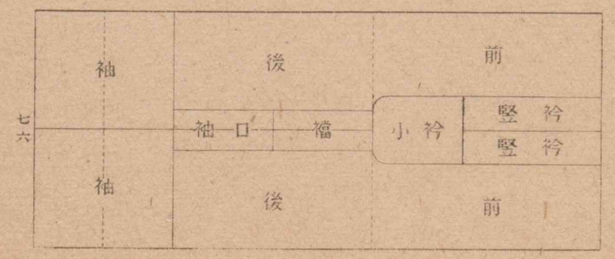
積り方

後布丈 ＝

{総丈 － (袖布丈×4 ＋ 前後の差×2 ＋ 小衿布丈)} ÷ 4

前布丈 ＝ 後布丈 ＋ 前後の差

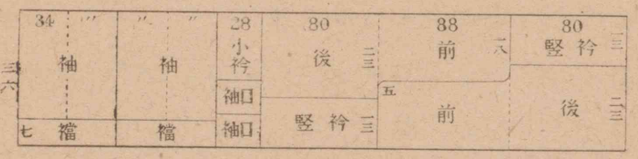
総丈 ＝ (袖布丈 ＋ 後布丈)×4 ＋ 前後の差×2 ＋ 小衿布丈



(ハ)小裁

三つ身裁　用布　並幅412cm

仕立上寸法　袖丈32cm　身丈65cm



積り方

後布丈＝

$$\frac{\text{總丈}-(\text{袖布丈}\times 4+\text{前後の差}+\text{小衿布丈})}{3}$$

前布丈＝後布丈＋前後の差

(ニ)一つ身裁袖無被布

用布　並幅　241 cm

積り方

竪衿布丈＝前布丈－竪衿下り＋上の縫代

$$\text{後布丈}=\frac{\text{總丈}-(\text{竪衿布丈}+\text{小衿布丈}+\text{前後の差})}{2}$$

3. 仕立方

(イ)標附

(1)袖·身頃　羽織と同じである。但し前身頃の竪衿附縫代は,上から下まで眞直に1cmにして竪衿下りを標す。

(2)竪衿

並幅竪衿(大人物)

表を中に幅を二つ折にして,2枚重ねる。

下の縫代＝2cm

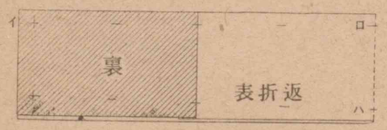
丈標＝前身頃の竪衿附と同寸＋被×2
0.5cm

下の幅標＝15cm＋被

上の幅標＝13cm＋被

竪衿附標は,上下の幅標の間を斜に標す。

裾折返の竪衿　表と裏を接ぎ,合せ,裏の方に折を返し,丈を二つに折り,兩竪衿の表を合せて重ねる。イよりロまで眞直に1cmの縫代を標し次に丈幅の標をする(斜の方を附にする)。

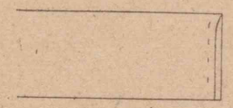


裾折返の竪衿

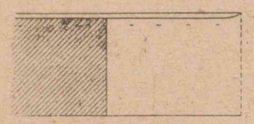
(ロ)縫方

(1)袖を縫ひ,身頃の脊縫·前下り·胴接·襠附·身八つ口·袖附まで羽織と同じに縫ひ,小衿下を本衿にするやうに整へ,前身頃の表裏を平らに合せて假綴をする。

(2)竪衿縫方



並幅竪衿
裾の見返分は前下りの見返しと同寸。縫方は裾標より見返しの寸法だけ表は外・裏は内を縫ひ,輪の方を1cm縫ひ殘して内棲にし壓躾をする。



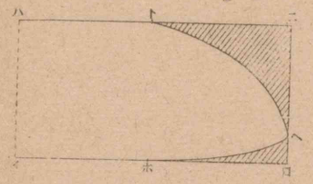
裾折返の竪衿
幅の接は裏控にして角を内棲にする。

(3)竪衿附　布合を平らにして標通りに縫ひ,竪衿の方に縫代を折り,上は四つ留をして,着物の衿先と同じに縫ひ,裏で衿ける。

注意　綿入の竪衿は表だけをつけ,綿を入れてから,裏を綴ぢて衿ける。

(4)小衿

型紙の裁方　詰衿(主に子供用)



イロ,ハニ＝小衿丈×$\frac{1}{2}$

ハイ,ニロ＝小衿幅

イホ＝仕立上衿肩明と同寸

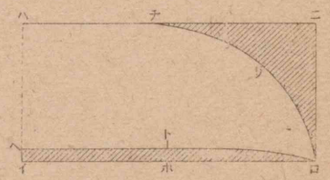
ロヘ＝ホロの凡そ$\frac{1}{10}$(曲線)トヘ曲線は好みによつて圓周または楕圓周の$\frac{1}{4}$にする。

ホヘトの線より裁ち切る。

ぬきえもん衿(大人物)

イロ,ハニ＝小衿丈×$\frac{1}{2}$

ハイ,ニロ＝小衿幅＋$\frac{\text{イロ－仕上衿肩明}}{10}$



ハヘ,チト＝小衿幅　ヘト＝仕上衿肩明　トロ＝曲線　リ＝丸みを好みの形にしてヘトロチの線より裁ち切る。

小衿芯　芯は天竺晒·新モス·綿フランネルなど適當なものを選び,1枚または2枚芯にする。

芯布裁方　内芯は型紙の通りに裁つ。外芯は

内芯を芯布に綴ぢつけ,丸みの方だけ1cm大きく裁つ(一枚芯の時は,外芯だけを用ひる)。

小衿表布の裏に外芯を平らに合せて綴ぢつけ,内芯の0.8cm外に縫道の標と合標とをつけ,下まで通す。

小衿芯の附方

縫方

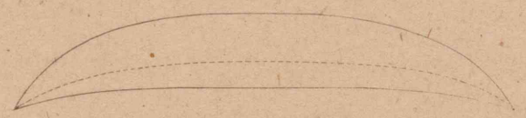
表布は標の通り芯と一緒に,裏布は標より0.8cm内を縫道とし,合標を合せて,表の弛をその部分に落ちつけて縫ひ,縫代は裏の方に折り,丸みを整へ,表から縫目に隱躾をする。

小衿幅の中程で裏衿に芯を目立たぬやうに綴ぢつけ,綿入のときは芯の上に綿を入れ,小衿附の方を表·裏1束に假綴をする。

小衿の附方

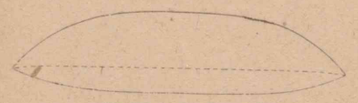
(イ)下圖の小衿は,折返線が點線のやうに長くなつて,ぬきえもんになる。この小衿附は羽織の衿と同じにする。

(一)


ぬきえもんの小衿

(ロ)下圖の小衿は,折返線が點線のやうに短く詰衿になる。この衿のつけ方は,身頃の表裏で小衿を挾むので,綿入ならば,身頃の表の方に綿をつけ,小衿の裏を表身頃の表に當て,衿肩廻は小衿を張つて綿も一緒に縫ひ,衿肩廻の縫代に切目を入れ,裏身頃を合せて,小衿下から絎け廻す。

(二)


詰衿になる小衿

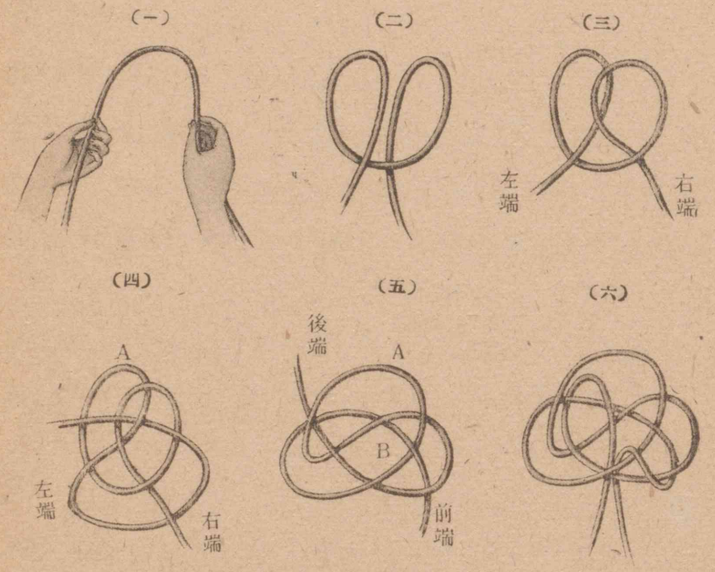
注意 (イ)の仕方は,小衿の端が落ちつかぬ缺點があり,(ロ)の仕方は,端はよく整ふが,衿肩明を切込むから,それが缺點である。

飾紐 輪と,しやか結をつけたもの各二つ,他に輪としやか結を各一つつくり,切口を布でくるむ。

飾紐のつけ方 輪の方はすべて身頃に,しやか結の方は竪衿に當て,中央は二本絲で確かとつけ,周りは一本絲で形の狂はぬ程度に輕く押へる(75頁の圖參照)。

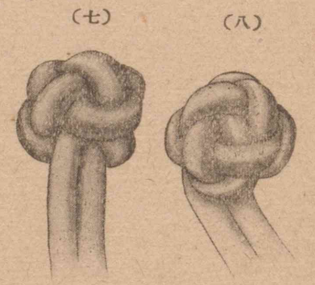
紐結

(1) しやか結

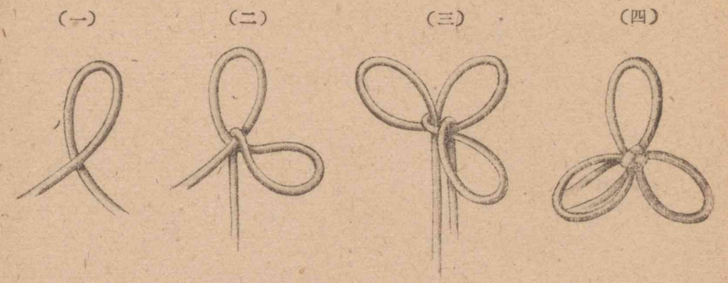


しやか結順序

㊀右を下，また右を下。
㊁右の輪を左輪の上に重ねる。
㊂左端を右端の下にして，右輪の上から入れて兩輪の重なる間から上に出し，左手にA輪を持ち左右の兩輪を水平にする。
㊃前端はA輪の手前より後端はA輪の後より各Bに入れる。
㊄一方の端よりめうちなどで堅くしめる（固く大きくしたい時は紙を小さく丸めて入れる）。
㊅出來上り横から見た圖
㊆上から見た圖



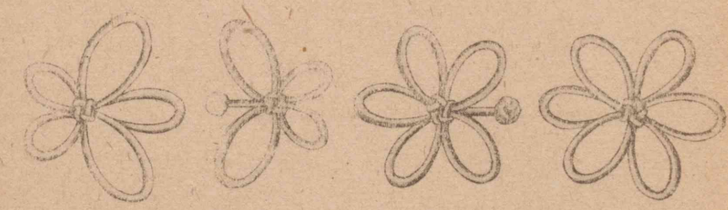
(2) 三輪結



三輪結順序

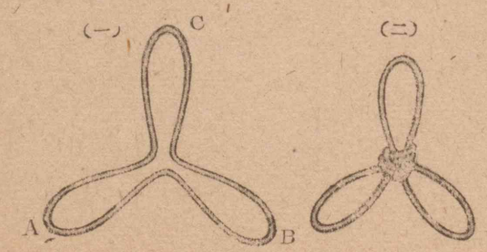
㊀左端を短く右を下に輪をつくる。
㊁右端を輪の上より入れ，同じ大きさの輪をつくり，手前にねせて2の輪をつくる。
㊂2の輪と同じに3の輪をつくり，左端を　の輪の上から入れ，裏側で右端を押へ，1の輪の裏に通してとめる。
㊃出來上り。

三輪結應用　蝶結と梅結とが出來る。



蝶結　　梅結

(3) 新橋結



新橋結

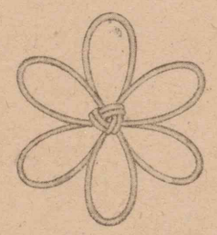
㊀打紐の兩端を縫ひ合せて輪をつくり，3分して三つの輪をつくる。
AをBの方に，BをCの方に折り曲げ，CはAの下を通して留る。
㊁は出來上りの表。

新橋結應用　二重梅結·菊結·櫻結などがある。

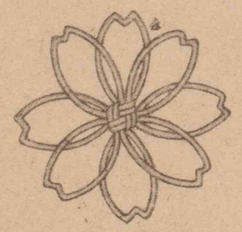
二重梅結　新橋結と同じに輪を3分し,2回くりかへして結ぶ。

櫻結　打紐を輪にし,これを4分して2回重ねて結ぶ。

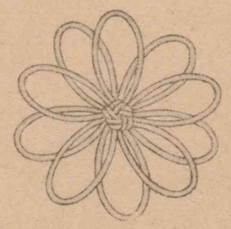
菊結　打紐の輪を5分し,2回重ねて結んだものである。



二重梅



櫻結



菊結

第九章

コート

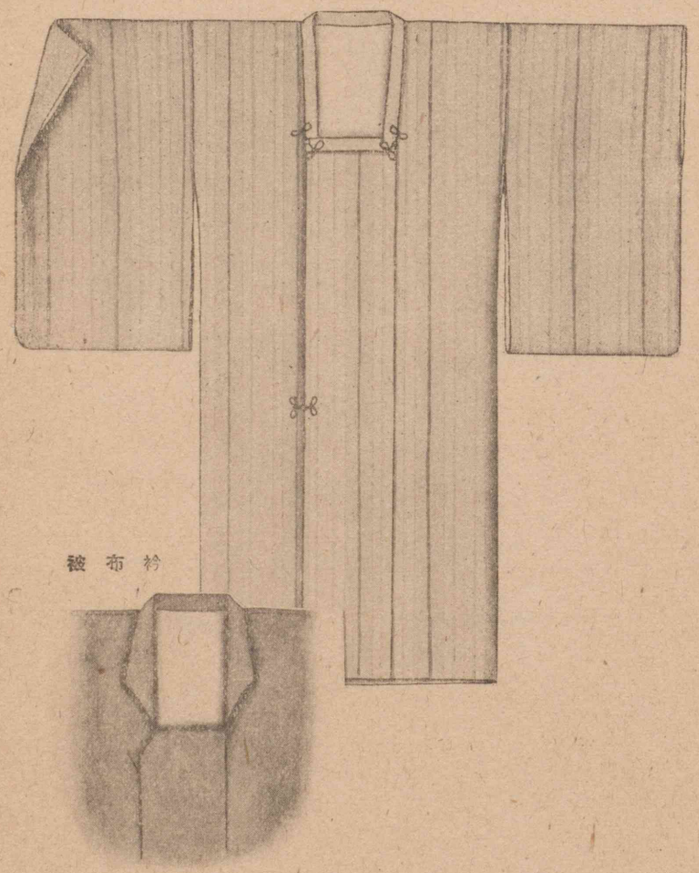
1. 種類及び地質　コートは外出の時用ひるもので,防寒·防濕·塵よけなど,その目的によつて形や地質を選ばねばならぬ。

(イ)防寒用　セル·サージ·ラシャ·ラクダ·カシミヤ·メルトン·ビロードなどの地質を用ひ,長コート·七分コート·半コートなど好みの形につくる。

(ロ)防濕用　セル·サージ·木綿合羽地·防水布などを用ひて,長コートにする。

(ハ)塵よけ用　絹布·毛織物など季節に適したものを選び,普通は半コートにする。

2. コートの形



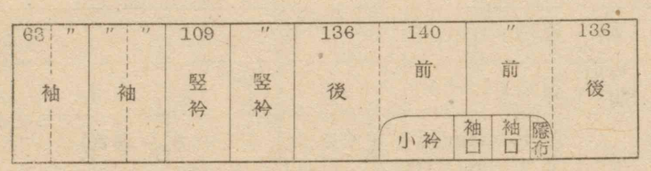
3. 仕立上寸法割出方

袖	丈	着物－0.5cm（羽織＋0.5cm）
	幅	着物＋0.8cm
	口	着物と同寸
	附	着物＋1cm
身頃	衿肩明	着物＋0.5cm
	丈	着丈－4cm（肩よりくるぶしまでの丈を取る） 半コートは羽織丈＋10cm
	後幅	八つ口の所で着物と同寸。裾口は1cm廣くして脇縫を斜にする。
	繰越	1cm乃至3cm
	肩幅	着物と同寸
	身八つ口	10cm
	前幅	竪衿附より脇縫の方に抱幅を19cmとし，裾で2cm廣くする。
	竪衿下り	道行衿は衽下り＋2cm　オーバ衿・へちま衿は10cm乃至12cm
	裾上り	前幅より竪衿幅にかけて2cm内外上げる。丸みは15cm，帶を高く結ぶ人は前上りを多く，丈を短く帶の結方を低くするときは前上りをつけないでもよい。
	竪衿幅	15cm（衽幅と同寸）
	小衿幅	道行衿は凡そ2cm　オーバ衿は6cm乃至8cm へちま衿は凡そ6cm
	隱下り	竪衿下りより10cm
	隱口	14cm

第一節　單長コート(道行衿)

1. 裁方

(イ)用布　並幅　1022cm



積り方

後布丈＝着丈＋三つ衿縫代＋裾の折返
1 6cm　128cm　1cm　7cm

前布丈＝後布丈＋繰越×2
140cm　136cm　2cm

竪衿布丈＝着丈＋三つ衿縫代＋繰越－裾上り－竪衿下り＋上下の縫代
109cm　128cm　1cm　2cm　2cm　25cm　5cm

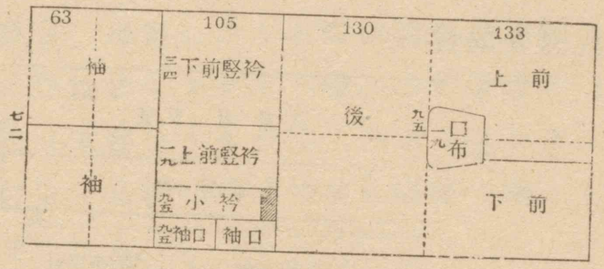
後布丈＝
136cm

$$\text{後布丈} = \frac{\overset{1022\text{cm}}{\text{總丈}} - (\overset{63\text{cm}}{\text{袖布丈}} \times 4 + \overset{109\text{cm}}{\text{竪衿布丈}} \times 2 + \overset{2\text{cm}}{\text{繰越}} \times 4)}{4}$$

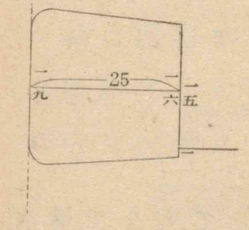
小衿布丈＝(上り衿肩明＋繰越＋竪衿下り＋竪衿幅＋衿先縫代×2
107cm　9.5cm　2cm　25cm　15cm　2cm

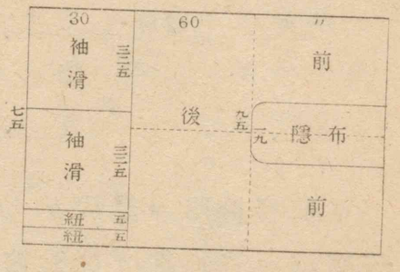
注意　綾セルなどは,綾が右上りの方が表である。

(ロ)用布　72cm幅 494 cm



肩滑　用布75cm幅 150cm



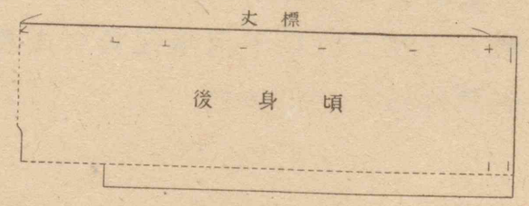


2. 標附

袖　單衣の通り,袖下は厚地物の時は袋縫にせず,後袖を0.4cm長くして標す。

袖口布　普通の通りに標す。

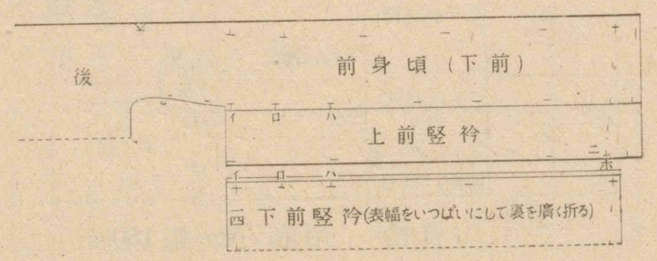
後身頃

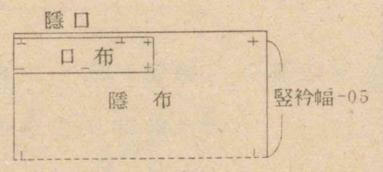


丈標＝着丈＋繰越＋三つ衿縫代。　裾紿代＝1cm
2cm　1cm

後幅＝裾で1cm廣くして脇縫を斜にする。

前身頃と竪衿





下前竪衿附＝縫代を1cmにして裾まで眞直。

前幅標＝普通抱で竪衿附より19cmとし裾を2cm擴げる。

イロ＝隱下り10cm
ロハ＝隱口14cm
} 下前だけに絲標でする。

ニより上前裾幅を計る(前裾幅＋竪衿幅15cm)

ホ＝裾上り標(上前裏·下前兩竪衿にも·標す)

上前裏竪衿幅＝いつぱい。

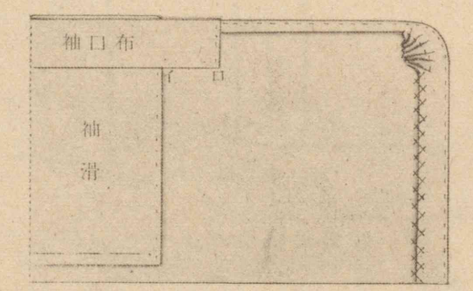
3. 縫方

縫目　地質により並縫·細縫·半返縫などにする。厚地物はミシンで縫ふのが適當である。

衿ける部分　セルぐらゐのものは,まつり衿または千鳥縫にし,厚地物は斜布で端をくるみ,綴ぢつける。

(イ)袖　單羽織の袖と同じに縫ふ(63頁參照)。

袖に滑布をつけるときは,滑布丈の兩端を三つ折衿にして,袖口布の奥に縫ひつけ,袖と平らに合せ,假綴をして袖口奥のイロを衿ける。



袖の綴方

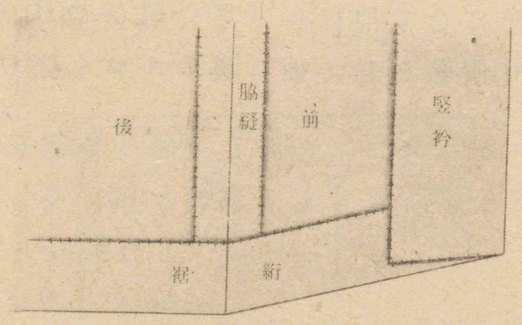
(ロ)身頃

(1)肩滑　丈の兩端を三つ折紵にして,肩當のやうに身頃に合せて假綴をする。

(2)脇縫　縫代を割り,縫込をまつり紵にする(厚地物は,端を斜布でくるみ,綴ぢつけておく)。

(3)裾　標通りに折りて假綴をする。

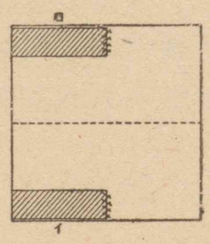
(4)上前裏竪衿を標通りに縫ひ合せ,奥と裾をまつり紵にする(但し奥の上の方を殘す)。



脇縫と裾紵の仕方

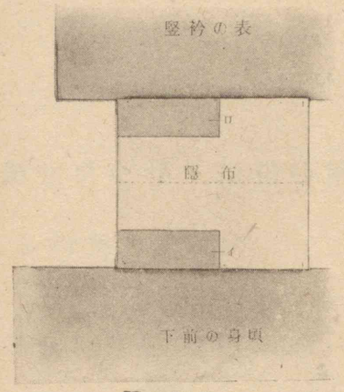
(5)下前竪衿

隱布に口布をかける(厚地物は端を千鳥縫にする)



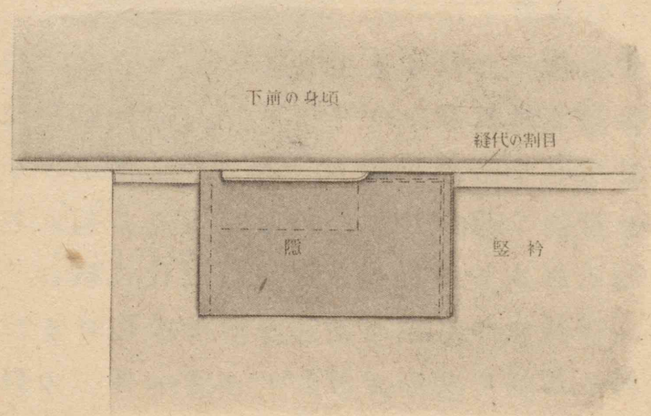
隱布

隱の附方　隱布イを下前身頃に,ロを下前表竪衿に合せ,何れも隱布を 0.2cm の裏控にして縫ひ合せて縫代を割る。



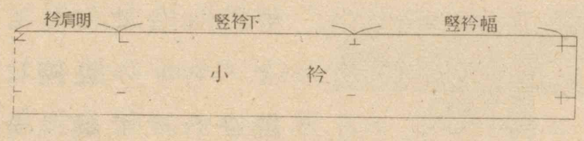
隱の附方

隱の縫方　隱口の上・下に四つ留をし,隱口の上・下の縫代を裁ち,袋の底を丈夫に縫ひ,竪衿附の縫代に綴ぢつけ,竪衿の裏を整へ,假綴をして,隱の上部を裏竪衿に千鳥縫でつける。



裏竪衿　裾と奥をまつり紵にする。

(ハ)小衿標附



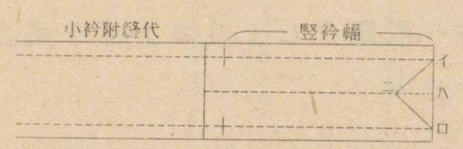
小衿丈＝脊縫から衿附の縫道を計つた寸法

幅＝小衿幅×2

小衿角

イハ(裏)・ハロ(表)＝小衿幅　ハニ＝小衿幅と同寸

イニ・ニロに通し篦をする。

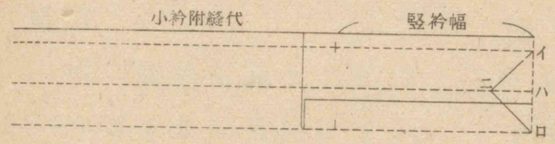


(ニ)小衿附　小衿イを竪衿下りの角に當て,竪衿幅·竪衿下りは布合を平らに衿肩廻は張加減に縫ひ,次に小衿角を縫ふ。縫目は全部割り,小衿先を縫つて,裏竪衿に小衿裏を附けて割り,芯を1枚入れ,小衿の縫代を身頃の縫代に綴ぢ,三つ衿に掛紐をつけ,肩滑·竪衿を合せて絎ける。

掛紐は,肩滑の共布で幅1.5cm,丈6cmほどの斜布を四つ折絎にして,三つ衿の脊縫につける。

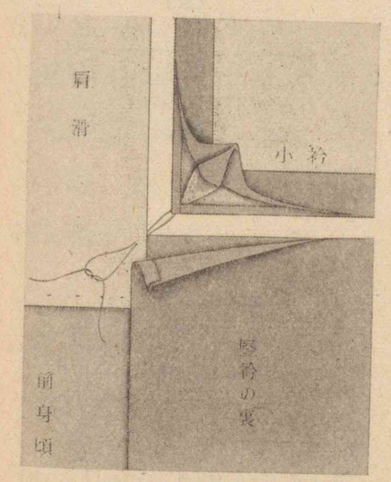
(ホ)小衿の額縁を縫つてから附ける仕方

額縁の縫方



イニロの間をそのまま細縫か返縫にして縫目を割り,イの方を表につける。

小衿角の縫方



角を留めその左イを正しく合せ,假綴して4cmほど返絎にしてから小衿附をして絎ける。

(ヘ)袖附　布合を平らにしてつけ,縫代を割る。

(ト)肩滑　肩の方は袖附の縫代に綴ぢ,身八つ口と脇縫は袷のやうにし,後の端は眞中を千鳥縫で綴ぢ,袖滑を肩滑につける。

(チ)飾紐　胸は被布と同じにつける(75頁83頁參照)。下の位置は裾から竪衿丈×$\frac{1}{2}$＋4cmの所に,しやか結は上前竪衿の端に,輪の方は下前竪衿附から前幅×$\frac{1}{3}$の所につける。

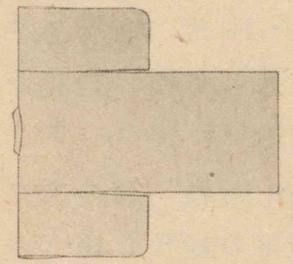
内側の紐は,幅1.5cm丈30cmぐらゐに絎け,一

は下前竪衿の端に裏から飾紐と同じ高さに,一はそれより5cm高く上前の脇縫裏に各々向ひ合せにつける。

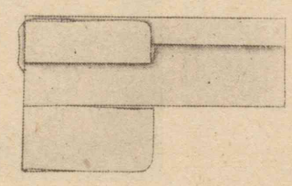
(イ)仕上

疊み方順序

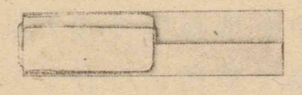
(一)



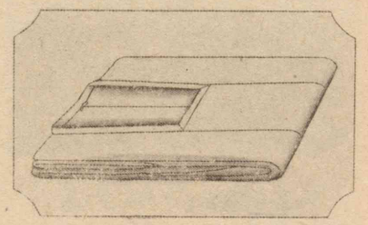
(三)



(二)



(四)



第二節 袷長コート

縫方

(1)袖　着物の通りで,袖口は毛抜合に,八つ口は0.4cmぐらゐの裏控にする。

(2)身頃　表の縫目は,すべて割り,裏の方は普通の片返にする。

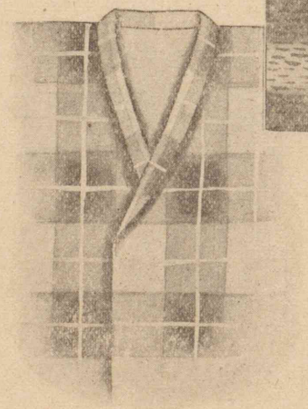
脇綴は裏を緩め,針目を荒く絲を緩めてする。

(3)竪衿·小衿　單コートの通りである。

(4)裾　裏は表より2cm短く,表·裏を別々に絎け,脇縫の左右を4cmぐらゐづつ綴ぢつける。

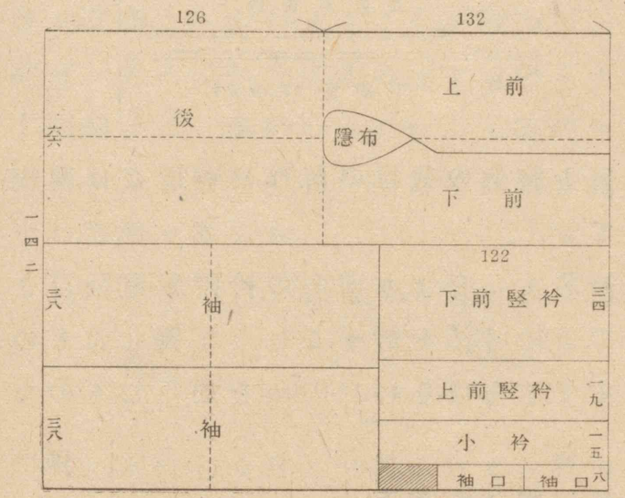
オーバ衿

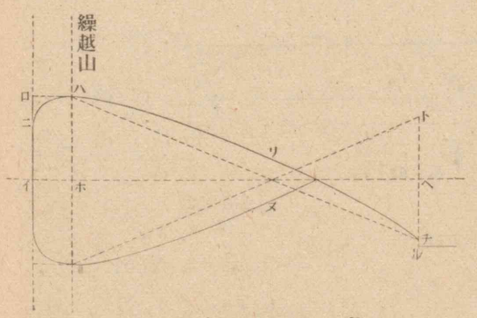
へちま衿



第三節 へちま衿コート

1. 裁方 用布 ダブル幅258cm

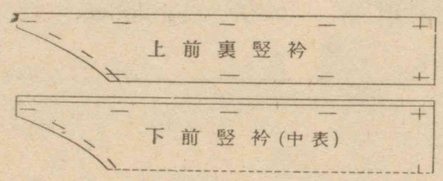




衿肩・前明型紙の裁方

イロ＝衿肩明(9.5cm)
ロハ＝繰越(2.5cm乃至3cm)
ロニ＝繰越と同寸。
ホヘ＝前明(35cm乃至40cm)
ヘト，ヘチ＝各7cm 繰越山より上及びチに假線を引く。
リ，ヌ＝交叉點より各2cm乃至2.5cm
チル＝0.4cm

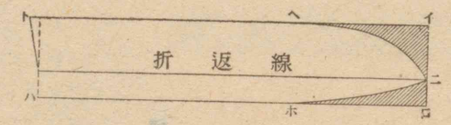
(イ)竪衿　上前裏,下前表,裏の胸刳は標附のとき表上前に合せて裁ち切り,標附をする。



衿肩と胸刳の裁目の解れ易い所には,薄糊をつけておく。

小衿芯丈　脊より前明の衿附縫道(裁目より0.8cmの所)の寸法を計り,これを2倍したものが小衿丈で,芯布はそれに0.8cmを加へたものである。

小衿芯型紙の裁方



芯の裁方

イロ＝上り小衿幅。
ロニ＝凡そ2.5cm折返線はハロに平行に引く。
ホニ＝附の方でニヘより丸みを少く。

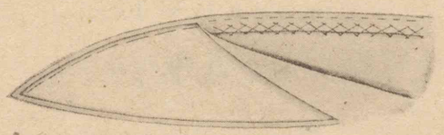
ロハ＝$\frac{小衿芯丈}{2}$

ニヘ＝好みの形に裁つ。

ト＝弛 0.5cm

(ロ)小衿布　芯を斜布で裁ち,眞中を突合に接ぎ,形を整へ,裏衿の上に載せ,躾で假綴をして,芯布と同じ大きさに裁ち,次に表衿と裏衿を中表に合せ,芯布より0.8cm大きくして裁つ。

縫方　丸みの部分は,表の弛をそのまま落附けて,細縫ひにし,裏衿の方に折つて,縫代を千鳥縫で押へ,裏を控へて,芯を綴ぢつけ表に返し,假綴をし,烙鏝を當てる。



小衿の縫方

衿附　裏衿と身頃と中表に合せ,衿肩廻は羽織のやうに衿を緩め,胸刳の方は衿を張り加減にして縫ふ。次に衿附の縫目を割り,表衿幅を少し緩めて身頃の縫代に綴ぢつけ,肩滑を合せて絎ける。

第四節　オーバ衿

1. 型紙の裁方

(イ)衿肩明

(一)イロ＝線をイホ線と直角に引く。

イロ＝衿肩明10cm

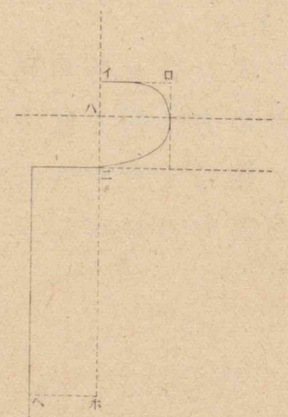
ハ＝繰越山(イロより4.5cm)

ニ＝衿刳線(ハより凡そ8cm)

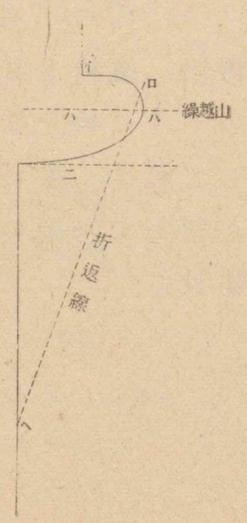
ホ＝前明(ハより35cm乃至40cm)

ヘ＝竪衿幅標(ホより直角に8cm)

(一)



(二)

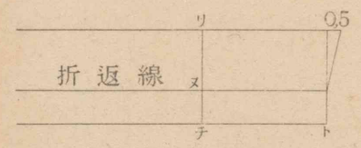


(二)イ,ロ,ハ＝衿附の縫代各0.8cm

ロよりヘまで斜に折返線を引く。

(ロ)衿芯の裁方

(三)



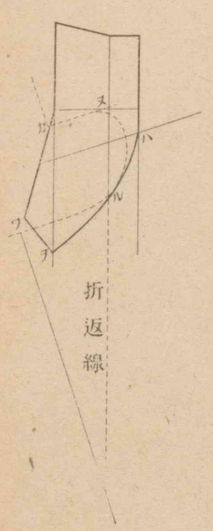
(三)トチ＝衿肩明イロと同寸。

チリ＝衿幅(8cm)

折返線＝チより3cm

0.5cm＝弛

(四)



(四)前頁(二)圖ロと衿芯ヌを合せて兩折返線を重ねる。衿芯トチと(二)圖ハと重なる所より(四)圖ルまで衿刳に合せて標す。

ヲ＝竪衿より凡そ2.5cm下げてルより斜に線を引く。衿先幅ヲワを竪衿先と釣合ふやうに定めてワカ線を引く。

2. 衿布の裁方　芯布と裏衿は斜布で型紙と同じ大きさに裁ち,表衿は横布を用ひて型紙より0.8cm大きく裁つ。

3. **縫方** 芯布・裏衿布は各丈を接ぎ,折返山は伸さぬやうに注意して,三つ衿の部分だけ幅の兩端をよく伸し,へちま衿と同じやうに縫ふ(103 頁參照)。

竪衿には前明より 8cm ほど下まで芯を入れる。附方はへちま衿と大體同じやうにして,竪衿先は好みの形に縫ひ,表衿を綴ぢつけ,肩滑を合せて絎ける(103 頁參照)。

第五節 袷半コート

1. **裁方** 大體羽織と同じで,衿の部分を竪衿に襠の所を小衿とかくし口布にする。

2. **縫方** 長コートを短くしたもので,裾は羽織のやうに折返して前下りをつけ,脇縫・竪衿・小衿は長コートと同じにしたものである。

但し脇縫を割らぬものは,後幅を裾まで同寸にして,前幅だけで裾を擴げる。

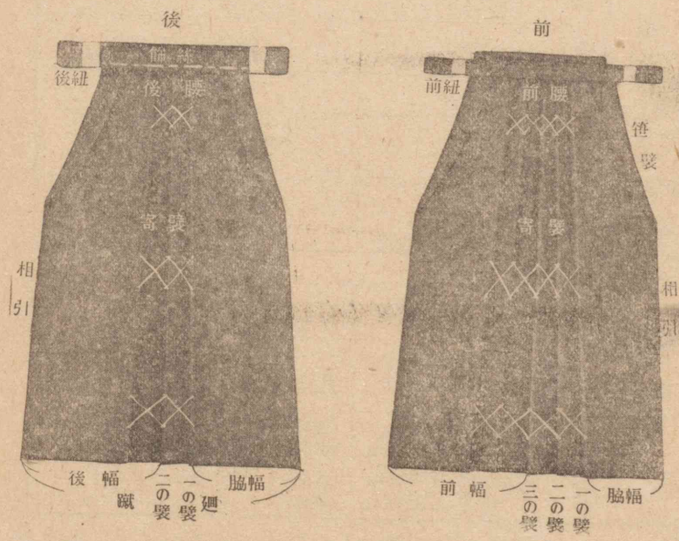
第十章

袴

第一節 女袴

女袴には,襠無と襠附とある。普通は襠無を用ひるが,和風の室内用には低い襠を入れたものが動作に便利である。

1. **名稱**



2. **用布の地質** 綿セル・綿カシミヤ・メリンス・セル・カシミヤ・アルパカ・紬・琥珀・鹽瀨・緞子など。

3. 女袴寸法表

名稱			大人物仕立上寸法	割出し方
紐下			87cm内外	着丈×$\frac{7}{10}$子供物$\frac{6}{10}$
相引			63cm	紐下×$\frac{2}{3}$＋4cm内外 中裁＋3cm内外小裁$\frac{2}{3}$
後	幅		30cm	着物の後幅＋2cm
	脇幅		22.5cm	後幅×$\frac{3}{4}$
	重ね襞		4cm	凡そ後幅×$\frac{1}{8}$
	寄襞幅	下	8cm	凡そ後幅×$\frac{1}{4}$
		上	4cm	凡そ後幅×$\frac{1}{8}$
	笹襞幅		6cm	脇幅×$\frac{1}{4}$
腰幅		後	30cm	後幅と同寸
		前	32cm	後幅＋2cm
前	脇幅		18cm	後幅×$\frac{3}{5}$
	重ね襞		3cm	後幅×$\frac{1}{10}$
	寄襞幅	下	6cm	後幅×$\frac{1}{5}$
		上	3cm	後幅 $\frac{1}{10}$
	笹襞幅		4.5cm	脇幅×$\frac{1}{4}$
襞の深さ			7.5cm	後幅×$\frac{1}{4}$
後布總幅			120cm	凡そ後幅×4
前布總幅			150cm	凡そ後幅×5
後紐			幅 6cm 丈凡そ200cm	後幅×$\frac{1}{5}$ 後幅×6＋20cm
前紐			幅3cm乃至35cm 丈凡そ320cm	後幅×$\frac{1}{10}$ 後幅×10または＋20cm
〔注意〕			腰幅は下の幅の$\frac{1}{2}$になつてゐるから，上の各部分の寸法も$\frac{1}{2}$にする。	

4. 裁方 (イ)女袴大裁

その一

紐下90cm 用布 76cm幅 440cm

前布總幅 152cm 後布總幅 122cm

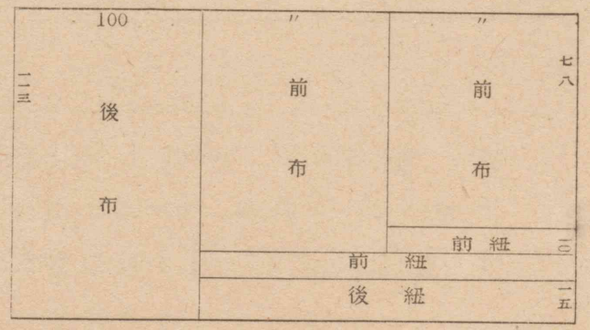
前紐丈 304cm 後紐丈200cm

積り方

布丈＝紐下＋裾絎＋上の縫込
100cm 90cm 2cm 8cm

總丈＝布丈×4＋前紐幅×4
440cm 100cm 10cm

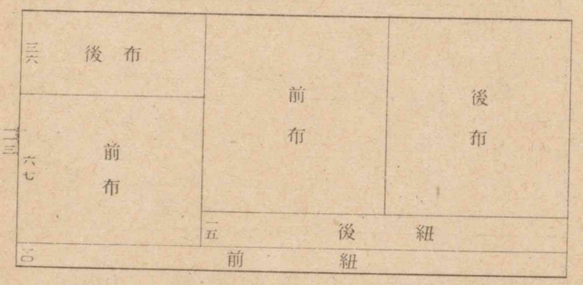
その二 用布 113cm幅 300cm



前布總幅　166cm　後布總幅　113cm

前紐丈　300cm　後紐丈200cm

その三



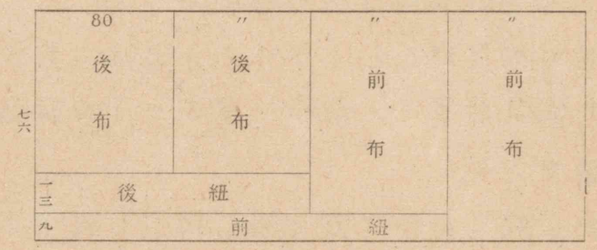
前布總幅　155cm　後布總布　124cm

(ロ)中裁小裁

中裁小裁女袴基礎寸法表				
名稱　年齡	15 歳前後	12歳前後	8歳乃至9歳	5歳乃至6歳
紐　下	72cm乃至75cm	65cm內外	58cm內外	53cm內外
後　幅	28cm	26cm	23cm	22cm

中裁(13,14歳)

用布　76cm幅　320cm

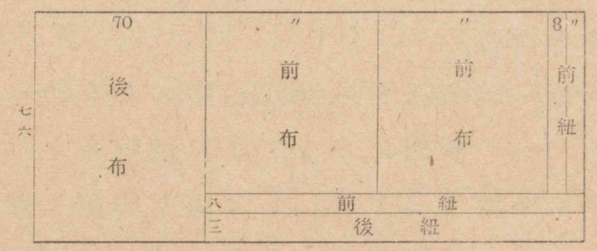


前布總幅　143cm　後布總幅108cm

前紐丈　240cm　後紐丈160cm

小裁(8,9歳)

用布　76cm幅　226cm



前布總幅　112cm　後布總幅　76cm

前紐丈　268cm　後紐丈　156cm

毛織物は裁ち終つたならば,裁目がほずれぬやうに縢縫をする。

5. 仕立方

(イ)布接

(1)仕立直ものは先づ布調をする。

裾の裁目が正しくないときは裁ち直す。

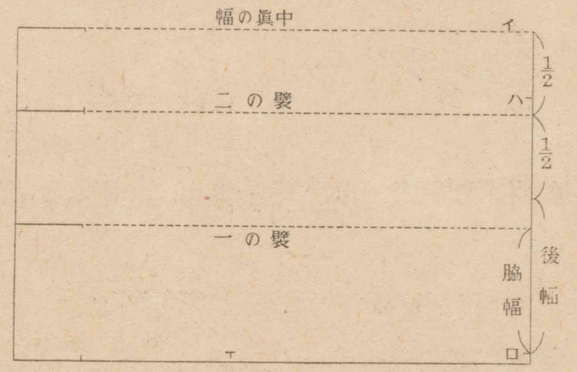
布丈は,前後とも紐下＋裾絎(2cm)＋上の縫込だけ(凡そ5cm)必要である。

前に腰であつた方を裾に,相引を眞中にするやうに注意する。

(2)前·後各々布接をする。毛織物は絹絲かカタン絲で,細縫にする。縫目が布の眞中にある時は,前·後とも裾を右にして手前に,その他の所にあるものは眞中の方に折る。縫代はすべて伏縫をする。

(ロ)裾　前布後布の兩端(相引の所)を10cmほど殘して三つ折絎にする。また蹴廻布をつけるときは並幅の$\frac{1}{2}$を横にして張り加減に縫ひ合せ,隱躾をかけ,0.6cmの裏控にし,奥を絎ける。

(ハ)後標附(三つ襞)　絲標にする。



表を中に幅を二つに折る。

丈標＝紐下と同寸(前後の差をつける時は,その寸法を加へる)

相引の縫代＝1cm

相引標＝(大人物は紐下×$\frac{2}{3}$＋4cm内外)

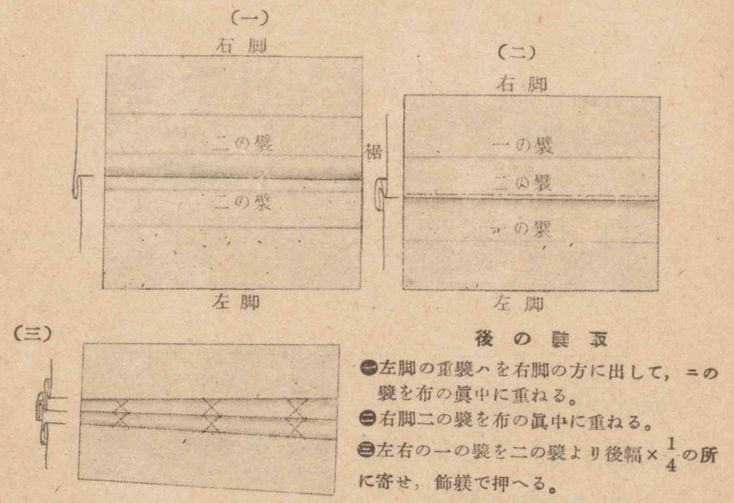
イ＝後布の眞中　脇幅標(一の襞)＝(後幅×$\frac{3}{4}$)

二の襞＝$\frac{\text{イロ}-\text{後幅}}{2}$

重襞(ハ)幅＝後幅×$\frac{1}{8}$を左脚の方にのみニの襞より眞中に向つて標す。

表から各襞を標通りにつまみ,假綴をする。但し左脚はニの襞の代りに重襞ハを折る。

(ニ)後の襞取



後の襞取

㊀左脚の重襞ハを右脚の方に出して，ニの襞を布の眞中に重ねる。
㊁右脚二の襞を布の眞中に重ねる。
㊂左右の一の襞を二の襞より後幅×$\frac{1}{4}$の所に寄せ，飾躾で押へる。

(ホ)前標附

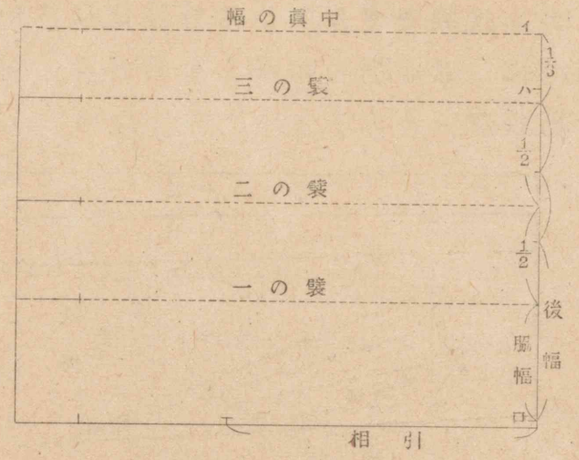
表を中に幅を二つ折にして,紐下·相引の標をする。

三の襞＝$\frac{イロ－後幅}{3}$

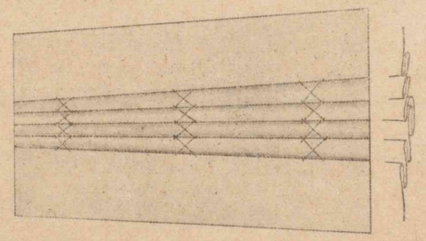
脇幅＝後幅×$\frac{3}{5}$

二の襞＝一の襞と三の襞の眞中

重襞幅＝後幅×$\frac{1}{10}$を右脚の三の襞より眞中に向つて標す。



(ヘ)前襞取　後のやうに表から各襞を折り,假綴をする。



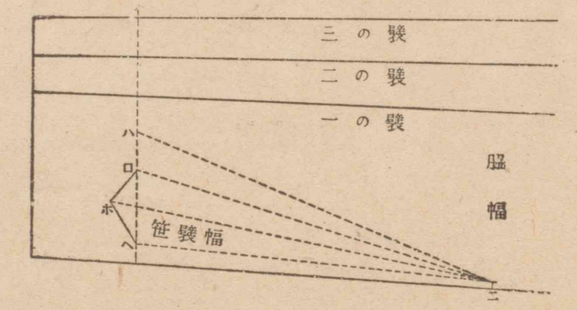
袴の襞取

右脚の重襞ハを左脚の方に出して三の襞を布の眞中に重ね,次に左三の襞をこれに合せる。二の襞·一の襞を各後幅×$\frac{1}{5}$の襞幅に寄せて,飾躾で押へる。

(ト)相引　前後の相引を縫ひ合せ,縫代を前の

方に折り,伏縫をする。上は岐縫になるから,留と重割に注意し,裾の絎殘しを絎ける。

(チ)前笹襞



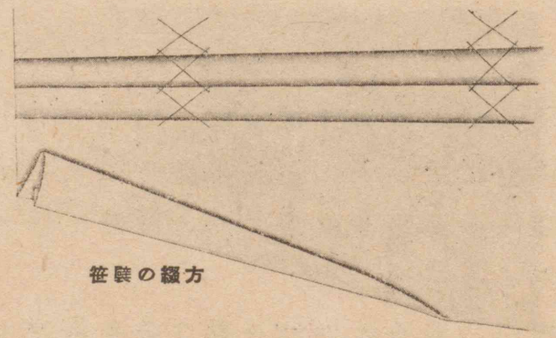
イ＝三の襞　イロ＝$\frac{\text{前腰幅}}{2}$－0.5cm

ハロ＝笹襞幅－0.5cm　ニ＝相引

ニホ＝ハニと同寸　ホロ＝ロハと同寸

ニヘ＝ニロと同寸　ホヘ＝笹襞幅

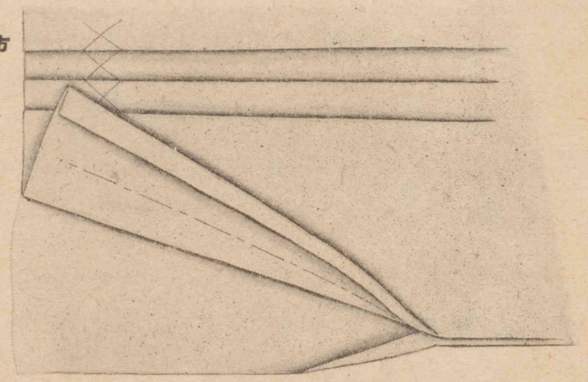
机上でニヘを折り,ホをハに合せ,ニホを曲線



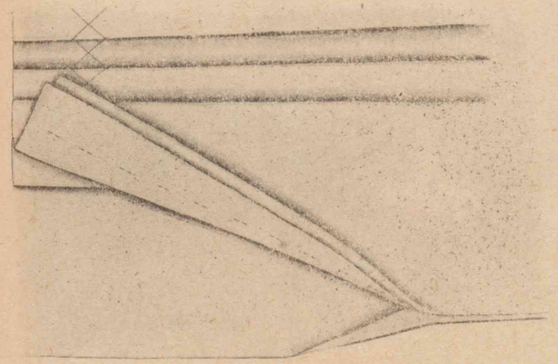
笹襞の縫方

にして笹の葉形に折り,脇布を平にして,その上に笹襞を自然に落ちつける。笹襞を開き,折目の0.4cm内を相引際は小針,他は大針に二目落に綴ぢ,次に表裏を合せて本絎にする。

笹襞の縫方



笹襞の絎方



(リ)後笹襞　前笹襞と同じにする。

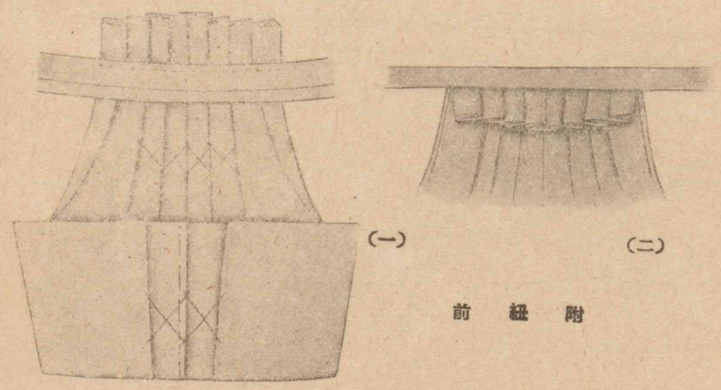
(ヌ)相引の上に閂留をする。

(ル)物差を當てて紐下を三つ折にしておく。

(ヲ)紐　紐布は掛接に,芯布は突合接にし,前·後兩紐とも,丈の眞中を腰幅＋10cmほど殘して紮ける。

前紐に美濃紙または生半紙を揉んで伸し,幅は紐幅と同寸,厚さは適度にして,紐の紮殘しの部分に綴ぢつける。

(ワ)前紐附縫道　紐の方は,折山が0.3cmの被になる所,腰幅は左右を紐下より0.5cm上げて曲線にし二本絲で返針につける。

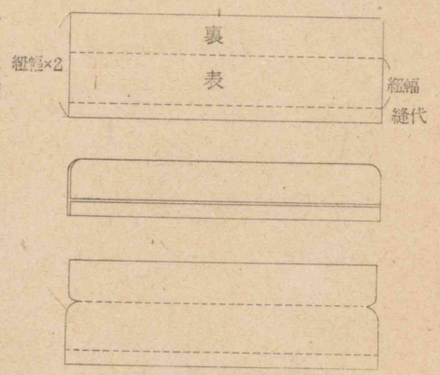


前紐附

紐紮　右三の襞の所は特別に薄くなつてゐるから,紐幅だけに布を疊んで入れ,二本絲で兩端をよくとめて紮ける。

注意　上の縫込が多いときは,紐幅の所から折つて綴ぢつけ,餘りは外に出して紮ける。

(カ)後紐附　腰紙は板目紙の軟かみのある丈夫なものを選び,右圖のやうに裁ち,篦で筋をつけて折り角を取る。



腰紙の裁方

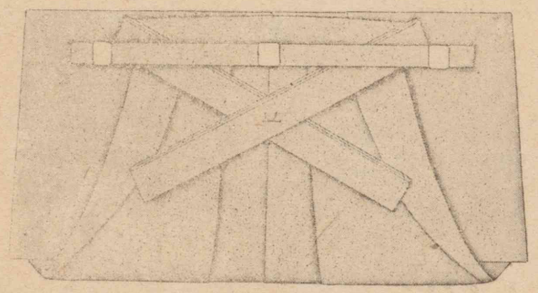
飾絲　腰紙と紐布の縫代山を合せて綴ぢる。飾絲をつけるときは,腰紙の被山から0.8cmの所に裏から針目を標し,飾絲を通す(飾絲の針目は107頁女袴圖後紐參照)。

後紐附縫道

紐 折山が0.3cmの被山になる所。

後腰 普通は眞直するが,帶の結びを高くして着する時は,前腰と反對に兩端を0.5cm下げ,前紐と同じ仕方でつける。

(ヨ仕上 濕布の上から火熨斗をかけ,三つ折にして紐を疊んで綴ぢる。

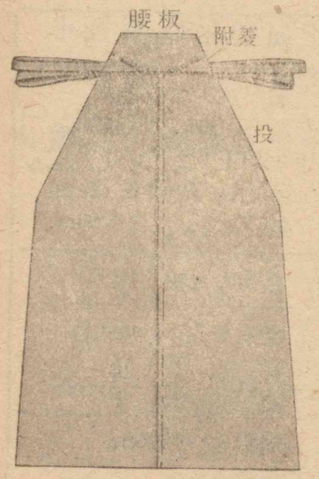


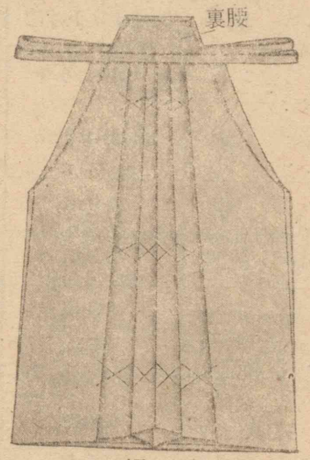
出來上り圖

第二節 男 袴

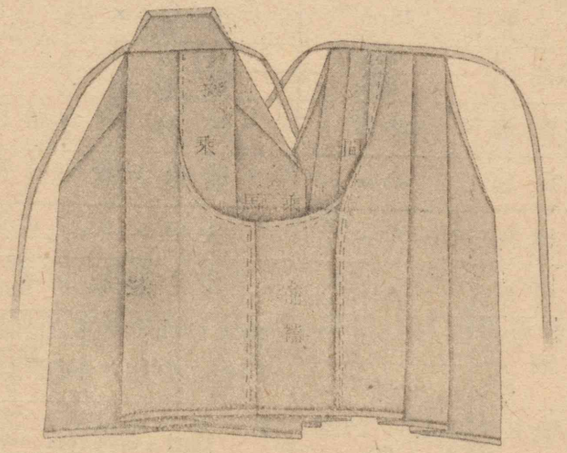
男袴には襠のあるものとないものとがある。襠のあるものは左右兩脚に分れてゐるから,裾に締りがあつて,外見が整ひ,動作にも便利で,衣服としての價値は,襠無に比べて勝つてゐるが,着物の裾に無理が出來るのが缺點である。

1. 男袴の形と名稱





切上



2. 男袴寸法表

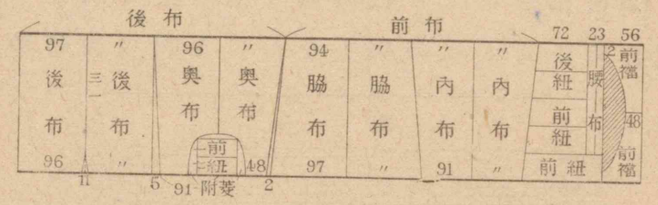
名稱			大裁仕立上寸法	割出し方
紐下			83cm 内外	着丈 × $\frac{6}{10}$
後丈			83cm＋6cm	紐下＋切上（角帯の上に用ひる時，腹部の大きな人に用ひる時はそれに 1.5cm乃至4cmを加へる。）
相引			56cm	紐下 × $\frac{2}{3}$ または＋2cm
後	後幅		30cm	着物の後幅と同寸
	腰幅		25cm	後幅 × $\frac{8}{10}$＋1cm内外
	腰板	幅 下	25cm	腰幅と同寸
		幅 上	16.5cm	腰幅 × $\frac{2}{3}$
		高さ	8.8cm	腰幅 × $\frac{1}{3}$＋0.5cm
		附菱 幅	8.8cm	腰板の高さと同寸
		附菱 高さ	5.5cm	凡そ腰板の高さ × $\frac{1}{2}$＋1cm
前	脇幅		18cm	後幅 × $\frac{3}{5}$
	寄襞幅	下	6cm	後幅 × $\frac{1}{5}$
		上	3cm	後幅 × $\frac{1}{10}$
	笹襞幅		4.5cm	脇幅 × $\frac{1}{4}$
	前腰幅		30cm	後幅と同寸
後布總幅			凡そ100cm（後襠幅を除く）	後幅 × 3.5
前布總幅			140cm 乃至150cm	凡そ後幅 × 5
乘間	幅		34cm	後幅＋4cm内外小裁は同寸
	丈		36.5cm	$\frac{紐下-10}{2}$ 以上 小裁 $\frac{紐下}{2}$
後紐	幅		凡そ3cm	
	丈		72cm	後幅 × 2＋12cm
前紐	幅		凡そ3cm	
	丈		330cm	後幅 × 11

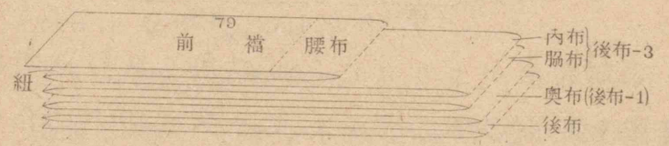
3. 用布の地質

小倉織・紬・絽・仙臺平・博多平・五泉平・嘉平治平・セル・サージ・アルパカ・薄地羅紗など。

4. 裁方　大裁(馬乘袴)

紐下 83 cm　用布　並幅 913cm





折疊圖

用布は,襠にする方から巻き,積り方計算をして表を中側に折疊をする。

積り方

後布丈 = 紐下 ＋ 14cm
97cm　83cm

14cm = 裾紐 ＋ 切上 ＋ 上の縫込(特に前後の差をつける時はその寸法を加へる)
2cm　6cm　6cm

總丈 = 後布丈 × 8 ー 切上總寸 ＋ 紐布丈 ＋ 腰布丈 ＋ 前襠丈
913cm　97cm　14cm　72cm　23cm　56cm

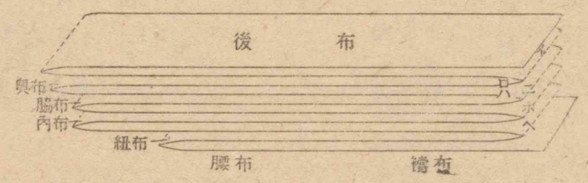
切上總寸＝後布切上×2＋前布切上×4
14cm　1cm　1cm

後布丈＝$\frac{\text{總丈}-(\text{後紐丈}+\text{腰布丈}+\text{前襠})+\text{切上總寸}}{8}$

裁切方

(1)折疊んだ布の下を上に左を右に置き直す。

(2)後布をイより裁ち切り,輪の方で後幅＋縫代の所から1cmの切上をつける(次頁後布參照)。
30cm　1cm



(3)奥布はイよりロに5cmの切上をつけ,次に奥布を手前の方にずらして,ハをロ切上に合せて斜に裁ち切る(次頁奥布參照)。

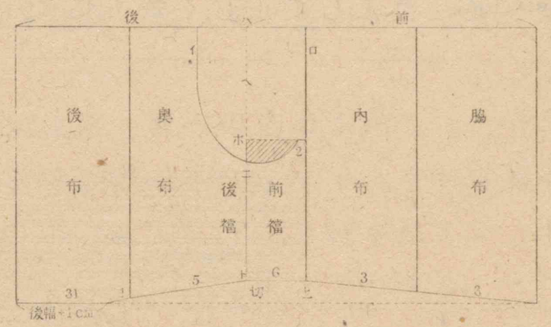
(4)脇布ハは5cmの切上になつてゐるから,ハニで2cm裁ち落して3cmの切上に直し,ホをそれに揃へて裁ち切る。

(5)內布は3cmの切上になつてゐるから,ホに倣つてへを裁つ。

(6)次に紐·腰布·襠を裁つ。

(7)後布·奥布·襠·內布·脇布と全體を次の圖のやうに並べ,乘間を裁つ。

布の合せ方·乘間の裁方



イロ＝乘間幅(34cm內外)

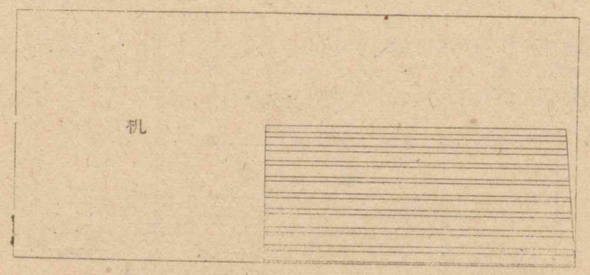
ニト＝襠の高さ(48cm)

前襠の刳　ニホ＝8cm ホを中心に楕圓丸みに裁つ。

奥布の刳　へ,イ兩線の間は17cm ニへ＝17cm×$\frac{3}{2}$とし,へを中心にイ線よりニまで楕圓丸みに裁つ。

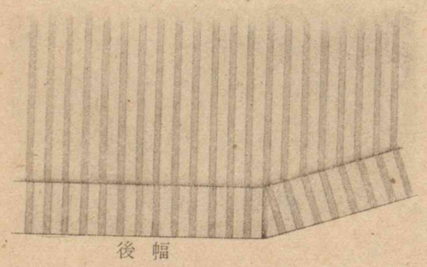
5. 仕立方

(イ)裾紵の標附　縫直物は各布を表中に合せて圖のやうに置き,机の縁から切上の寸法を計つて調べ,通し篦をして正しく裁ち切る。



各布の切上に倣つて2cmの裾紵標をし,脇布と後布とには相引標をして,布合順に揃へる(前頁參照)。

(ロ)布接合　各布は中表になつてゐるから,外側に縫目が出るやうに縫ひ合せ,縫代は皆前襠の方に折り,襠の縫代には伏縫をする。



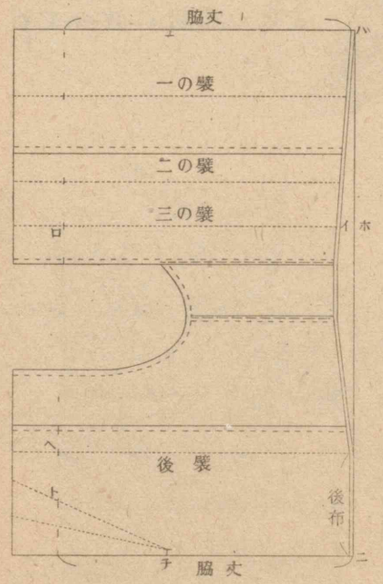
後布の裾紵の襞

裾紵は,兩端を5cm殘し,後布の切上の角には,襞を取つて,切上の形を崩

さぬやうに紵ける。

(ハ)乘間縫合　左右兩布の表を外に裾の方から乘間を合せ,裁目の部分だけ袋縫にするから,0.4cmの縫代に縫ひ,次に裏の方に返して全體を縫ふ。

(ニ)襞標附　前布の襞の割出しは,女物と同じであるが,並幅物は,縫目が出るから,次のやうにする。



脇幅(一の襞)＝後幅×$\frac{3}{5}$

二の襞＝縫目より7cm

三の襞＝眞中の縫目より11cm

イロ＝紐下

蹴上ハニに絲を引きイホの寸法を調べる。

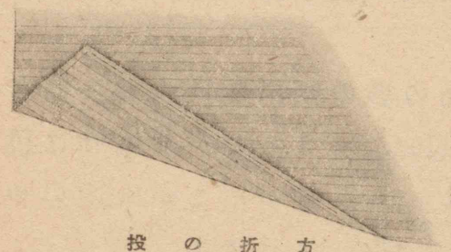
脇丈＝ホロと同寸(兩脇丈の間に絲を引く)

前丈は絲の通り,後丈は絲より前後の差だけ長くして,各襞の所に絲標をする。

ヘト＝$\frac{後腰幅}{2}$

トチ＝投(斜三つ折紵にする針目の間は,上の方は3cmに,下の方は次第に細かくする)。

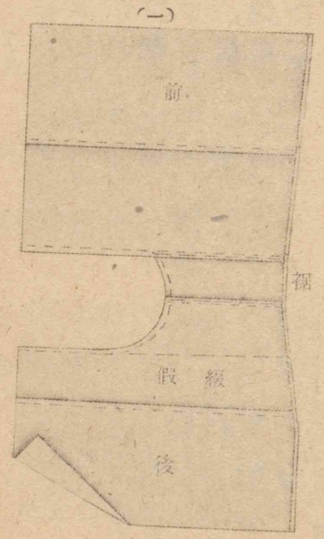
注意 (1)投は机上で布を大きく自然に折り,上から押へて假綴をする。

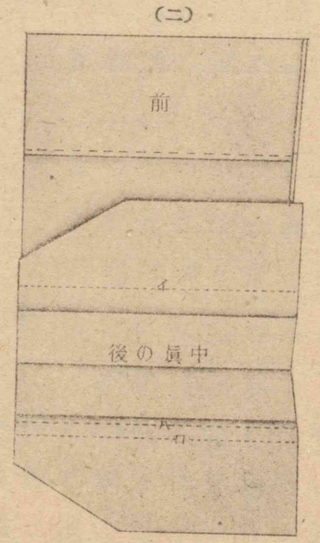


投の折方

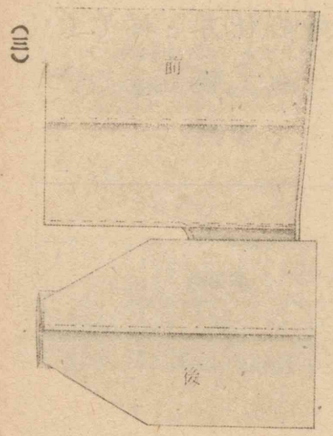
(2)投の折が後幅にかゝるときは角を後布の布目に倣つて折込む。

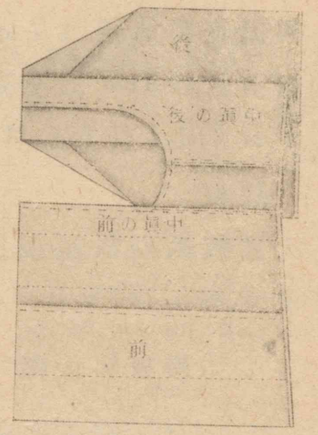
(へ)襞取

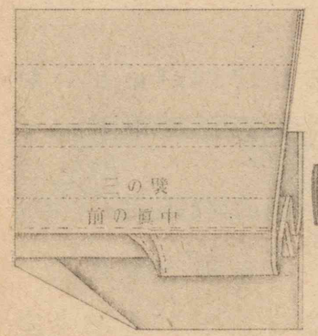


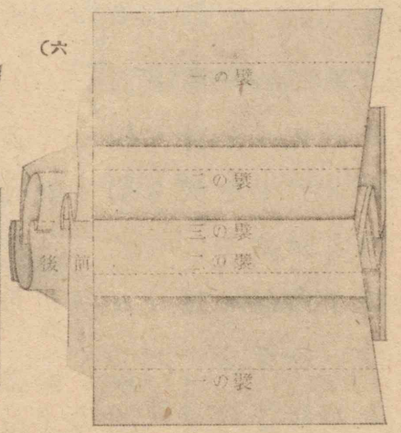


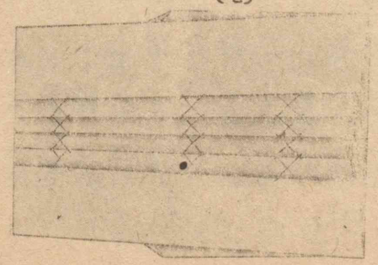
㊀裾を右,後布を手前に置き,後の眞中に荒く假綴をする。
㊁後布を眞中の假綴より向ふに開く。ロハ＝重襞4cm,ハを摘み,ロを後の眞中に,イをロに合せ,重なつた布を一束にして二目落の躾をする。











㊃後を向側に返す。
㊄前の眞中を後の眞中に重ねる。
㊅左右兩三の襞を眞中に重ね,左脚の三の襞より向に返して前布を擴げる。
㊆前の寄襞は女袴と同じにする。

相引・笹襞・前紐附など女袴の仕方と同じにして,相引留の4cm上と裾を合せて輕く三つ折にしておく(116頁より118頁まで參照)。

(ト)腰板

(1)腰板紙の裁方

イロ,ハニ＝

$$\text{腰板幅}_{25cm}\left(\text{後幅}\times\frac{8}{10}+1cm\right)$$

ロハ,イニ＝腰板の高さ$\left(\text{イロ}\times\frac{1}{3}+0.5cm\right)$

ハホ,ニヘ＝イロ$\times\frac{1}{3}$

イホ,ロヘを計り,同寸であれば形が正しいから,ロホ,ヘイを裁ち切り,表裏に幅の眞中を標す。

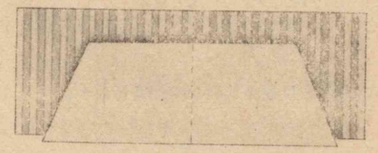
(2)表腰貼方

糊は續飯を用ひるのが最もよい。

固い紙撚を1本つくる。

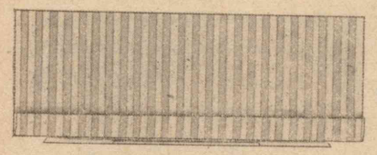
表腰布幅の中央の上下に絲標をし,次に布の下を表の方に2cm折り,輕く烙鏝を當てておく。腰板紙の方には,表全體に糊をつけ,その糊をよく拭ひとる(糊は腰板の下だけ,は全體に高さ1cmぐらゐつけてもよい)。

(一)



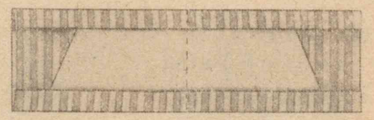
❶腰板の下の方を紙撚が入るだけ開けて,布と腰板紙の眞中を合せる。

(二)



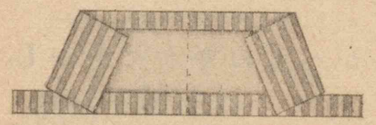
❷縞目通りに撫でて貼りつける。紙撚は腰板幅の$\frac{1}{2}$の長さに切り,全體に糊をつけ,腰板の裁目に添へておく。

(三)



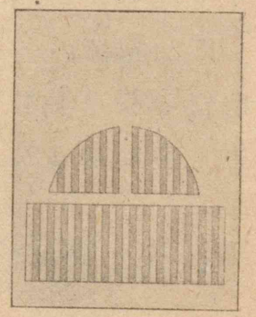
❸紙撚の際に筋目を立てて裏の方に布を貼る。

(四)



❹腰板の脇は,下から2cmの所に切目を入れて貼る。

(五)



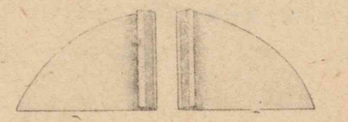
❺裏腰布・附菱布の裏打

(3)裏腰布・附菱布の裏打

生半紙をよく揉み,烙鏝で伸し,裏腰布・附菱布の周りに糊を極く細くつけて貼り,烙鏝で乾し,周りの紙を裁ち切る。附菱布は左右の別が出來るやうに向合せに貼る。

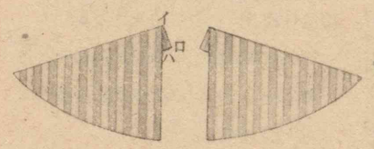
(4)附菱の折方

(一)



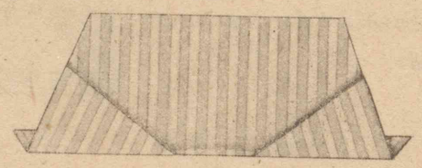
㊀縦の布目通りに1cmの深さに折る。

(二)



㊁イロ＝上の折代1cm
ロハ＝イロ×$\frac{1}{2}$にして自然に折る。
イロハはなるべく平らにして，裏の方に折込む。

(三)



㊂イホ(附菱の高さ)＝腰板の高さ×$\frac{1}{2}$＋1cm
ホヘ(附菱幅＝腰板の高さと同寸附菱のイホを正しく腰板に合せてホヘを裏の方に折つて貼りつける。

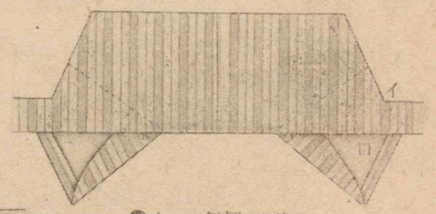
腰板に壓をしてそりかへらぬやうに乾かし，その間に前紐附をする。

(5)前紐附

前紐の接は,裁目の斜をそのまま短い方と長い方を合せ,掛接にし,女物と同じにつける。

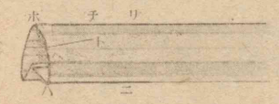
(6)後紐のつけ方　後紐は左右2本とも各芯を入れ,一端は角紺に,一端は,そのまま5cmほど紺け殘す。

(一)



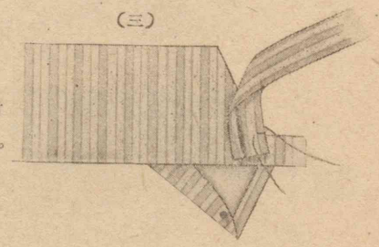
㊀ハニ＝紐の端の紺殘し(5cm)
ホチ＝紐の山
ホヘ・トチ＝各1cm
ヘト＝0.2cm 切目を入れる
チリ＝0.5cm
ホリ＝2.5cm

(二)



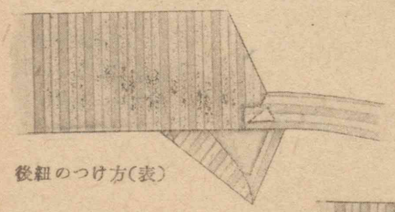
㊁イロ＝紐幅－0.2cm

(三)



㊃後紐を少し下げ加減にして紐の表側の紺代で腰板をくるみ　裏側の紺代は表から見えぬやうに深く折つて,附菱を狹み,2本撚の絲で確かとつける。

(四)

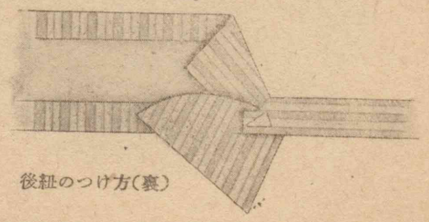


後紐のつけ方(表)

㊂(二)のリを(一)のイに合せ,2本撚の絲で2回貫き確かと細結にして留める。

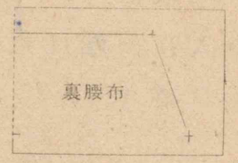
紐留の絲のかけ方各種

(五)



後紐のつけ方(裏)

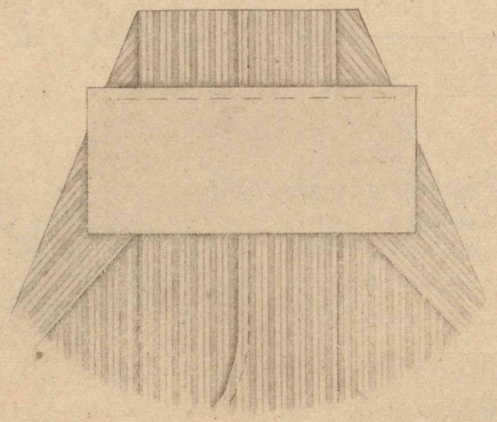
(7)裏腰布標附　裏腰布の幅を中表に二つ折にする。



下の幅＝表と同寸

上の幅と高さ＝表－0.3cm

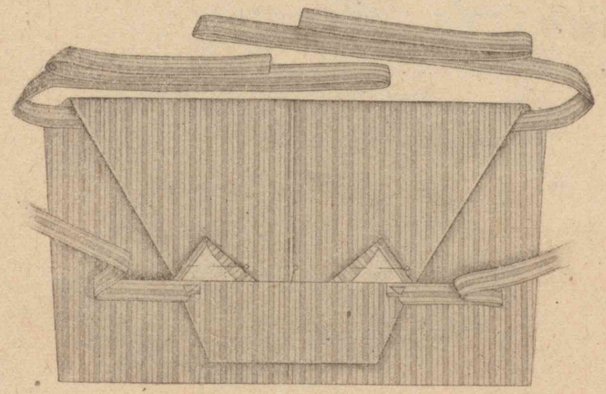
(8)裏腰の假綴　腰板を後腰の絲標に合せて正否を調べてから,裏腰布を後の裏に合せて,縫道の0.2cm上に假綴する。



腰布の假綴

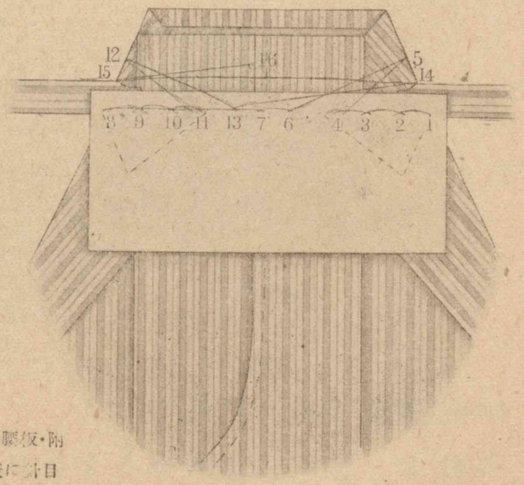
(9)腰立

待針　腰板を後腰に正しく合せ,眞中には待針を立て,兩附菱を開いて待針を打つ。



待針の打方

絲の掛方



絲の掛方

1.2.3.4 8.9.10.11 表針目を附菱の中に隱す。

5.12＝針目を見せずに附菱山をつける。

7＝腰幅の眞中で紙撚にそへて小針に襞を押へる。

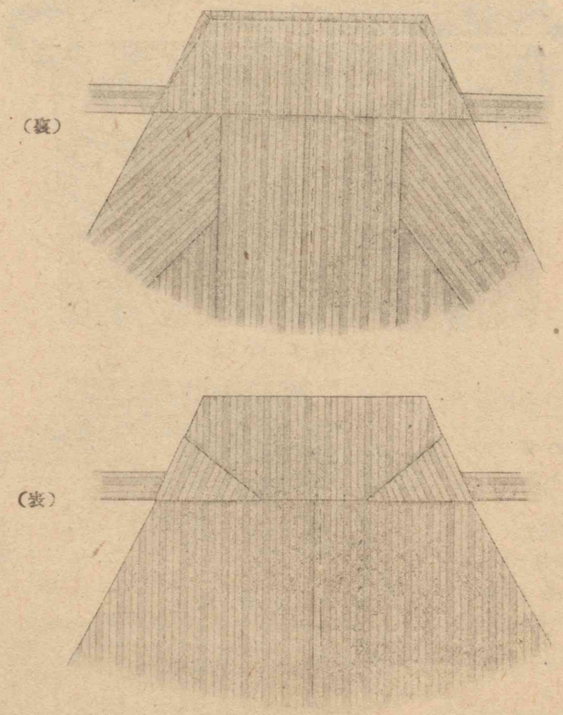
6.13＝7と附菱の端との中央に7に倣つて小針に正しく出す。

14.15＝紐山の所を紐・腰板・附菱・裏腰布の四つを表に針目を出さずに留る。

16＝腰板の表に貫き，その穴から針を針に入れて絲留をする。

(10)出來上り

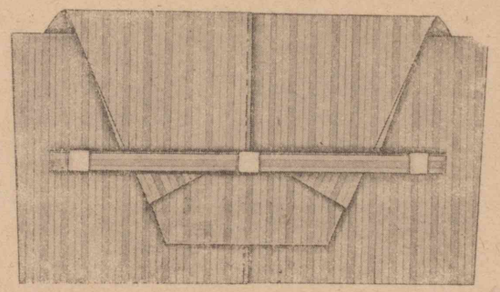
裏腰布の整へ方　裏腰布の上の方は,表より0.4cm控へて下圖のやうに折り,糊附にするか,または絎けつける。



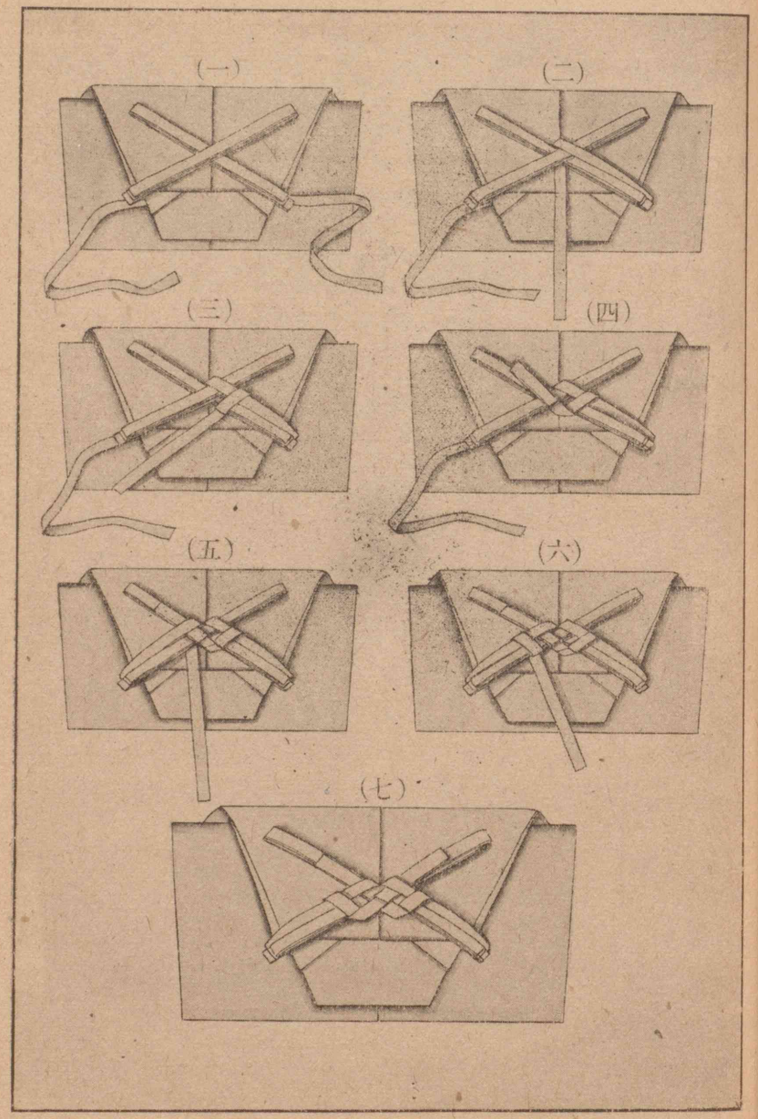
出來上りの表腰

(11)相引留の所に閂留をする。

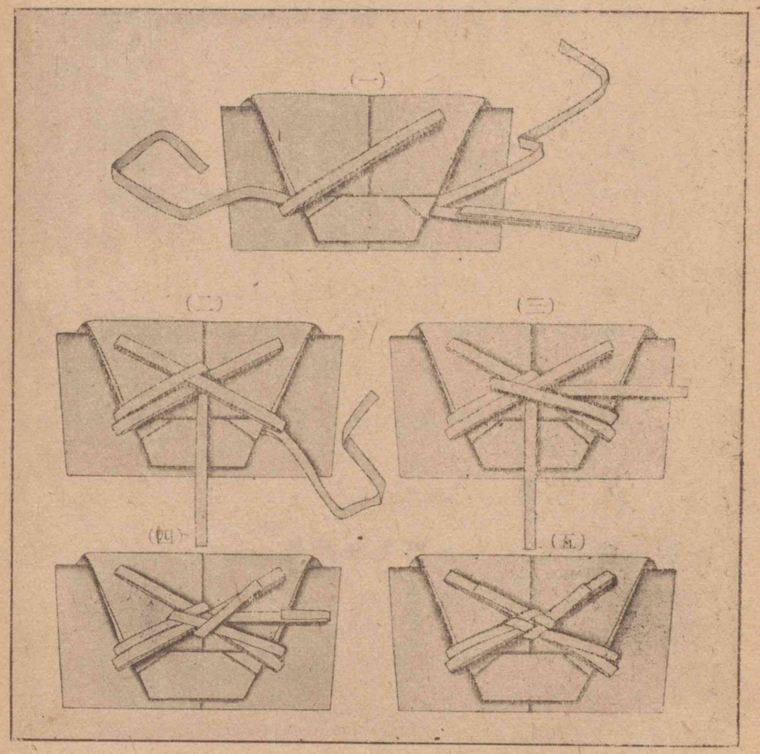
(12)仕上　腰板には火慰斗をかけぬやうに注意し,三つ折にして紐を疊み,紙で束封をする。



出來上り

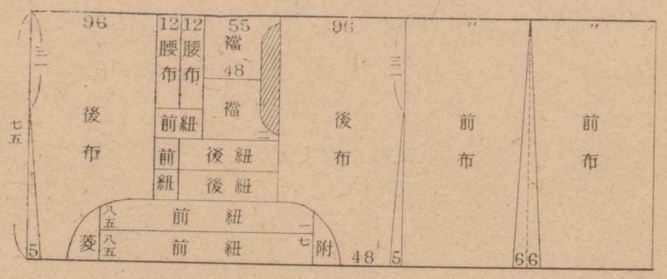


袴の畳み方・紐結の順序(吉事結)



袴の畳み方・紐結の順序(凶事結)

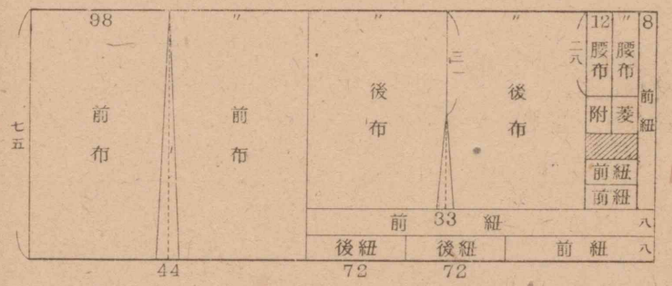
75cm幅の男袴裁方　用布463cm



積り方

總丈＝後布丈×4＋襠丈＋腰布
46cm　96cm　55cm　24cm

襠無男袴　用布75cm幅　424cm

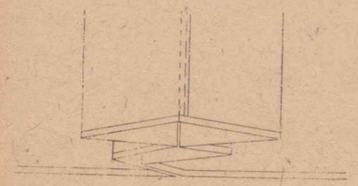


積り方

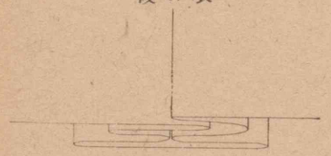
總丈＝後布丈×4＋腰布＋前紐
424cm　98cm　24cm　8cm

仕立方　縫合　女物と同じにする。

後の裏



後の表



襠無袴の後

襞取

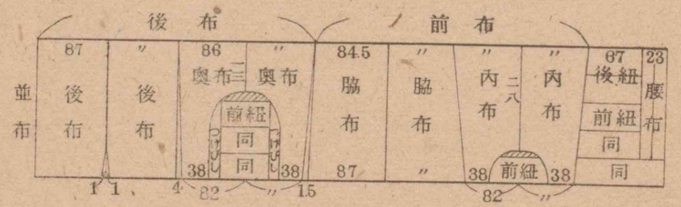
前は女袴と同じである。

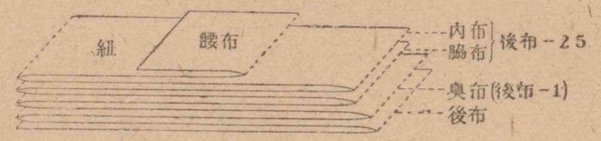
後は,襞の深さが少いときは女物のやうにする外ないが,普通は左圖のやうにする。

第二節　中裁·小裁·裁方

1. 中裁(15,16歳)

用布　並幅　774cm





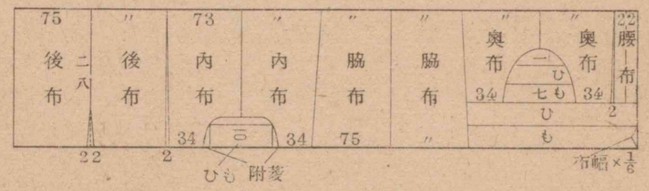
積り方

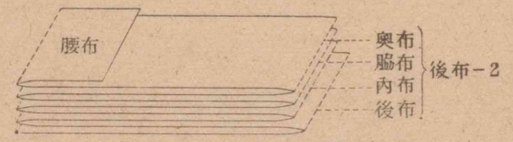
總丈 = **後布丈** × 8 + **後紐丈** + **腰布** − **切上**
774cm　87cm　67cm　23cm　12cm

後布丈 = $\frac{\text{總丈} - (\text{紐丈} + \text{腰布}) + \text{切上}}{8}$

2. 中裁(12,13歳)

用布　並幅 610cm





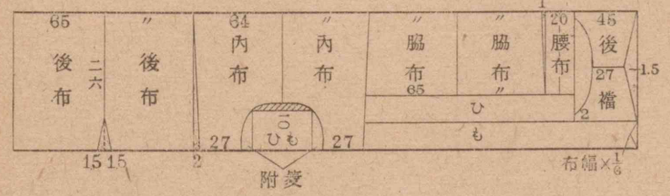
積り方

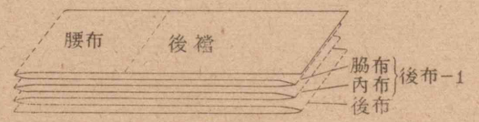
總丈 = **後布丈** × 8 + **腰布** − **切上**
610cm　75cm　22cm　12cm

後布丈 = $\frac{\text{總丈} - \text{腰布} + \text{切上}}{8}$

3. 小裁(6,7歳)

用布　並幅　441cm





積り方

$$\text{總丈}_{452cm} = \text{後布丈}_{65cm} \times 6 + \text{腰布}_{20cm} + \text{後襠}_{45cm} - \text{切上}_{7cm}$$

$$\text{後布丈} = \frac{\text{總丈} - (\text{腰布} + \text{後襠}) + \text{切上}}{6}$$

注意 中裁(15,16歳)は大裁馬乘袴の襠をはぶき,内布と奥布に乘間をつくつたものである。

中裁(12,13歳)は,15,16歳裁の奥布の脇より紐を裁ち落したものである。

小裁(6,7歳)は12,13歳裁の脇布より紐を取り,奥布を廢して小さい後襠としたものである。

第十一章

重物類

第一節 小袖重

1. 小袖重は,普通は2枚重であるが,女物の式服には3枚重を用ひることもある。

2. 重をつくる時の注意

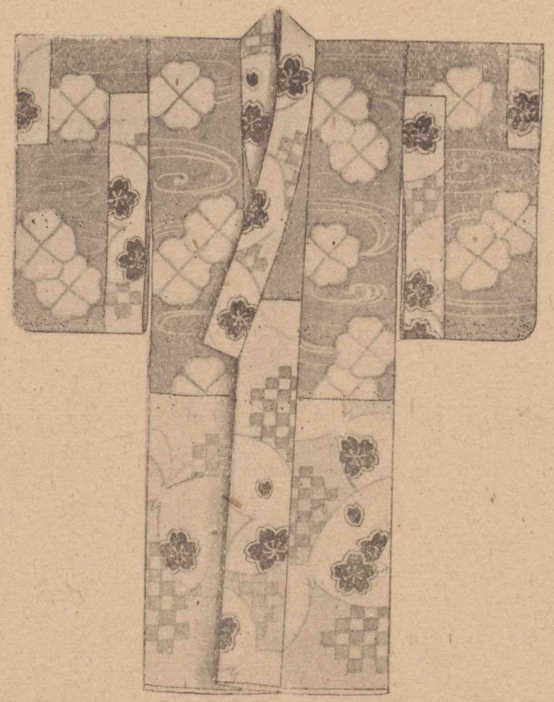
下着の地質 儀式物は白羽二重ときまつてゐるが,普通はなるべく上着と同質のものを用ひる。

下着の色合 上着と同色の薄色,上着と補色系の明るい薄色などにして,幾分上着より派手なものがよい。

裾廻布·袖口布 上着·下着は,無垢の外は,必ず同質同色のものを用ひる。

胴拔 女物の下着は胴拔にすることが多い。胴拔には,薄い絹の板締,絞などを用ひる。これは輕く軟くして着易いばかりでなく,價も安く出來る。

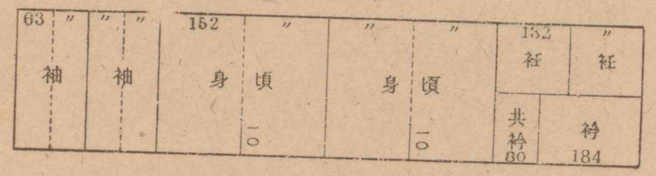
胸模樣（重袖二枚）



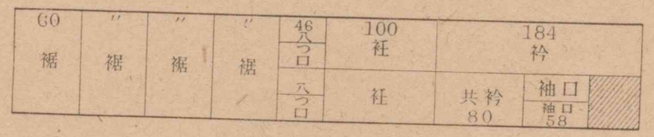
裾下拔調

3. 裁方

(イ)上着表　用布　並幅1反(1124cm)



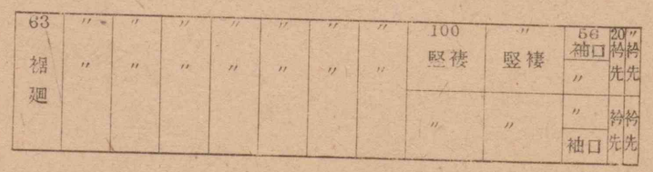
(ロ)下着廻　用布　並幅半反(570cm)



(ハ)下着胴抜　用布　並幅(677cm)

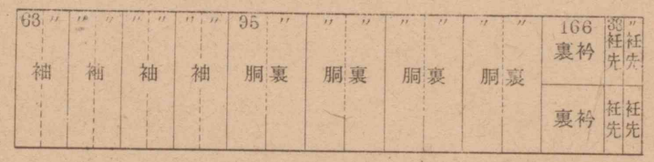
(ニ)裾廻(2枚分)　用布　並幅(800cm)

裾廻布8枚　竪褄布·袖口布を4枚づつ



(ホ)胴裏(2枚分)　用布　並幅(1506cm)

袖·胴裏·衽先各4枚　衿裏2枚



無垢一枚の裁方

4. 下着寸法詰方表

	女物		男物	
	袷	綿入	袷	綿入
袖丈	0.6cm乃至0.8cm	1cm	0.8cm	1 cm
袖幅	0.4cm	0.5cm	0.4cm人形の所0.8cm	0.5cm人形の所0.8cm
袖口	上着と同寸	同寸	同寸	同寸
袖附	0.4cm	0.5cm	0.8cm	1 cm
衿肩明	0.4cm	0.4cm	0.4cm	0.4cm
身丈	凡そ0.2cm	凡そ0.4cm	凡そ0.2cm	凡そ0.4cm
後幅	0.4cm	0.4cm	0.4cm	0.4cm
肩幅	0.4cm增	0.5cm增	0.4cm增	0.5cm增
前幅	0.4cm	0.8cm	0.4cm	0.8cm
衿丈	0.8cm	1. cm	0.8cm	1 cm
裄	同寸	同寸	同寸	同寸

注意 (1)三枚重は中着を普通寸法にして,上着は下着を詰める寸法だけ增す。

(2)袖丈は上着が錦紗のやうな薄地物のときは,詰める寸法を少くする。また袖裏が新モスなどで八つ口布をかけたものは,詰める寸法を增さねばならぬ。

(3)縮緬の下に羽二重を重ねるときは,縮緬の垂れ方と羽二重の張り加減を見て寸法を斟酌する。

5. 仕立方

(イ)袖　上着と下着の標附をする(胴拔下着は,表に袖口布·八つ口布を平らにかける)。

上着·下着の袖口を合せ,袖口下·袖下を縫ふ。八つ口は,袖幅を折つて一度上着·下着を重ね,釣合を見てから縫ひ,袖だけが正しく重なるやうにつくつておく。

(ロ)身頃　上着·下着の標附をする。胴拔下着は表胴接の縫代を裾の方に折つて隱躾をし,上着·下着の表裏4枚とも脊縫·脇縫·衽附をする。次に上着·下着の表裏を合せてから上着·下着を重ね,衿肩明の脊縫·肩山(衿肩の所と兩袖附山)で4枚を合せ,待針で押へ,これを衣紋竿にさげ,上着の表丈標を標準として上着·下着の表と,表,裏と裏の丈を正しく揃へて裾合をする。

裾合が出來たら,上着·下着を重ねて良否を調べる。軟質の脊·脇·衽などの綴は,衣紋竿にさげて1,2個所合標をしてから綴ぢる。

(ハ)袖附が出來たら衣紋竿に下げて,裄·袖附·八

つ口の關係を調べる。

上着・下着の衽綴をして衿下を縫ふ。

(ニ)衿

下着の衿丈は,衿肩明と身丈で自然に詰るが,不足分の0.3cm乃至0.5cmは衿先から10cmほどの間で衽布を引きあげて詰める(衿丈も衣紋竿に下げて調べる)。

衿紵をする。

(ホ)裾綴をして共衿をかけ,仕上をする。

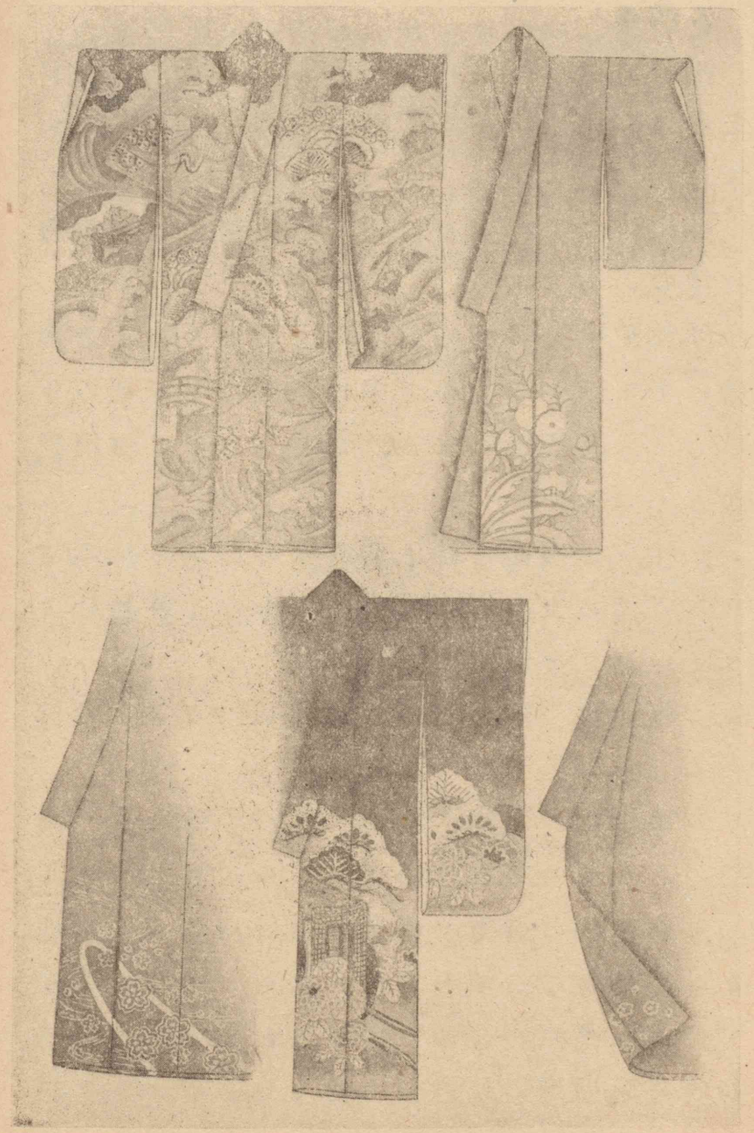
6. 儀式服

(イ)正式

吉事用　上着は三つ紋・五つ紋の無垢(袖口布・裾廻布が表と同じもの)で,婦人は黑地の模樣物に白無垢を重ねたものが最も正式である。

凶事用　一般には模樣のない黑無垢を用ひる。

(ロ)略式　裾廻變色の紋附・小紋紋附の無垢・無地または模樣に縫紋,無地の一つ紋など。



(上左より) 鶴淺樣・江戸棒模樣
(下左より) 裾模樣・袴模樣・袱模樣

7. 模様

(1)袵模様　裾裏15cmぐらゐから,表袵にかけて簡單な模様のあるもの。質素で老人向である。

(2)裾模様　衽·前身頃·後身頃の裾の表裏全體に模様のあるもの。

(3)腰模様　着物の前も後も腰から裾まで模様のある華かなもので,主に振袖にして,袖の下の方にも模様をつける(ぼかしたものは曙模様などといふ)。

(4)江戸褄模様　衽と前身頃の裾から衿下ぐらゐまでの表裏に模様のあるもので,年齢によりその高さを加減する。

(5)胸模様　裾·袖下の外に胸·袖山などに模様のあるもの。

(6)總模様　着物の全體に亙つて總合した模様のあるもので,紋は附けないのが普通である。

8. 模様物の縫方　模様物は,寸法通りに假縫をして染めてあるから,その通りに模様を合せて縫ふ。模様を合せる所は袖口下·袖附·脊縫·脇衽附·衿附·裾廻の縫目·裾合·衿下などである。模

様の合ないとき,模様を合せると寸法が違ふときなどは,濕をかけて適當に地直をする。

江戸褄模様のやうなものは,衽附をしてから前幅をきめて脇縫をする。脇縫にも模様のあるものは脇縫をしてから後幅を計り脊縫をする。

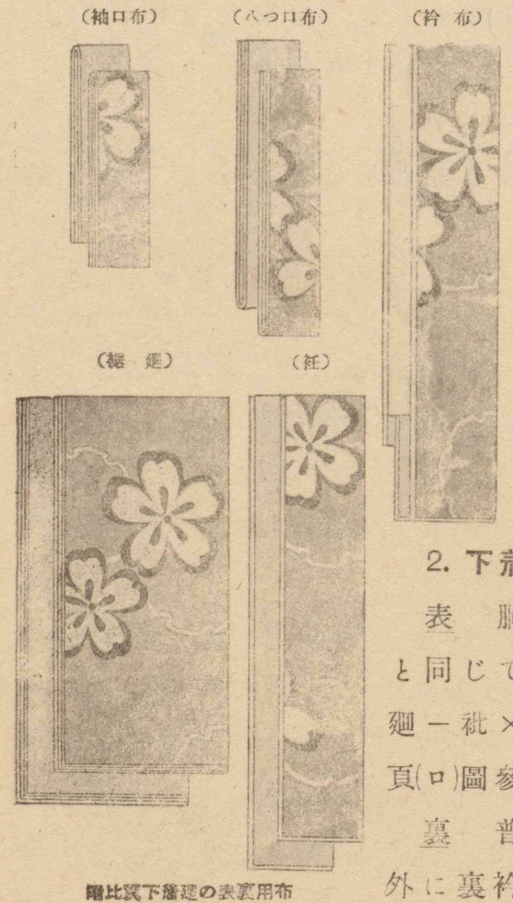
裾合に模様のあるものは,裾合をしてから,裏の胴接をする。

注意　(1)染方によつては,濕のために色がにじむもの,落ちるものなどがある。

(2)濕をかけるときは,紋の部分に布をあてて,にじまぬやうに注意する。

第二節　比　翼

着物の袷または綿入の廻りだけに下着をつけて二枚重のやうに見せたもので,附比翼と比翼とがある。



附比翼下着廻の表裏用布

〔第一種　附比翼〕

1. 上着　普通の着物と同じに仕立てる。

2. 下着廻の裁方

表　胴抜下着の廻りと同じで,丈は上着の裾廻一袵×2にする(148頁(ロ)圖參照)。

裏　普通の裾廻布の外に裏衿と八つ口布が必要である(裾廻丈は上

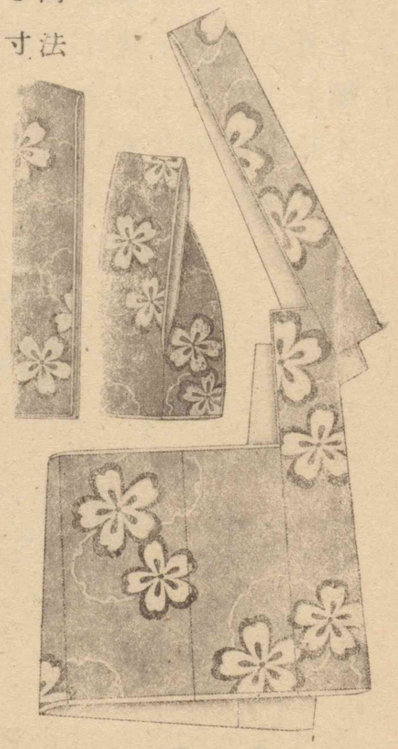
着の裾廻と同寸)

3. 下着の縫方

(イ)袖口　丈・幅とも上着の袖口布と同寸にして,奥の廻りは,表を 0.2cm 控へ,上着に重ねて,奥を袖口布に紵けつける。

(ロ)裾と衿　裾丈は上着の裾と同寸。幅は後前とも上の方は下着と同寸。下の方は,下着の寸法として上から 8cm の間で斜にする。竪褄を上着と同寸に,衿丈は下着の寸法に詰めて,圖のやうに縫ひ合せ,奥の廻りは,表を 0.2cm 控へて上着に重ね,奥を紵けつける。

(ハ)八つ口　袖下は八つ口の方を 0.8cm 詰めて斜に縫ひ,奥は 0.2cm の表控にして裏袖に紵けつける。

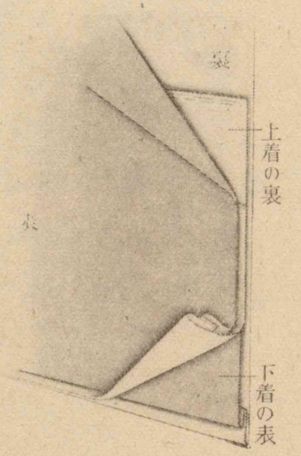

裾と衿

〔第二種　本比翼〕

1. 用布　用布の數·丈などは附比翼と同じで,外に燧布を丈·幅各10cm内外にして2枚用意する(1枚は裏地,1枚は胴拔のやうな柄を選び,各三角形に2分する)。

2. 本比翼概說　本比翼は袖口·八つ口·裾·衿など皆下圖のやうに表布と裏布の間に上着の裏と下着の表とを挾んで奥を縫ひ合せ,着物の裏に綴ぢつけたものである。

本比翼は,附比翼に比べて精巧な縫方であるが,取りはづしの出來ないのが缺點である。



本比翼の縫方

3. 寸法の詰方　附比翼と同じである。

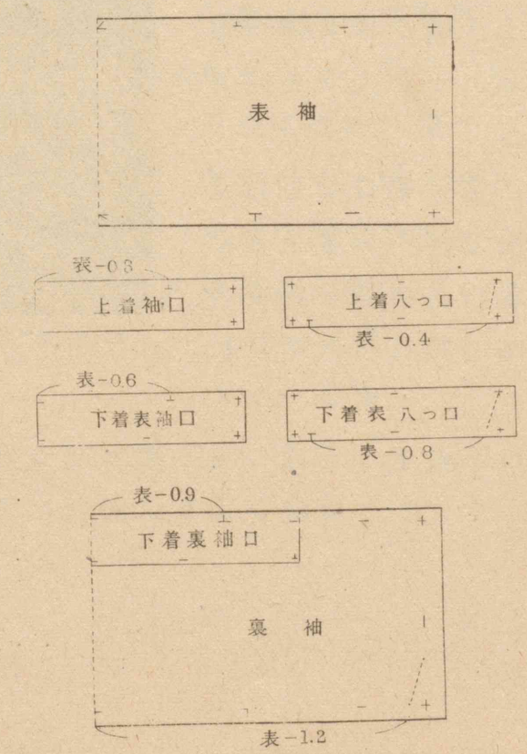
4. 仕立方

(イ)袖標附

表袖·裏袖　表袖と裏袖の丈·幅の關係は普通にする。

袖口布　裏袖口は袱の分をとり,丈幅は皆同寸にし,袖口明は表より順次に0.3cmづつ詰める。

八つ口の丈　八つ口の方は表より順に0.4cm



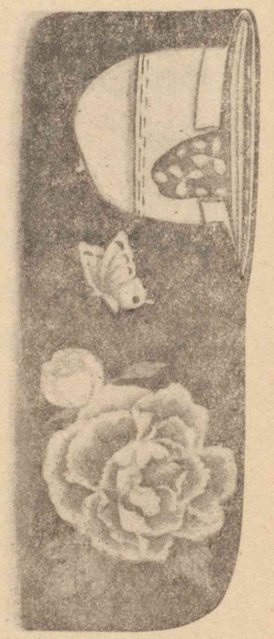
づつ詰める。

ロ)縫方

(1)袖口　上着の袖口を合せ,四つ留をして,袖口布丈まで別々に縫つて表裏を綴ぢ,袖口袱を整へて躾をかける。

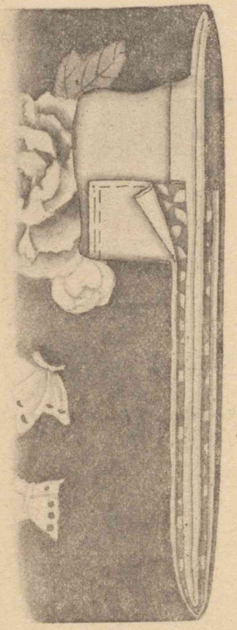
裏袖に袖口布をかけて下着袖口布と縫ひ合せ,四つ留をして,袖口下を上着と同寸だけ縫ふ。

上着·下着の袖口を正しく重ねて,躾で押へおき,上着の裏と下着の表の奥を縫ひ合せ,下着裏の袖口布の縫目に綴ぢつける。



本比翼の袖口縫方

(2)袖口下·袖下　普通に表と裏を四つ縫にし,袖下を$\frac{1}{2}$ぐらゐまで縫ひ,殘りは別縫にする。



八つ口の縫方

八つ口布の袖下を縫ひ,八つ口合せをして,上着·下着の振口を重ね躾で押へ,奥を縫ひ合せ,裏袖に表は小針,裏は3cmのあらさに綴ぢつける。

(ハ)身頃及び衽標附

表身頃(後·前共)　普通の通り。

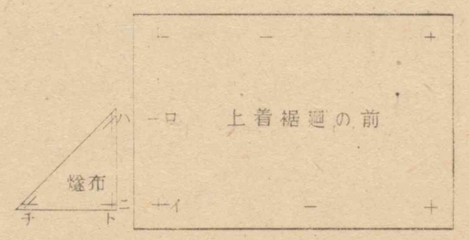
上着裾廻及び胴裏　裾廻も胴裏も普通に標す。但し裾廻の前には燧附の標をする。

燧附イロ＝燧布ハニと同寸。

燧布は胴拔地と胴裏地とを4枚重ねて標す。

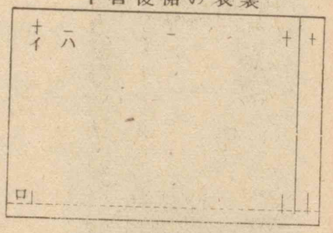
ハニ＝胴接

トチ＝衽附



下着後裾の表裏

表裏を重ねる。



裏丈標＝上着裾廻と同寸。

表丈標＝裏丈標－袱×2

後幅イロ＝上着と同寸。

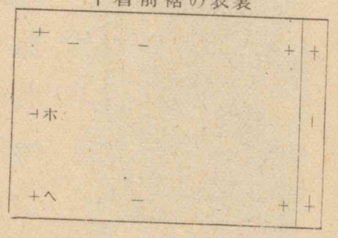
イハ＝8cm

ハ以下＝上着後幅－0.4cm

イハ＝斜になる。

下着前裾の表裏

表裏を重ねる。

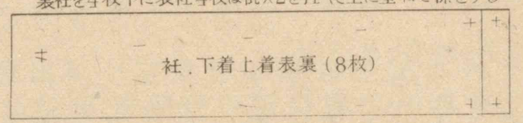


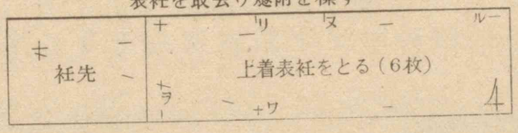
丈標　脇縫標は後裾に倣つて標す。

前幅
- 下の方
  - 袷　上着－0.4cm
  - 綿入　上着－0.8cm
- 上の方　上着と同寸

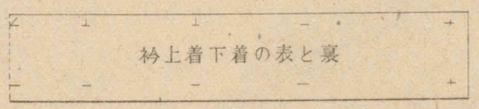
ホヘ＝燧附標(表の方にだけ燧布ハニと同寸に標す)

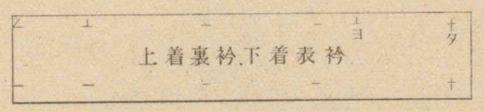
衽





ヌル＝裾廻の丈　リヌ＝燧附(燧布トチと同寸)　ヲワ＝衿附





衿　衿の表裏4枚を各二つに折り,下着の裏から順に重ね,普通に標し,次に上の表衿を除き,上着裏と下着表に衿先より衽のヲワと同寸にヨタを標す。

身頃衽の縫方

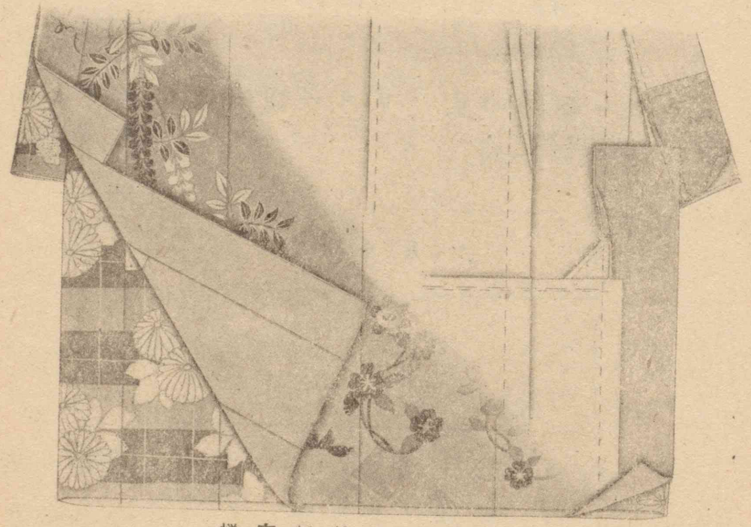
(1)表身頃　普通に脊脇を縫ひ,衽附衿附をする。

(2)裏身頃　胴裏・下着裾の脊脇を縫つて胴接をし,衽附・衿附をする。

(3)下着表裾・上着裾廻の脊・脇・衽を縫ひ合せる。

(4)下着の裾合をして縦綴をする。

燧布・衽附・衿附を下圖説明のやうにする。



燧布・衽・衿のつけ方

(5)燧附は,下着の表に胴拔地を接ぎ,折を裾の方に返し,上着の裾には胴裏地を接ぎ,折を胴の方に返して各隱躾をする。

(6)上着裾廻・下着表裾の奥を合せ,燧附際で四つ留をして,燧と裾の奥を縫ひ合せ,その縫代を胴接に綴ぢ,次に裾廻全體の縫代を胴裏に隱躾

で綴ぢつける。

(7)上着裏衽・下着表衽を燧布に縫ひ合せ,その終で布の重り順に四つ留をする。次に兩衽の衽附標より 0.2cm 衽幅を狹く縫ひ合せ,裏衽の縫代に綴ぢつける。

(8)上着の裾を合せ,縦綴をして衿下を縫ふ。

(9)袖附　留は6枚で袷と同じにし,表・裏の袖附をする。八つ口布は,袖附留より上を表裏合せて縫ひ,その縫目を裏袖附に綴ぢつける。

(10)衿附　上着裏衿と下着表衿を各,竪褄の衿附標に縫ひ合せ,それより上は,2枚の衿を中表に衿附標を縫ひ合せ,下着に綴ぢ,次に衿の附分際を布の重り順に留め,4枚の衿附を綴ぢて,衿紵・共衿かけをする。

(11)裾綴

(12)仕上

3. 綿入本比翼　寸法の詰方は,綿入の重と同じにする。

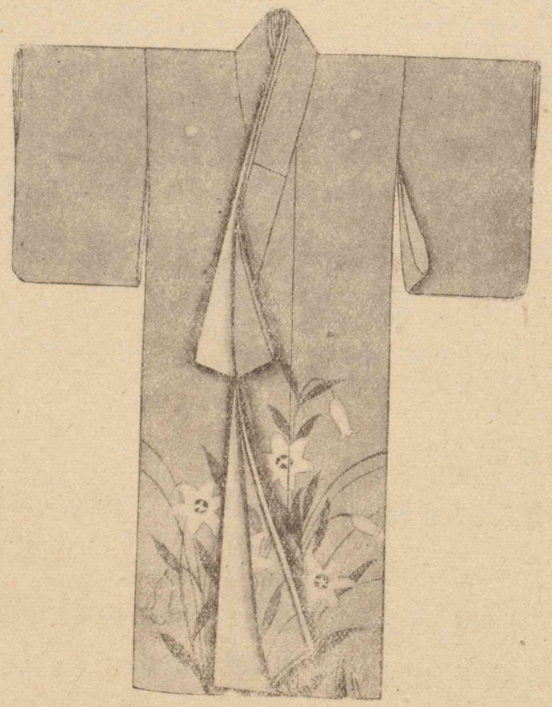
縫方　表を普通の綿入と同じに縫ひ,裏には,上着の裏と下着の表裏を3枚綴ぢつけておき,これを1枚と見做して普通に綿入をする。

第三節　單衣重

種類　本重・半重・二枚重などがある。

用途　婦人用で,主に式服に用ひられる。

上着は麻・上布・紗・絽・絽縮緬・縮緬などの紋附・模様物,下着には練絹または上着と同質の白・薄色物などを重ねる。

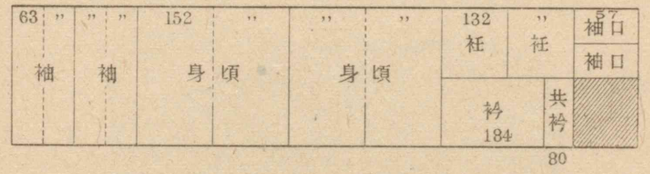


單衣本重

〔第一種　本重〕

1. 裁方　上着・下着とも單衣と同じにして,共の袖口布をとる。

裏衿は表と配合のよい色を選び,上着と下着に同じものをつける。



2. 仕立方

(イ)標附

上着　すべて單衣の通り。但し衽は下着と4枚重ねて標す。

(1)下着袖　寸法の詰方は,袷の裏と同じにする。

(2)下着身頃

丈　上着より0.2cm詰めて裾絎の標をする。

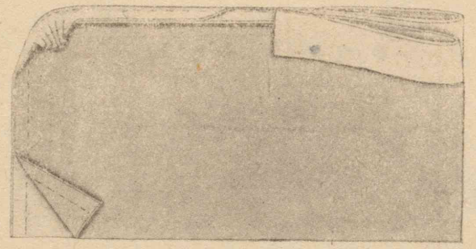
幅　裾口で0.3cm内外詰める(上着の地質の厚薄で加減する)。

(ロ)縫方

(1)袖　上着・下着とも單羽織の袖口と同じに

して袖口布より4cm下まで縫ふ(上着の袖口布の端は縫はずにそのままでおく)。

下着袖口下の縫代を表の方に出し,上着の裏と合せ,袖口下から袖下まで袷と同じに四つ縫にし,八つ口も被を1cmにして袷のやうに縫ふ。

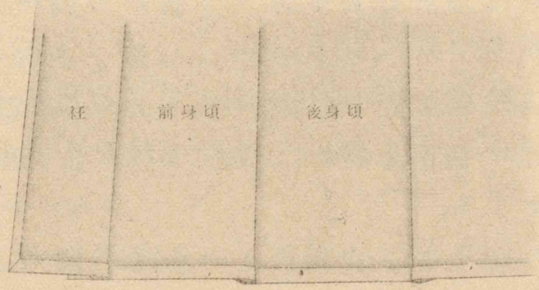


(2)身頃

(a)上着の脊·脇を縫つて,前幅·後幅の裾絎をする。衽の褄先を額縁に縫ひ,衿下から裾の方を5cm絎け,絲をそのままにして衽附をする。

(b)下着身頃の裾を4枚とも別々に裏の方に三つ折にして絎け,衽も衿下と裾とを絎ける。

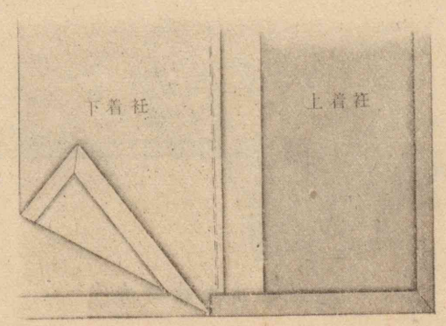
次に脊·脇·衽附など縫代を皆表に出して縫ひ,裾の縫代を三角に折つて綴ぢつけておく。



下着の裾絎·脊縫·脇縫·衽附の仕方

(c)上着·下着を重ねて脊·脇の縫目を綴ぢ,身八つ口·袖附を袷の通りに縫ふ。

(d)衽附の綴をして,上着の衽裾で,衽附縫込をくるみ,圖のやうに絎け,次に衿下の間だけ衽綴をする。その仕方は,先づ上着は裏を見て縫込を衽に綴ぢつけ,下着は外側から衽の縫込に綴ぢつける。上着と下着と同色の時は,縫代にかけずに衽だけ綴ぢ合せる。



衽綴と裾絎の仕方

(2)衿附　下着が練絹のやうに薄地の時は,衿に芯を綴ぢつけておく。

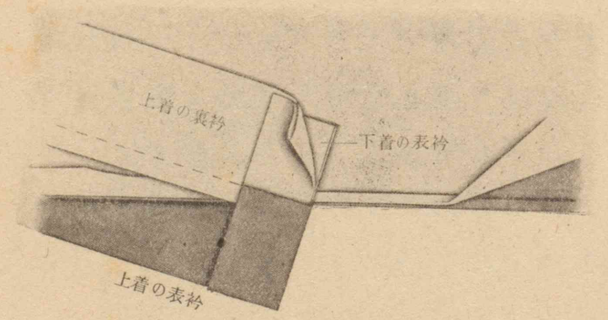
下着は衿丈を0.5cmほど詰めて,二枚重のやうに各,普通につけ,上着は三つ衿で幅を0.4cm詰めて衿絎をする。

上着の裏衿と下着表衿とを合せ,衿附の被山を綴ぢ合せる。

(ハ)仕上

(3)衿附別法　下着の衿先を縫ひ,衿幅を定めて,衿絎の部分を裏控に縫ひ,下着表衿に上着の裏衿を合せて綴ぢつける。

衽先を整へ,上着表衿を普通に布合して待針を打ち,下着の裏衿の方を裏衿のやうに合せて



單衣重衿先の縫方

4枚一緒に待針を打ち,一針拔に縫ふ。次に上着の衿先を縫ひ,衿絎をする。

注意　この仕方は衿附が固くなる。また1本の絲で衿附をするから,上着と下着の色の變つたものには不適當である。

〔第二種　半重〕

袖と衿は本重と同じにして,身頃と衽は身丈×$\frac{1}{2}$+10cmの裾を本重の下着と同じやうにして縫ひつけ,下着の上端を上着に絎けつける。

第十二章

夜具類

1. 用布 地質は綿布·絹布·メリンスなどの輕く軟く暖いものが適當である。夏物には麻布も用ひられる。

表は縞·模樣など大柄のもの,裏は無地物にするのが普通である。

夜具類は,よく干して用ひるから,日光に耐へる染色を選ぶ必要がある。

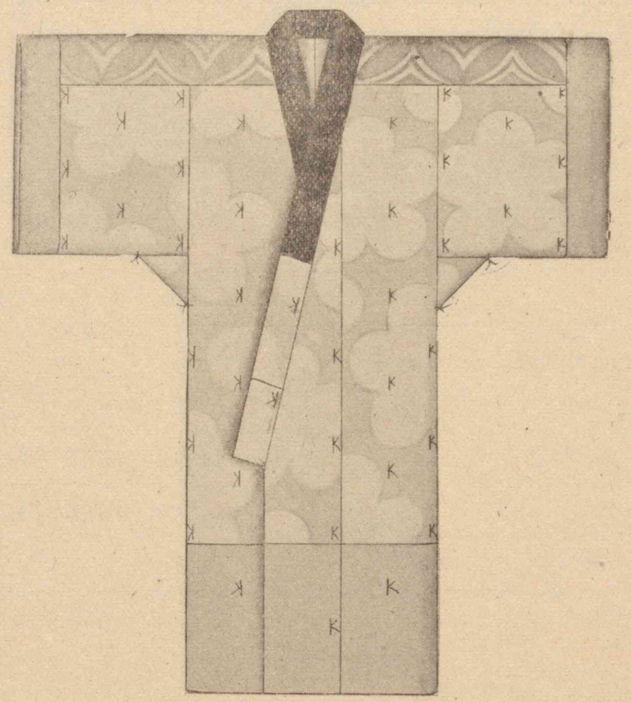
2. 用綿 普通は木綿綿を用ひるが,眞綿·絹綿·パンヤ及び鳥の羽毛なども用ひられる。

木綿綿 赤綿の品質は優良でないが,彈力があるから,敷蒲團に用ひれば,白綿より却つて使用價値がある。白綿は引はあるが,固くなり易いから,掛布團に用ひるに適する。

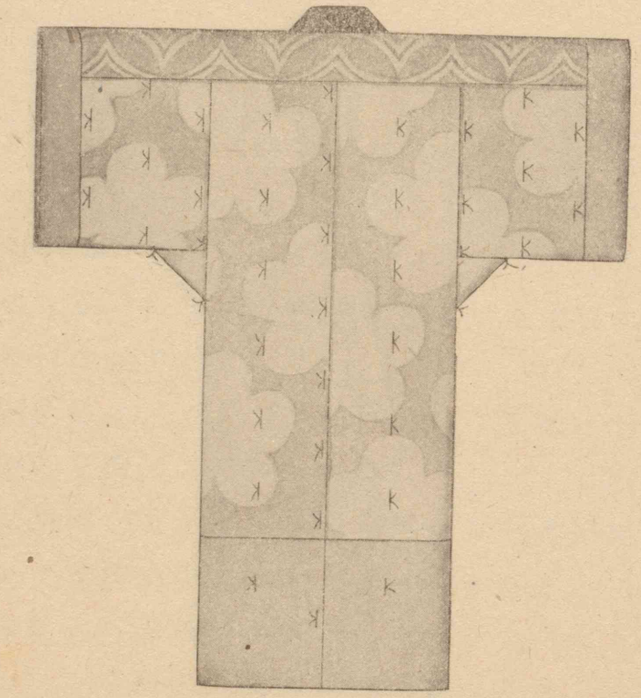
第一節 夜着

1. 種類 大夜着·中夜着·小夜着·搔巻(かいまき)·褞袍(かいつくろい)などがある。

2. 夜着の形



夜着(前)



夜　着（後）

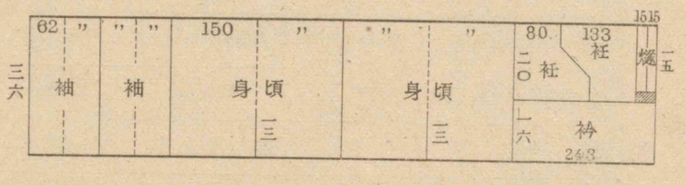
3. 夜着仕立上寸法

名稱＼種類			大	中	小	(並幅四つ身裁)小兒用
袖	丈		62cm 內外	60cm內外	55cm內外	50cm內外
	幅	表	並幅いつぱい	〃	32cm	25cm
		裏	並幅2布	〃	並幅1布半	表+(衽×2)
		袖衽	15cm	13cm	8cm	8cm
燧(裁切)			17cm	15cm	11cm	9cm
身頃	丈		200cm 內衽50cm內外	190cm 內衽40cm	180cm 內衽30cm	125cm 內外20cm
	衿肩明		14cm內外	12cm乃至13cm	12cm乃至13cm	9cm
	後幅		並幅いつぱい	〃	〃	裁切一ぱい
	前幅		並幅いつぱい	〃	〃	いつぱい
	衽下り		23cm	21cm	19cm	13cm
衽	幅		半幅いつぱい	〃	〃	いつぱい
	衿下		75cm	70cm	65cm	32cm內外
衿	衽		23cm	20cm	15cm	10cm
	幅		13cm	〃	11cm	7cm
	掛衿丈		140cm	〃	130cm	100cm
綿			20枚內外	15枚內外	8枚乃至10枚	5枚內外

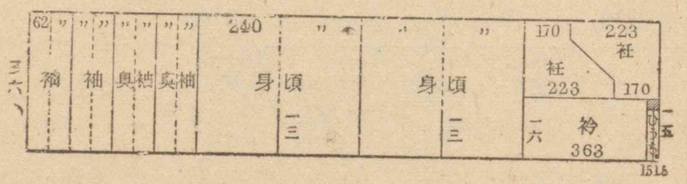
注意　(1)蒲團綿1枚は300g餘。(2)仰臥する人に用ひる夜着搔卷は衿肩明を大きくする。

4. 裁方　中夜着

(イ)表　用布　1反(並幅 101cm)

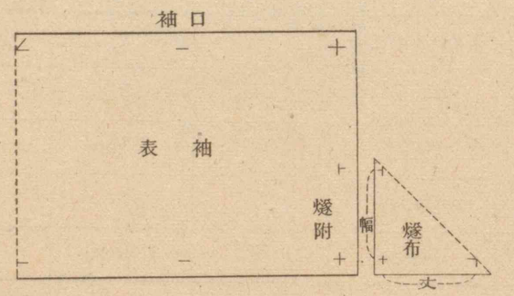


(ロ)裏　用布　並幅 1849cm

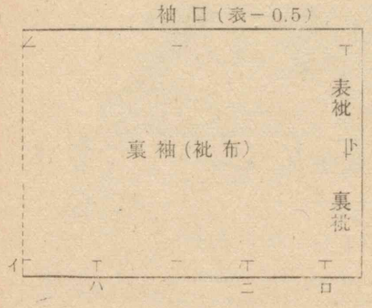


5. 仕立方

(イ)標附　(1)袖の標附



燧附＝燧幅と同寸



裏袖丈＝袖口より袖幅の中央トまでは表袖丈－0.5cm

イロ＝表袖丈－3cm

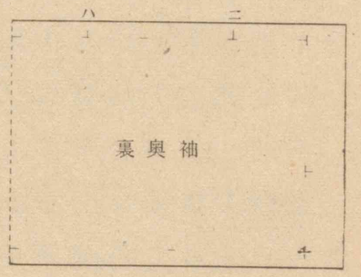
(大夜着は4cm
小夜着は2cm)

奥袖丈＝表袖丈－3cm

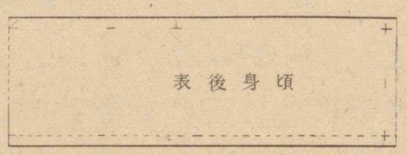
幅＝表袖幅と同寸。

燧附標をする。

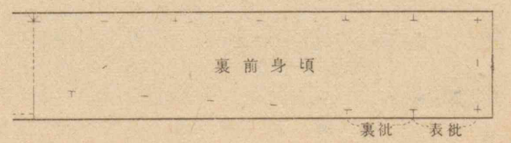
裏袖と裏奥袖とを合せ,合標ハ·ニをする。



(2)身頃·衽·衿の標附

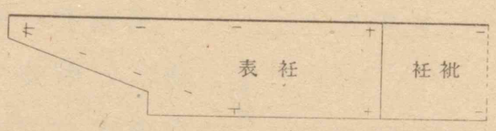


袖附＝袖丈＋燧布丈



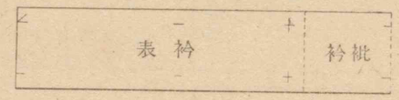
裏前身頃の袱の部分の幅は,前幅と同寸。

(3)衽



裏衽に表衽を重ね,裾袱だけ折返して標す。

(4)衿



裏衿の上に表衿を重ねて衿丈を計り,衿袱の分を折り返して接と幅の標をする。

6. **仕立方** 縫目にはすべて隱鋲をする。

(イ)袖 袖口合をする。

表袖と奥袖に燧布をつけ,袖の方に折を返し,燧角をとめて各袖下を縫ひ,縫代を前に折る。

(ロ)身頃及び衽衿 表裏とも脊縫·脇縫·衽附·裾合·衿下を縫ふ。衿下の折は表に返す。

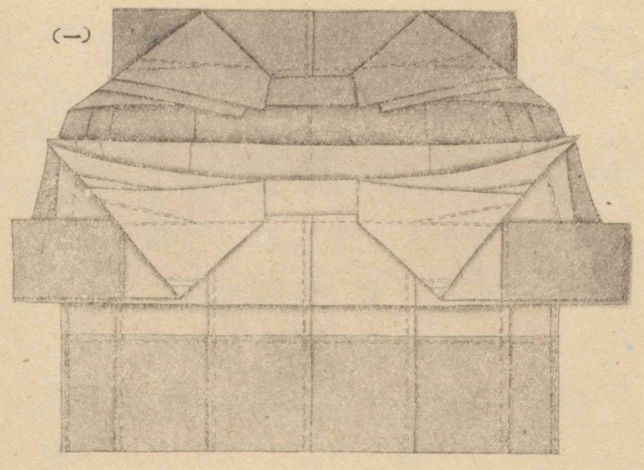
衿の表裏を接ぎ,衿下標を衿の袱山でくるみ,留をして,表衿から裏衿の方につけ廻し,廣衿のやうに衿幅を裏控にして,衿先を20cm縫ふ。

(ハ)袖附 表裏の袖附をして,兩方とも縫代を袖の方に折る。

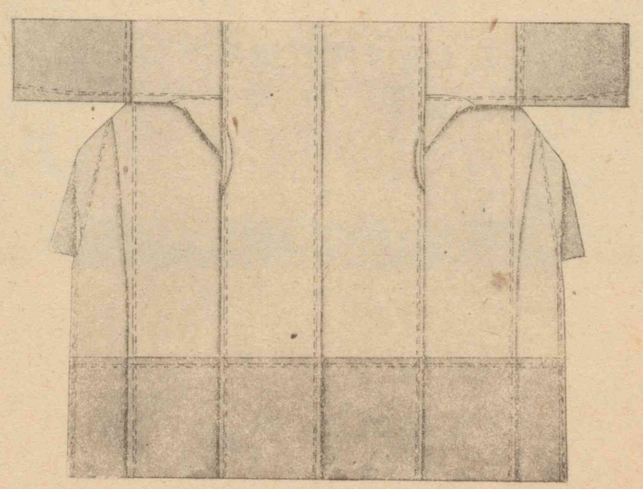
(ニ)綿入

全體を裏に返し,表身頃の後を上におき,兩袖

(一)



(二)

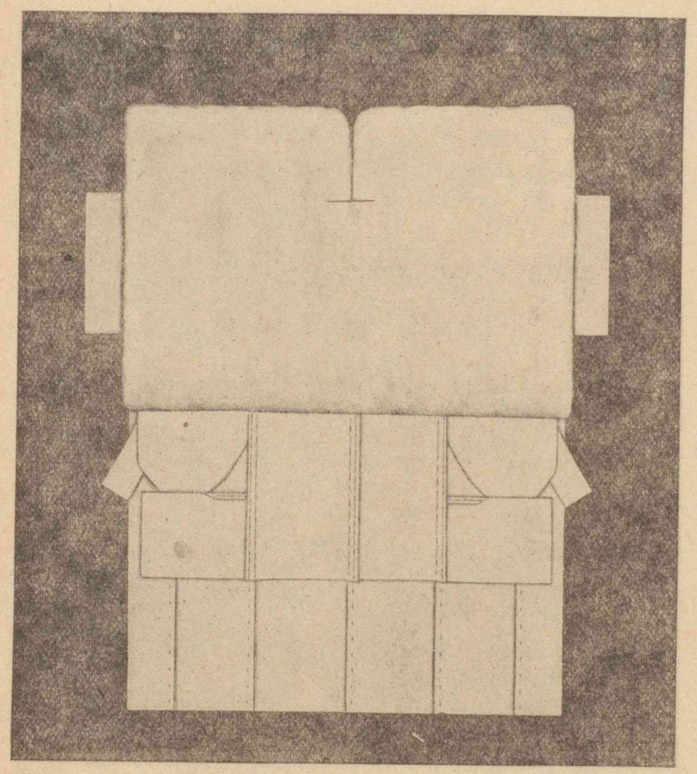


綿入の畳み方

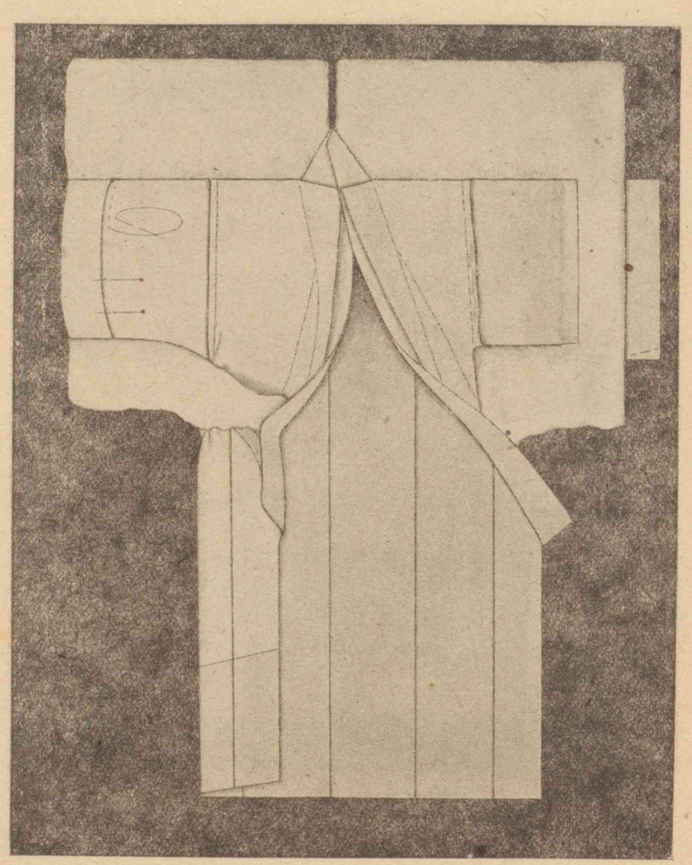
山を袖下まで折り込み,袖と前身頃を平らに整へる(179頁圖參照)。

袖附の下から裾まで綿を入れる。初の綿1枚は裾口に丈50cm,衿下に幅20cmぐらゐ出し,次の綿から周圍を5cmぐらゐづつ詰め,縱に横に方向を替へ,接目が重ならぬやうに注意する。衿下と裾には袱綿を2,3枚入れて折り返し,角を平らに整へ,その上に1枚綿をおいて縫目·角などに引絲をつけ,綿を入れた部分だけ表に返す。

次に表の身頃と袖の山を擴げ,その上に,綿を肩山よりも長くして次頁圖のやうに入れ,袖口の袱綿をつくる。



綿入圖(その一)



組入圖（その二）

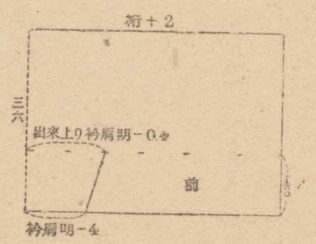
裏の肩山を擴げ,裏袖と奥袖の合標を合せて縫ひ,奥袖の方に折を返し,前袖·前身頃に綿を入れて表に返し,表裏を引き合せる。

(ホ)衿紡·綿を平らにして表で綿をくるみ,裏を合せ,隱躾をして紡ける。

(ヘ)綿の入方別法に,裏の脊縫の上部を凡そ100cmほど縫ひ殘し,そこから表に返す仕方もある。

(ト)綴　絲は,練絲(ねりくり)または木綿縫絲など地質に應じたものを用ひ,各縫目と幅の中央に綴をする(針目は4cm,綴のへだたりは30cmぐらゐ)。

(チ)肩當　裁目を伏縫して肩に合せ,後前を紡けつけ,衿肩明の廻は假綴をする。



(リ)掛衿　掛衿をかける。

第二節 蒲團

1. 種類 仕立上寸法及び綿の分量

	敷布團	掛布團	座布團
幅	並幅3布	1並幅(表4布裏5布) 2並幅(表4布裏6布)	55cm内外
丈	185cm	190cm乃至200cm	幅と同寸または少し長く。
綿	15枚乃至20枚	1 12枚乃至15枚 2 15枚乃至18枚	4 枚乃至3枚 半・大は7枚

2. 敷蒲團

(イ)裁方　1反を3枚に裁ち切る。

(ロ)縫方　3布を縫ひ合せ(裏側に120cmの返口を縫ひ殘す)。一方に折を返し,隱躾をする。

丈を二つに折り,三方を縫ひ,折を表側に返して隱躾をする。

(ハ)綿入　裏返にして表側の方を上におき,その周圍に綿が40cmほど出るやうにしておき,次に綿を蒲團側と同じ大いさにして,横に縦に一並びづつ重ね,接目も同じ所にならぬやうに注意し,周りを最初の綿でくるみ,その上に綿を1枚擴げて整へる。

引絲を四隅と幅・丈に3個所ほどつけて,四隅から卷いて表に返し,綿をよく引合せる。

返口は縫へるだけ縫つて,殘りを絎ける。

(ニ)綴　縫目に5個所ぐらゐ,布幅の中央は縫目の綴と交互になるやうにする。

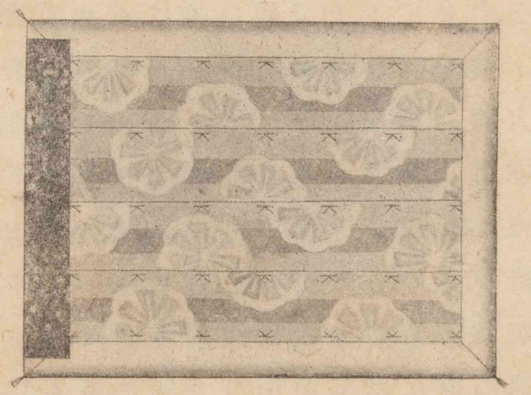
(ホ)枕標　輪の方につける。

注意　綿の入方は197頁座布團の綿入説明と同じ仕方でするもよい。

3. 掛布團

4布・5布などあるが,普通のものは敷布團のやうにつくる。

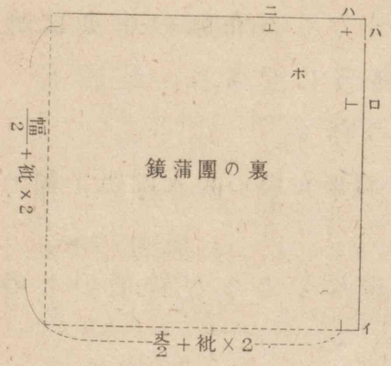
鏡蒲團



(イ)裁方　裏布は,表布より丈・幅とも袵×4を增す。

(ロ)縫方　表・裏の各布を接ぎ合せ,裏の中央に120cmの返口を殘す。

(ハ)標附



裏布額縁

裏布の丈幅を各二つ折にする。

イロ＝表布幅と同寸。

ロハ
ハニ　袱×2

ホ＝丈·幅兩袱山の交叉點。

ニ·ロを合せてホまで縫ひ,折はイロの方に返す。表と裏を縫ひ合せ,縫代を表の方に折る。

(ニ)綿入·綴　敷蒲團の仕方と同じである。

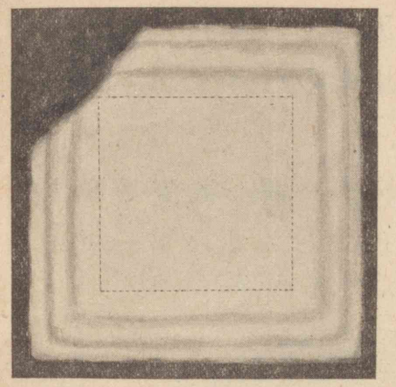
4. 座布團

(イ)縫方　布が長方形のものは二つ折にして二方を縫ひ,表の方に折を返して隱縫をする。また布が正方形のものは四隅を合せ,返口だけ殘して縫ひ,或は別布を用ひて鏡に縫ふ。

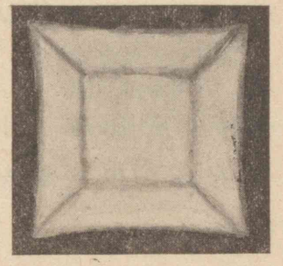
(ロ)綿の入方

(1)表布の裏を上にして,綿を周りから20cmぐらゐ出して擴げる。

(2)2枚目も3枚目も,順に下の綿より周りを



(一)



(二)

5cmぐらゐづつ控へて重ねる。

(3)綿の角を三角に切りとる。

(4)四邊の綿を表布に倣つて3枚重なつたまま一緒に折る。

(5)角の綿は1枚づつ合せて整へる。

(6)眞中には折返した綿の寸法だけ控へて同じ厚さだけの綿を入れる。

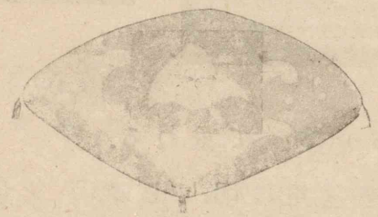
1枚目は廻より20cm詰め,2枚目は15cm,3枚目は10cmといふやうに次第に大きくして,全體の綿を平らに重ねる。

(7)表に返して返口を絎ける。

(ハ)綴　角の尖つた部分を押し込み,形を整へ,二本絲で細結にして留め,その絲を切らずに,そ

の絲で横または縦に大きく綿を抄つて留の絲と8本を一束に結び,適當の長さに切り,飾絲にする。

眞中は二本絲で十文字に渡し,表·裏兩面とも4個所から出た絲を長くしてこれも一束に結び飾絲にする。



出來上り

—終—

昭和11年4月23日 初版印刷 昭和11年4月26日 初版發行
昭和11年11月23日 訂正再版印刷
昭和11年11月26日 訂正再版發行

新裁縫教科書

定價 卷二金88錢

著作者 磯畑せい
村瀨初代

東京市麹町區飯田町2丁目20番地
發行者 中等學校教科書株式會社
代表者 山本慶治

東京市京橋區木挽町3丁目11番地
印刷者 (東東81) 新井修平

(略名)富山磯畑裁縫二

東京市麹町區飯田町2丁目20番地
發行所 中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號 117522

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町2ノ9

縣立沙井
17 二櫻四一
天津豊子